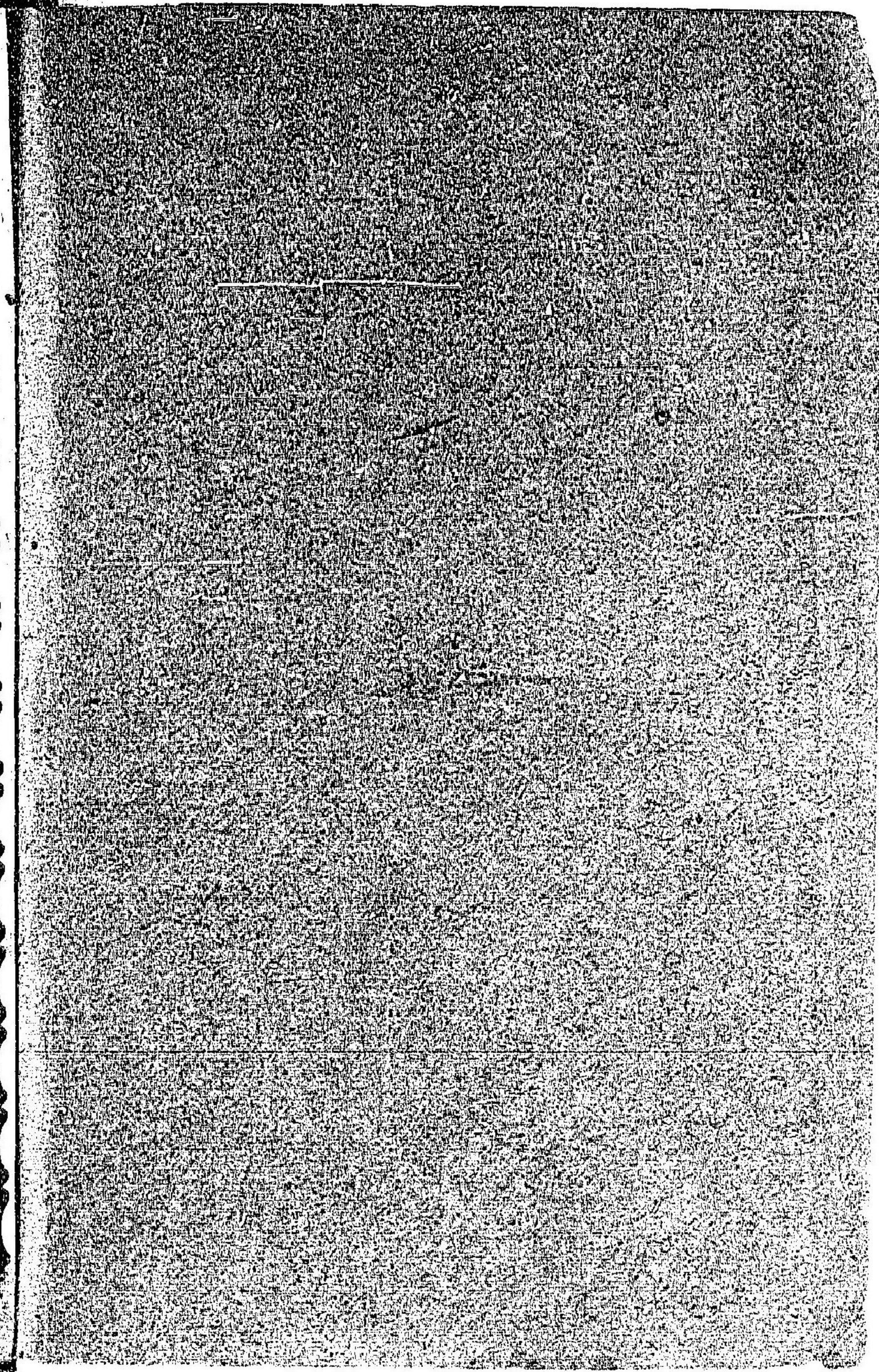
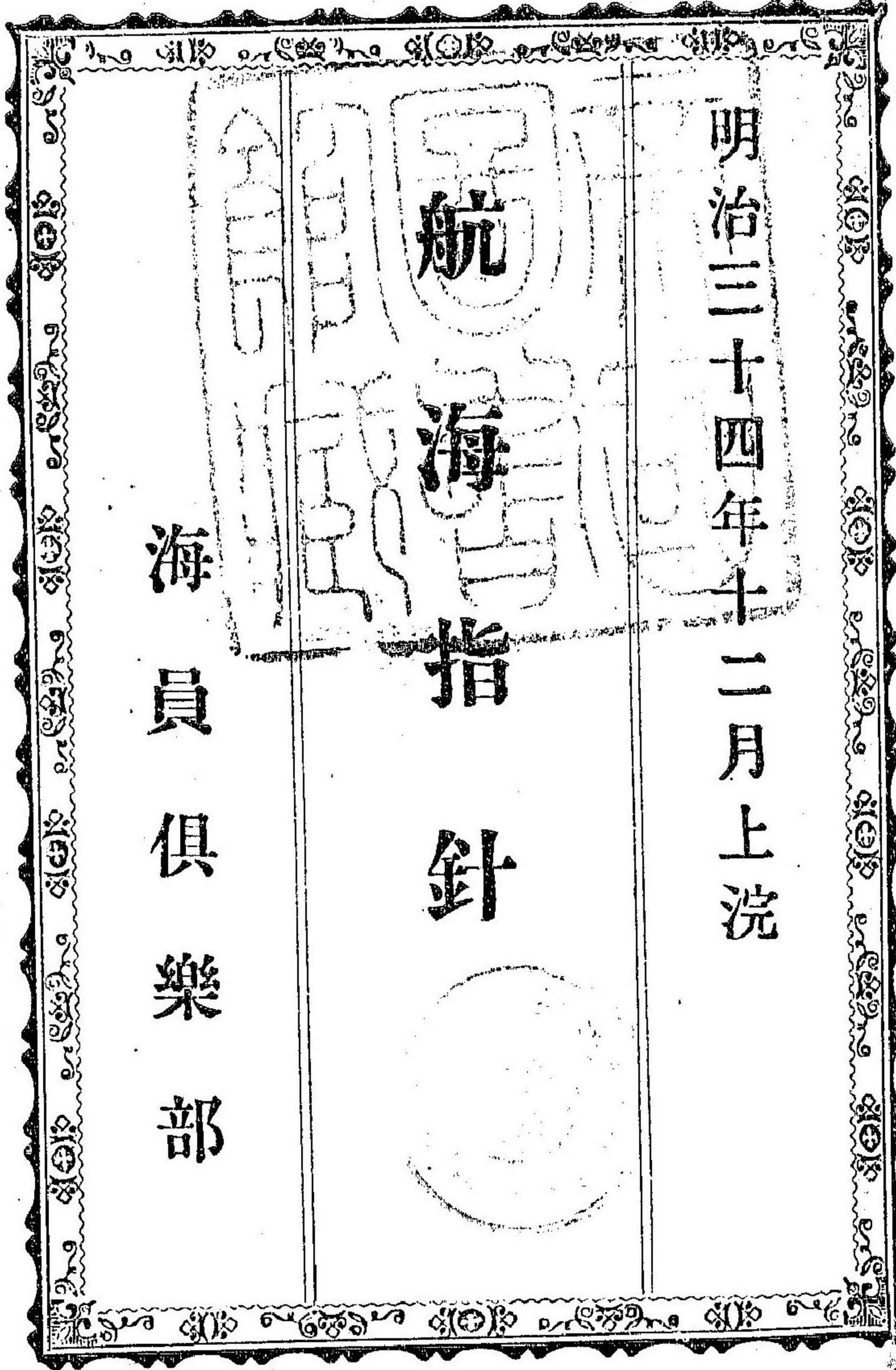


明治三十四年十二月上浣

航海指南

海員俱樂部



叙

海運業ノ主眼ハ航海ノ安全速達ニアリ本書發行ノ趣  
意亦此一點ニ外ナラズ

航海ノ危険ニ二種ノ別アリ一チ天災ノ危険不可抗力  
ト云ヒ他チ人爲ノ危険即チ衝突坐礁火災及覆没ト云  
フ

今ヤ人智ノ發達船員ノ妙技ハ彼抵抗ス可カラザル天  
災尙ホ往々是ヲ避ク況ンヤ人爲ノ危険ニ於テチヤ能  
ク海上衝突豫防法ノ精神ニ通曉シ天測及推測ニ精勵  
シ時々刻々本船ノ位置ヲ確知シ豫テ貨物載積ニ注意  
シテ而シテ航海ニ碇泊ニ卓絶ノ妙技能ク危険ヲ轉シ  
テ安全ト爲スヲ得バ航海者ノ職責依テ以テ全シト謂

フ可シ本書ハ年々是ヲ新刊シ年々増補シテ遂ニ完全  
無缺ノ袖珍書ト爲サント欲スト云爾

明治三十四年十二月 海員俱樂部

### 航海指針目次

#### 卷首の部

- 瀛船職員航海中當直心得……………一
- 船舶職員碇泊中當直心得……………四
- 海上衝突豫防法……………五
- 海上法規拔萃……………二三
- 船員法……………三〇
- 船員法施行細則……………五一
- 開港港則實施港……………七〇
- 開港港則……………七一
- 開港港則施行細則……………八二
- 港務局所屬繫船浮標使用料規程……………八八
- 橫濱港規程……………八八
- 神戸港規程……………九二

○長崎港規程	九七
○門司港規程	一〇一
○日本氣象區及測候所	一〇六
○海岸望樓位置	一〇九
○改正增補萬國船舶信號書凡例	一一〇
○東洋燈臺表	一四三
○漁船公稱馬力算定方法	一七四
○大小諸索、鐵鎖緊張力比較法	一七五
○麻索に比適する鐵鎖、鐵索表	一七七
○滑車に適當なる「ストロップ」表	一七七
○麻索、鐵鎖、鋼索張力表	一七八
○船積貨物の重量	一八一
○金屬板各厚一平方尺の重量	一八二
○角鐵、圓鐵長一尺の重量	一八三

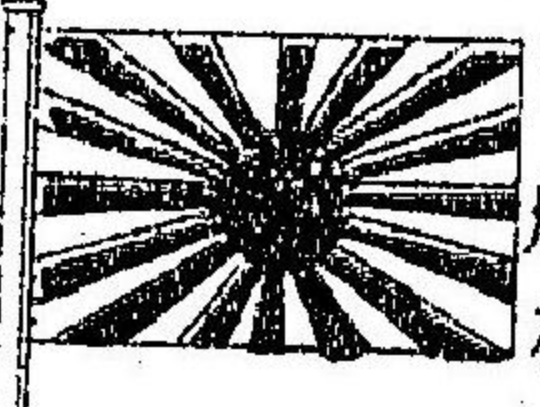
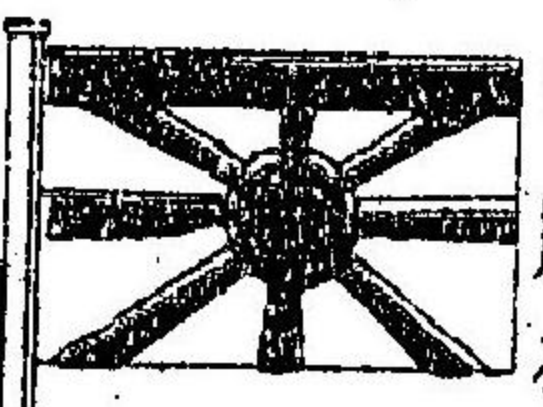
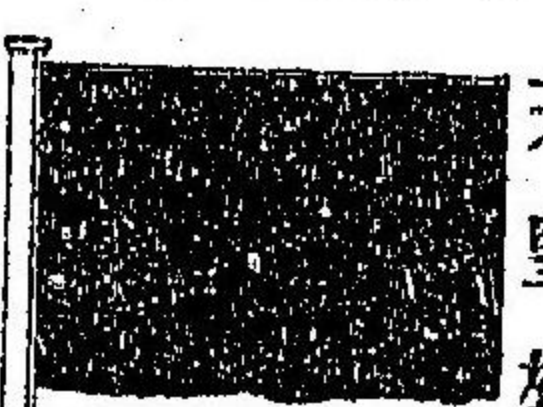
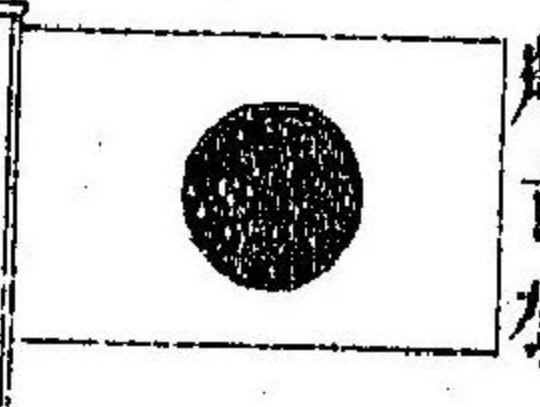
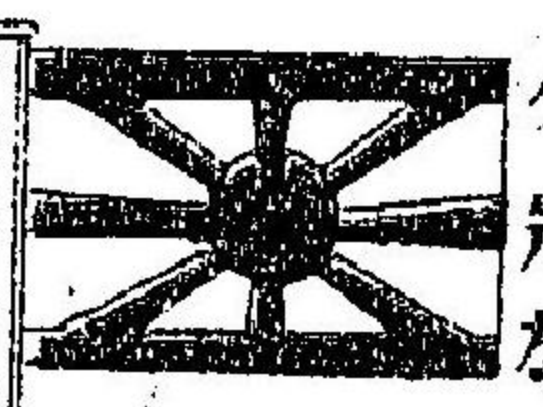
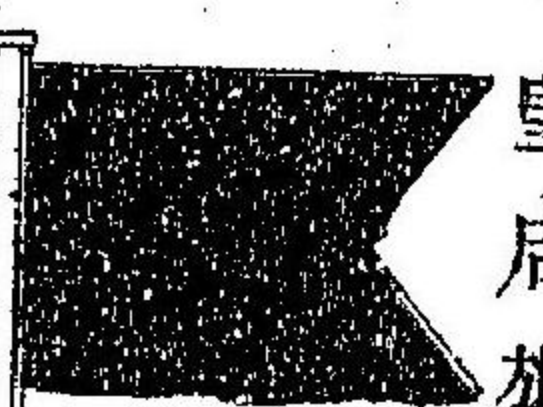
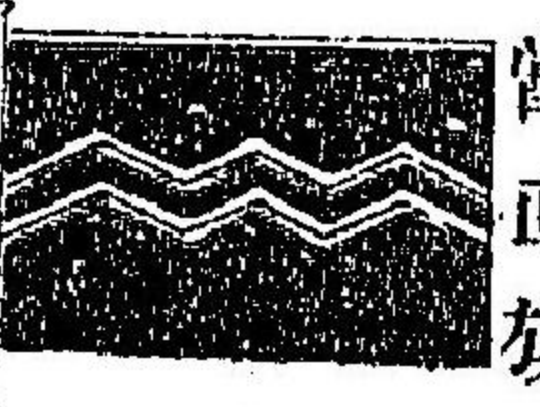
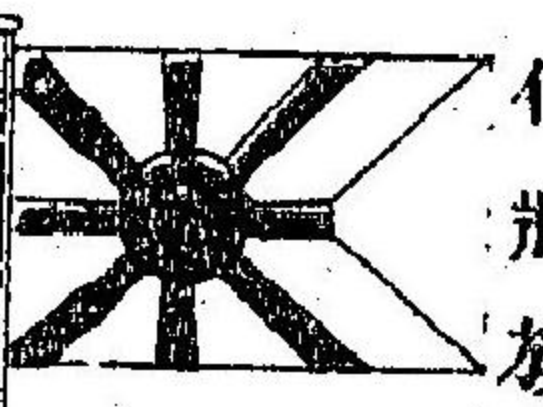
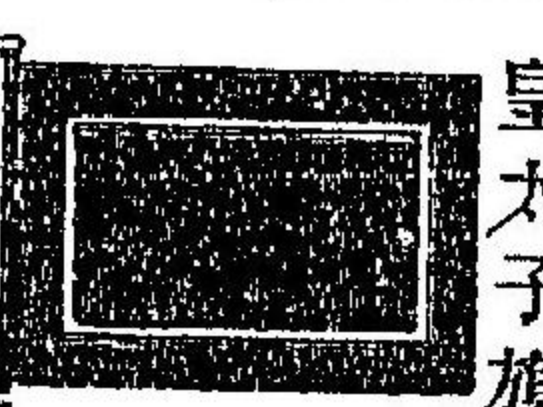
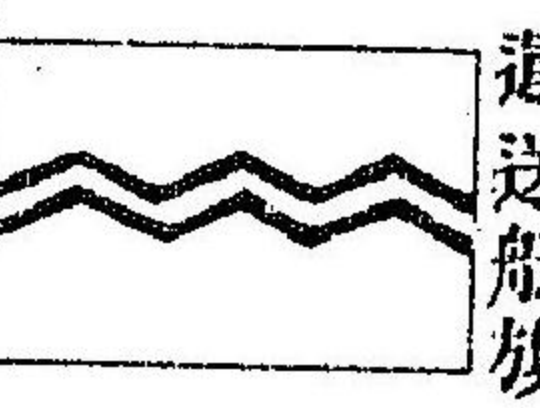
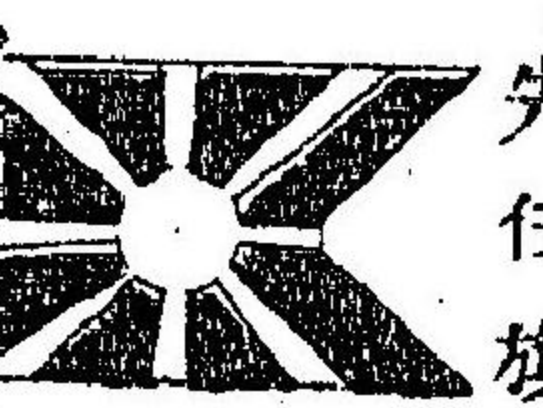
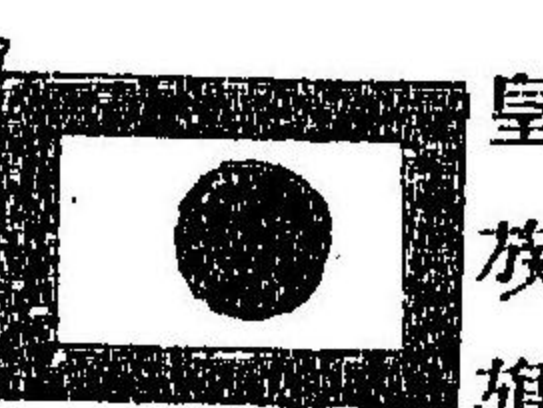
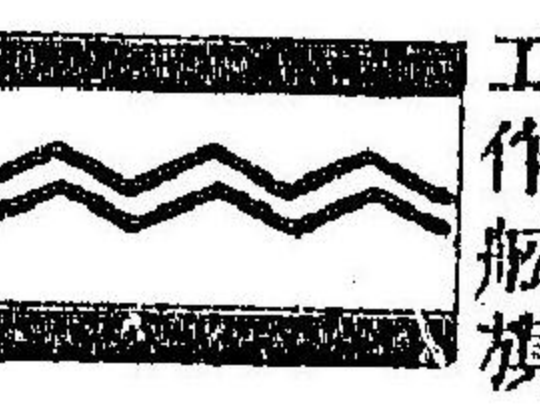
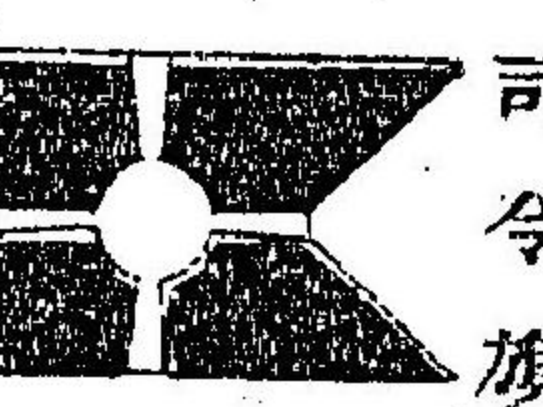

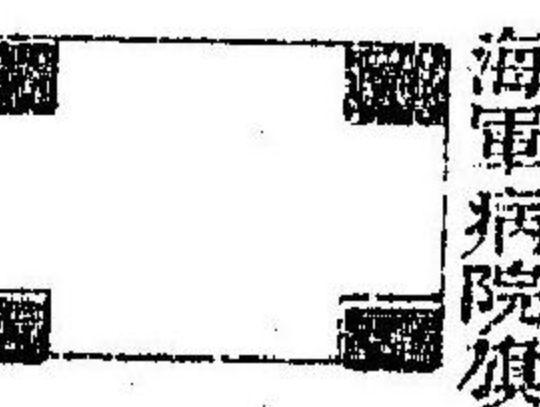
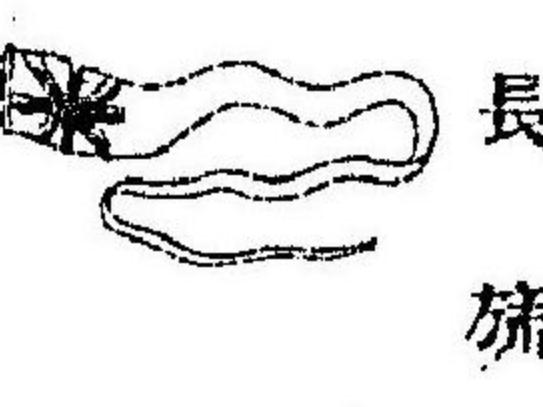
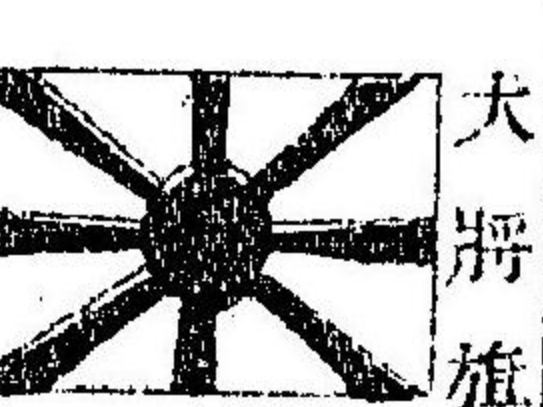
○淡水量	一八四
○容積量雜件	一八四
○中外比較各國貨幣及度量衡概表	一八八
○帆布	一九九
○水路部刊行海圖及海誌類目錄	二〇一

航海指針卷首目次終

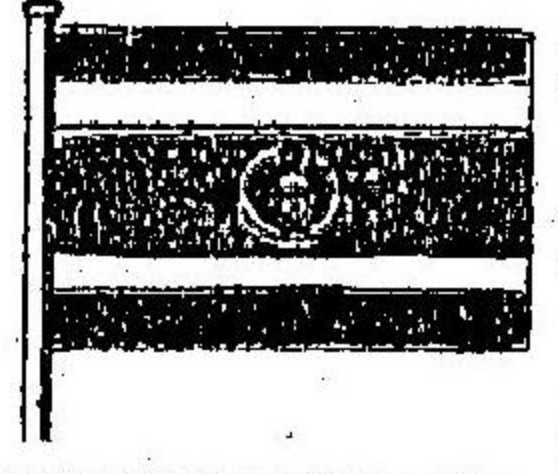
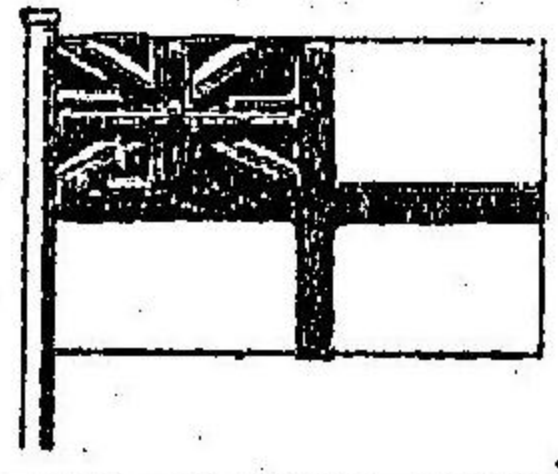

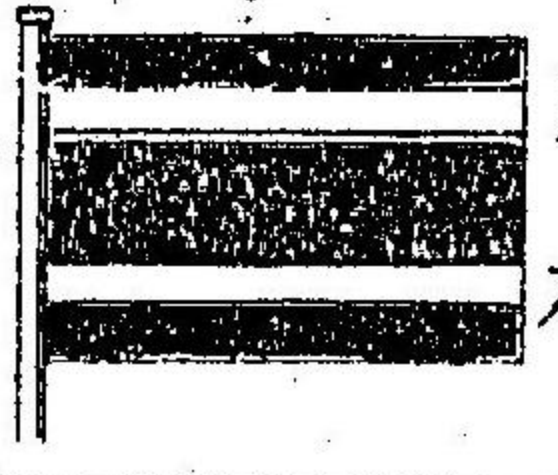
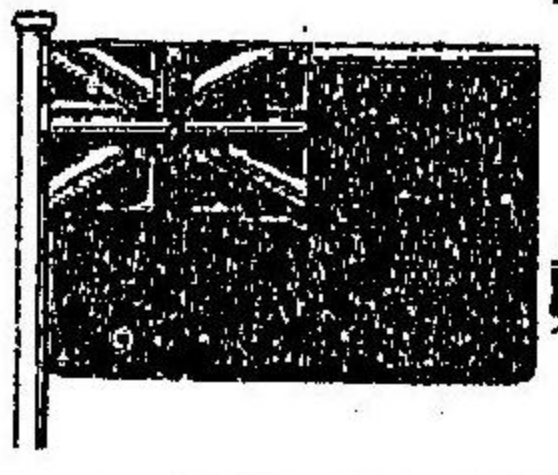
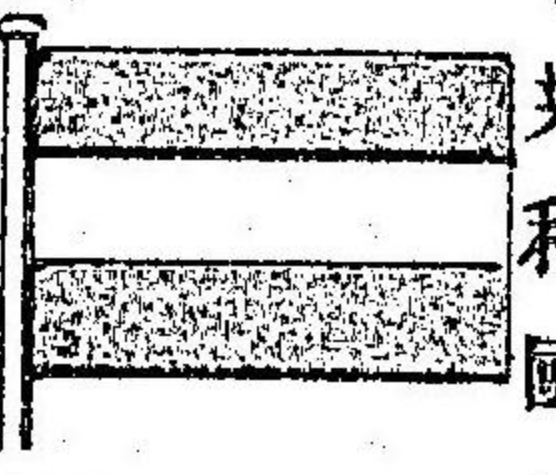
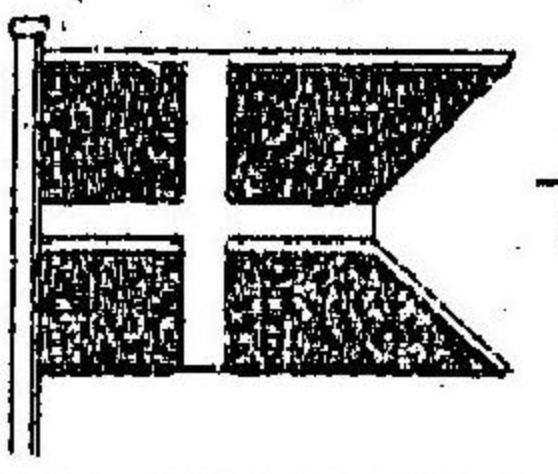
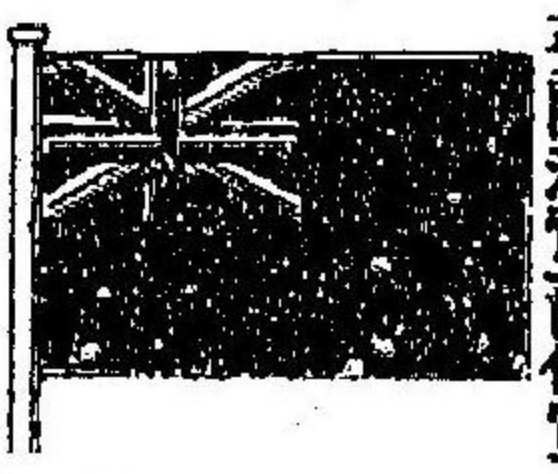
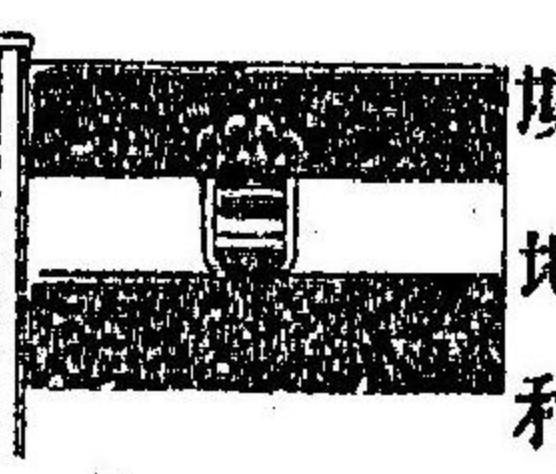
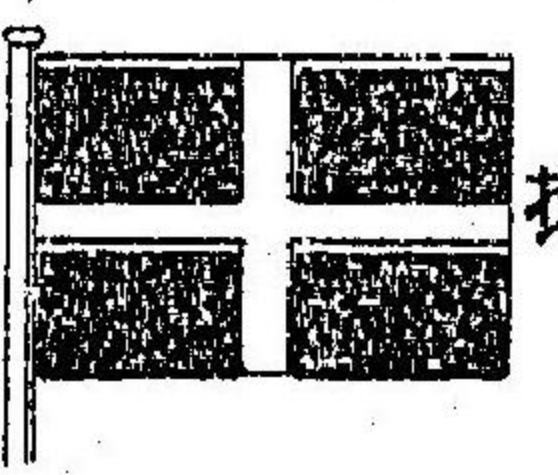
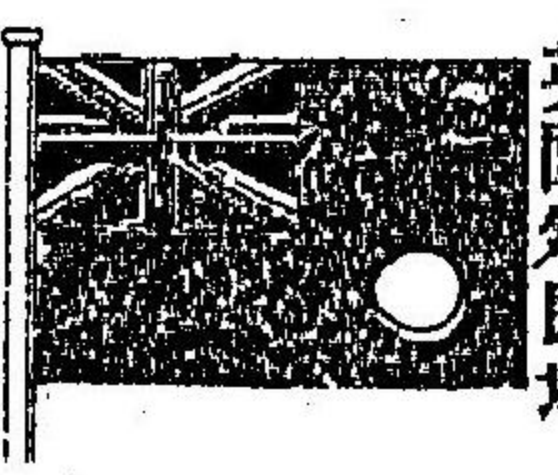
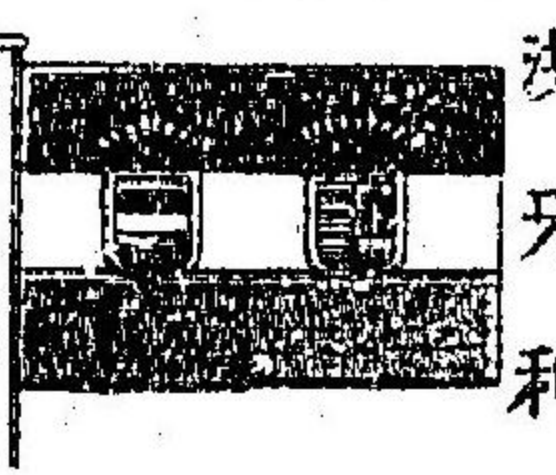
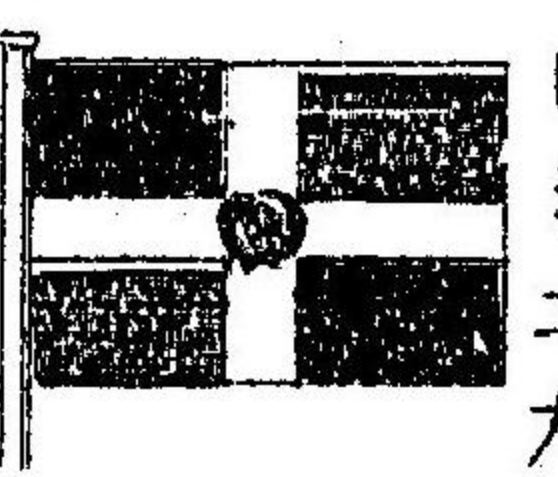
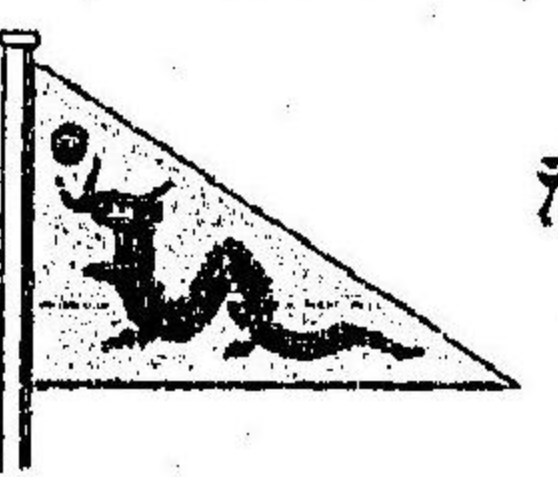
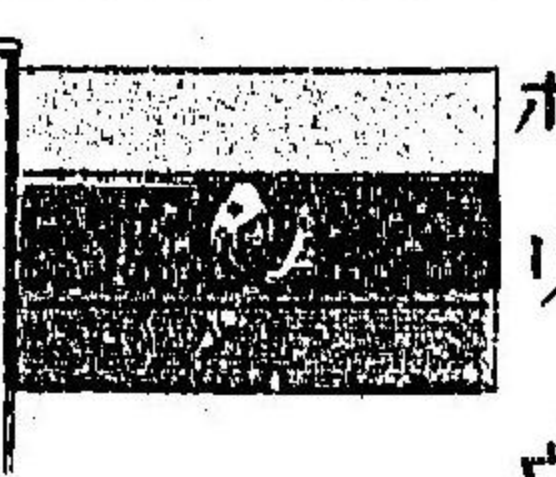
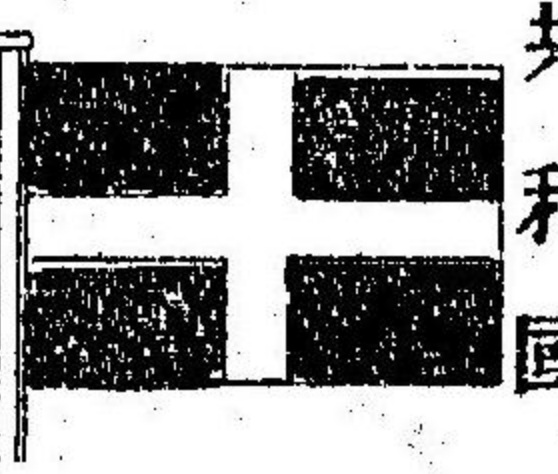
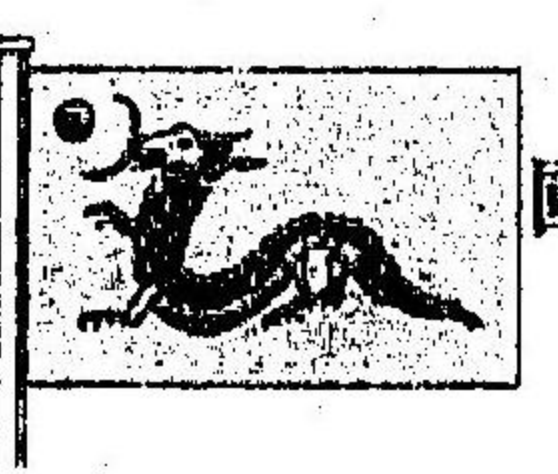
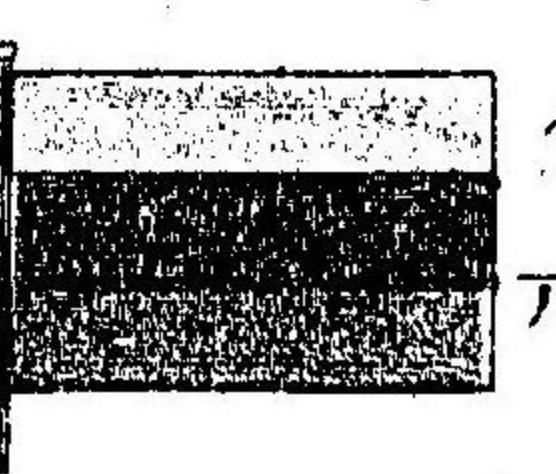
明治三十五年略曆

四月	元始祭 一月一日	神武天皇祭 四月三日	神武天皇即位紀元二千五百六十二年	大	一	二	三	五	七	八	十	十二
三月	孝明天皇祭 一月三十日	秋季皇靈祭 九月廿四日	ひびん 三月十八日	三	五	七	八	十	十二	十三	十四	十六
二月	紀元節 二月十一日	神嘗祭 十月十七日	小かん 一月六日	五	七	八	十	十二	十三	十四	十六	十八
一月	春季皇靈祭 三月廿一日	天長節 七月三日	大かん 一月廿一日	七	八	十	十二	十三	十四	十六	十八	二十
六月	新嘗祭 十二月廿三日	土	七月廿一日	九	十	十二	十三	十四	十六	十八	二十	廿二
五月	表曜日	小	十月廿二日	十一	十二	十三	十四	十六	十八	二十	廿二	廿四
四月	六日	三	十一月廿九日	十三	十四	十六	十八	二十	廿二	廿四	廿六	廿八
三月	九日	六	十二月廿六日	十五	十六	十八	二十	廿二	廿四	廿六	廿八	三十
二月	十二日	九	一月廿三日	十七	十八	二十	廿二	廿四	廿六	廿八	三十	三十一
一月	十五日	十二	二月廿日	十九	二十	廿二	廿四	廿六	廿八	三十	三十一	三十二
六月	十八日	十五	三月廿七日	廿一	廿二	廿四	廿六	廿八	三十	三十一	三十二	三十三
五月	廿一日	十八	四月廿四日	廿三	廿四	廿六	廿八	三十	三十一	三十二	三十三	三十四
四月	廿四日	廿一	五月廿一日	廿五	廿六	廿八	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五
三月	廿七日	廿四	六月廿八日	廿七	廿八	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六
二月	三十日	廿七	七月廿五日	廿九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七
一月	三十一日	廿八	八月廿二日	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九
六月	三十一日	廿八	九月十九日	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一
五月	三十一日	廿八	十月十六日	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三
四月	三十一日	廿八	十一月十三日	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五
三月	三十一日	廿八	十二月十日	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七
二月	三十一日	廿八	一月七	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九
一月	三十一日	廿八	一月四	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一

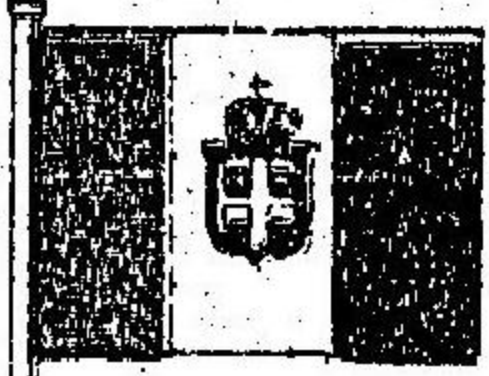

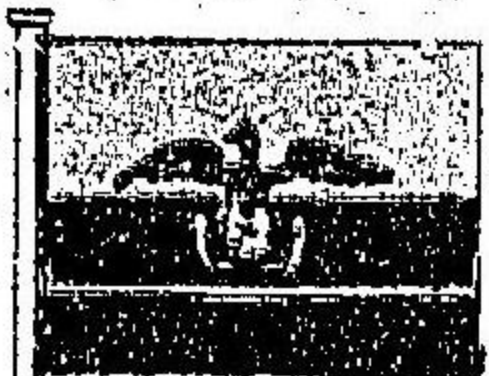
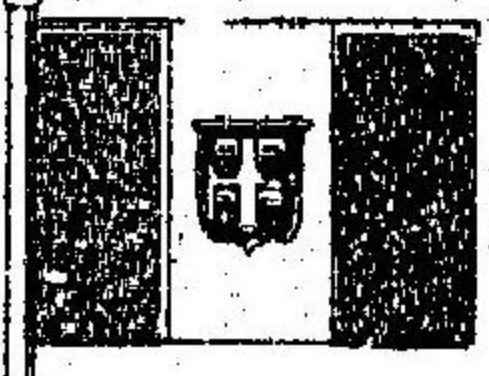
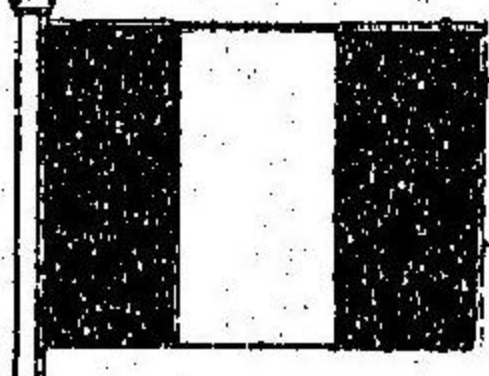
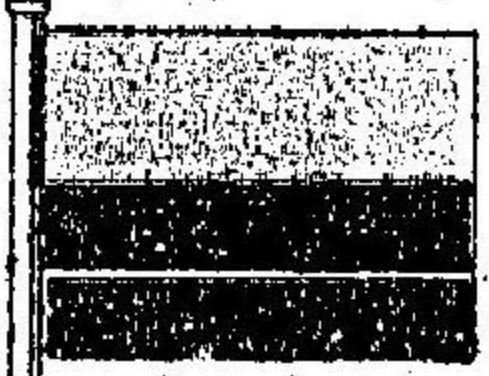
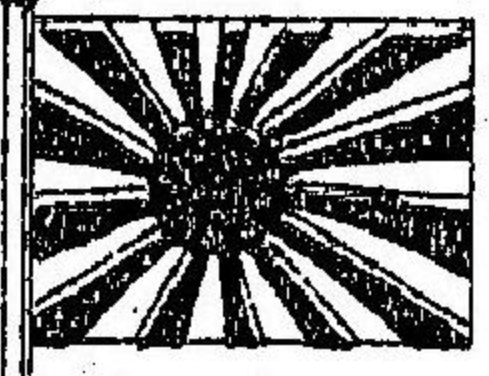
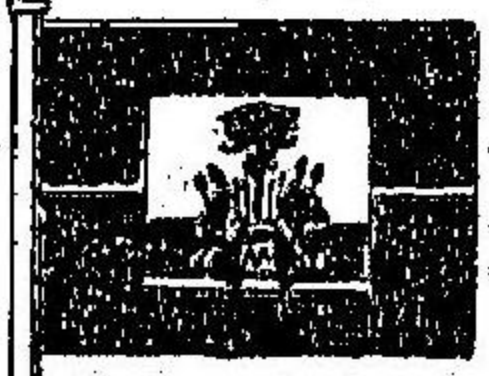
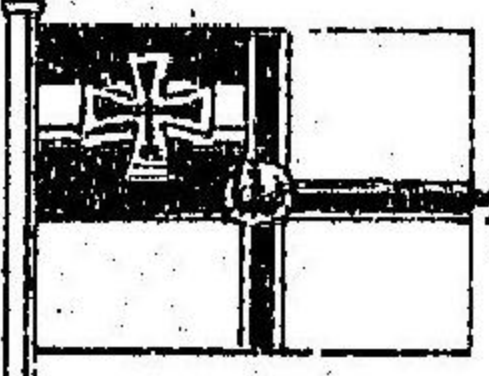
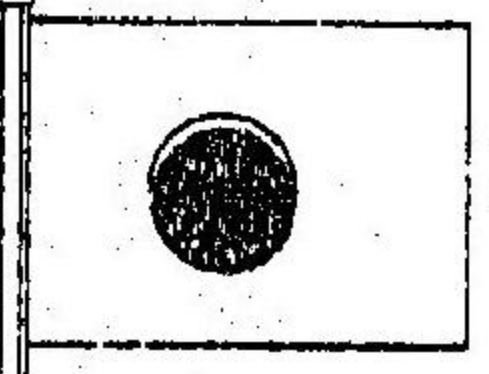
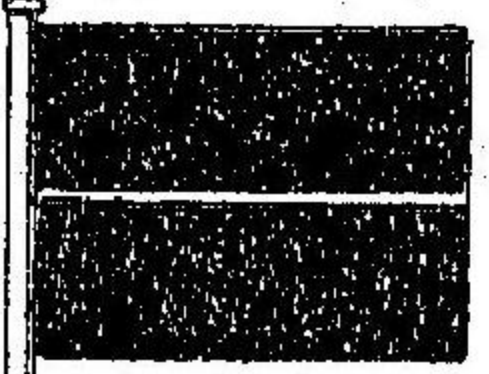


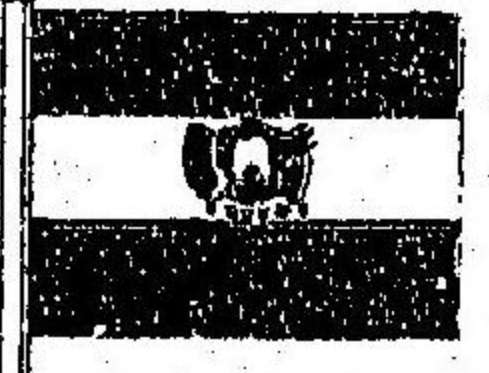
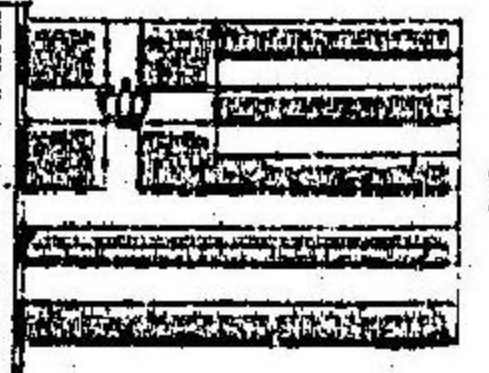
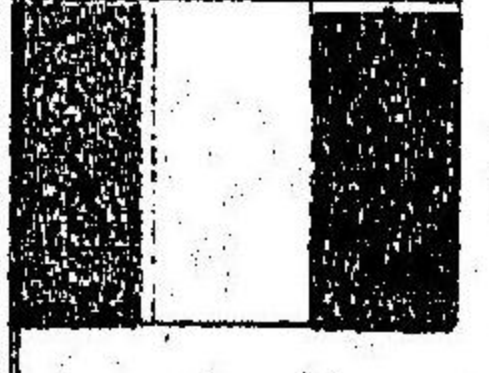

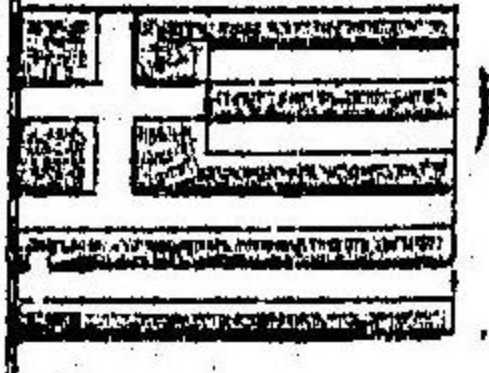
帝 國 海 軍 旗 章

	軍 艦 旗		中 將 旗		天 皇 旗
	艦 首 旗		少 將 旗		皇 后 旗
	當 直 旗		代 將 旗		皇 太 子 旗
	運 送 船 旗		先 任 旗		皇 族 旗
	工 作 船 旗		司 令 旗		海 軍 大 臣 旗
	海 軍 病 院 旗		長 旗		大 將 旗

各 國 軍 艦 及 商 船 旗 章

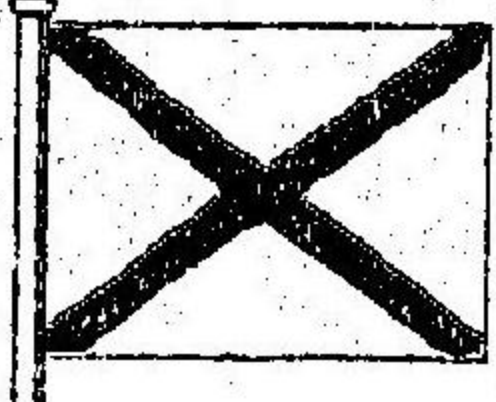

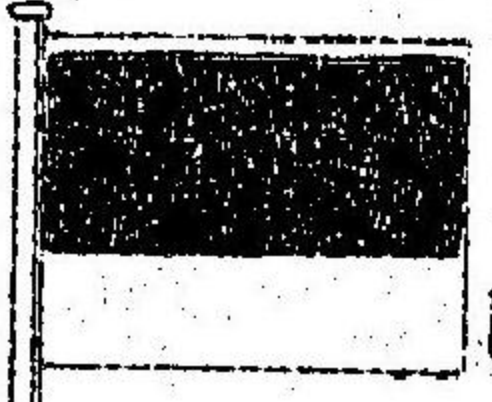


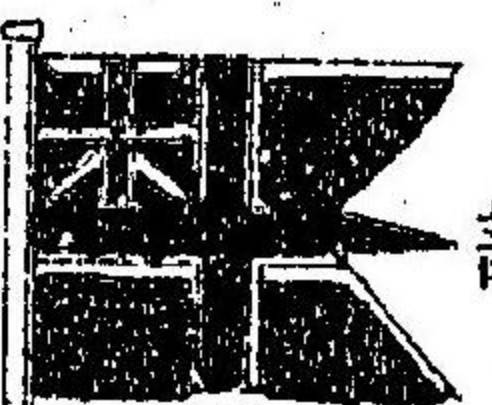
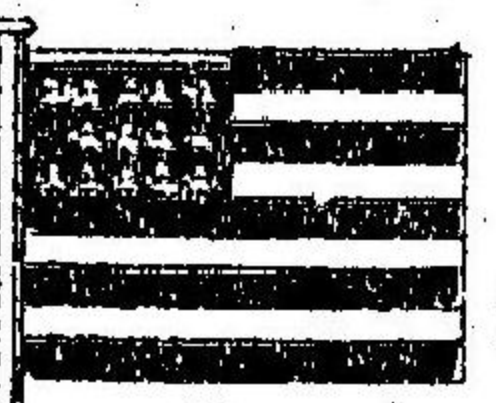
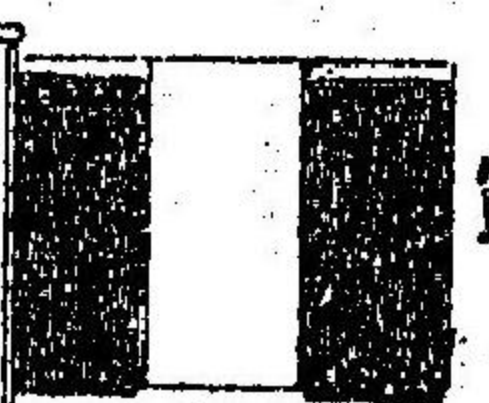
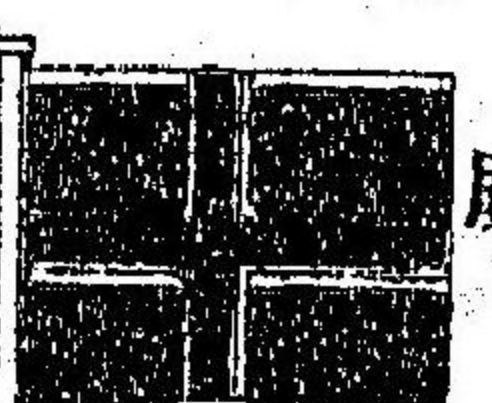
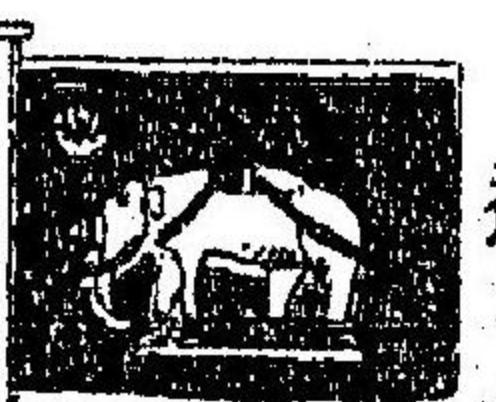


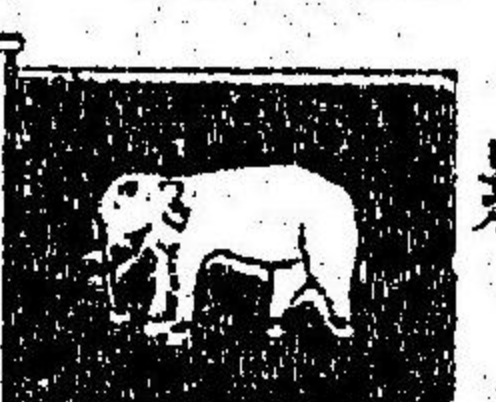
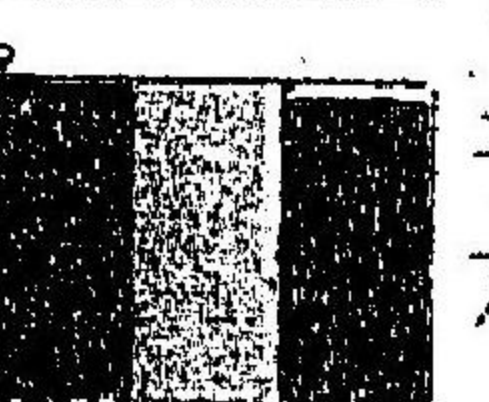
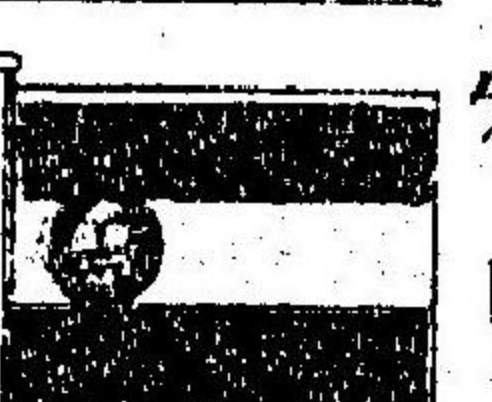
	コ ス タ リ カ		不 列 顛		亞 爾 然 丁 共 和 國	軍 艦
						商 船
	丁		英 國 海 軍 預 備 軍		奧 地 利	軍 艦
	抹		英 國 殖 民 地		洪 牙 利	商 船
	ド ミ ニ カ		清		ホ リ ウ	軍 艦
	共 和 國		國		ア	商 船

各 國 軍 艦 及 商 船 旗 章

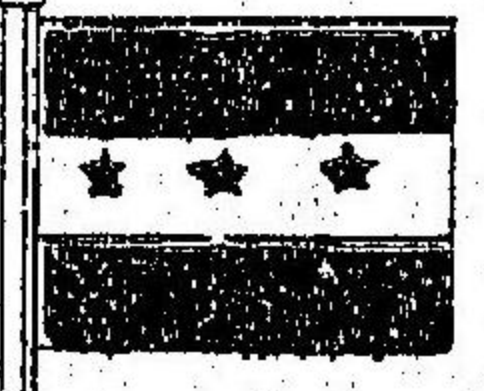

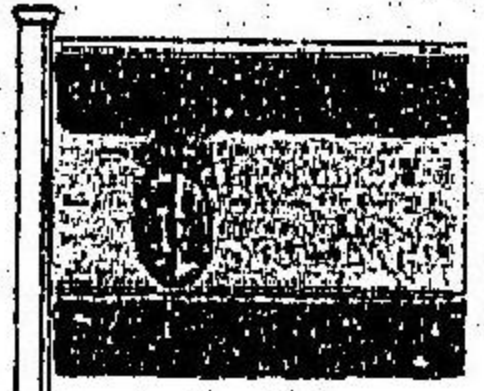
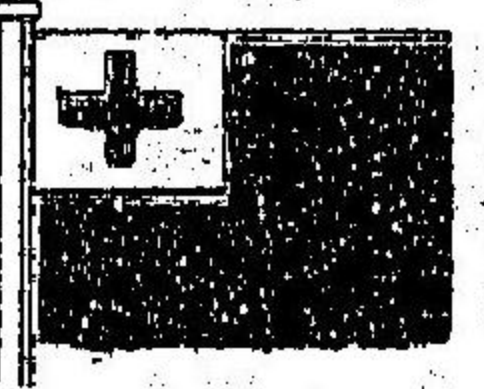
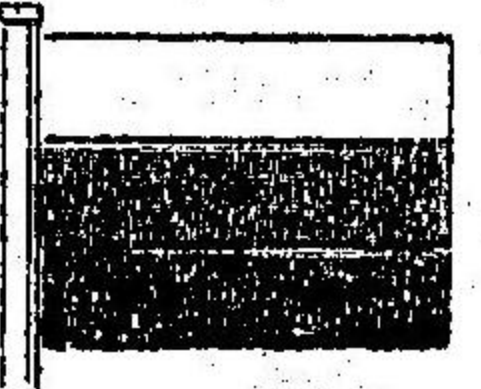
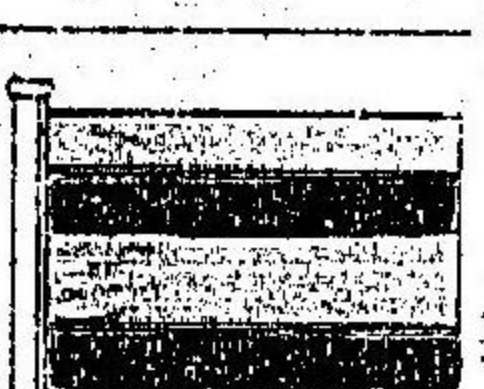
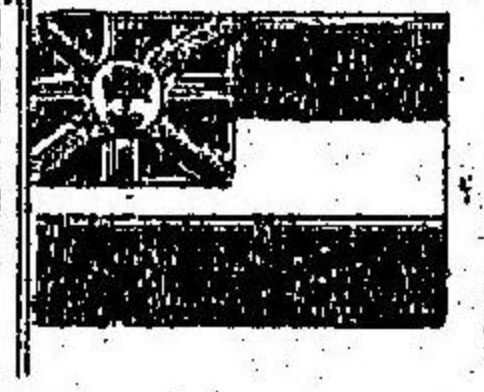

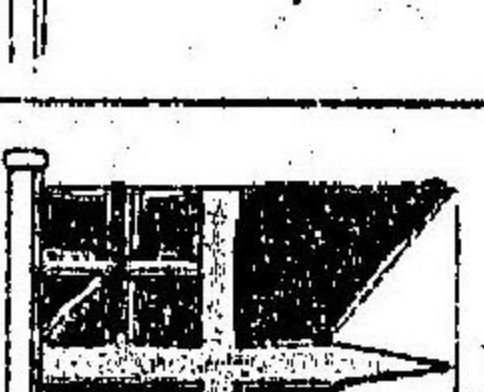
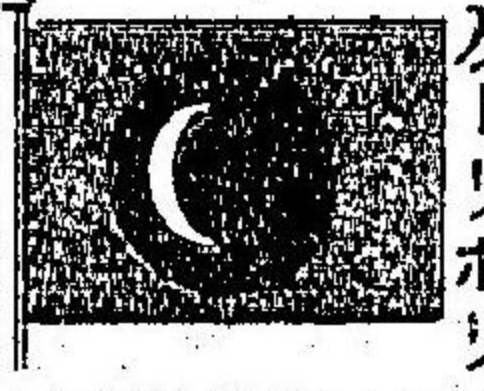
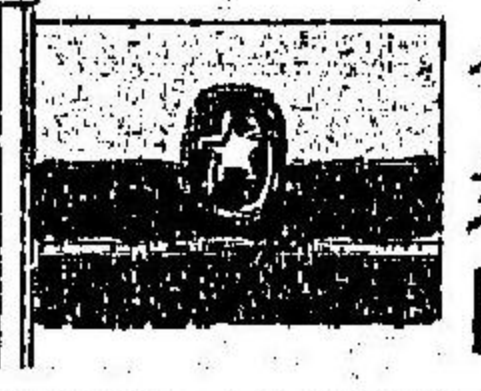

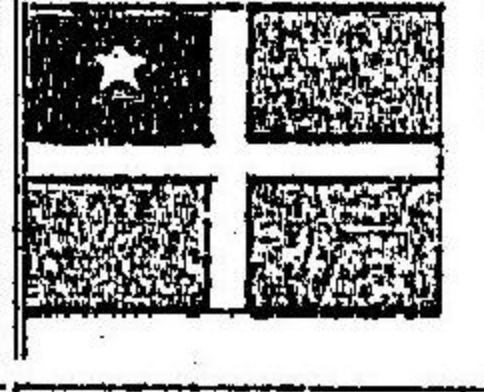
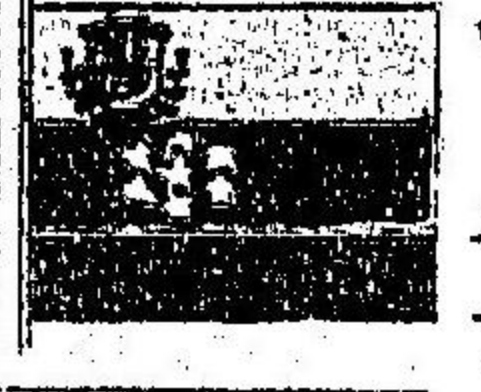

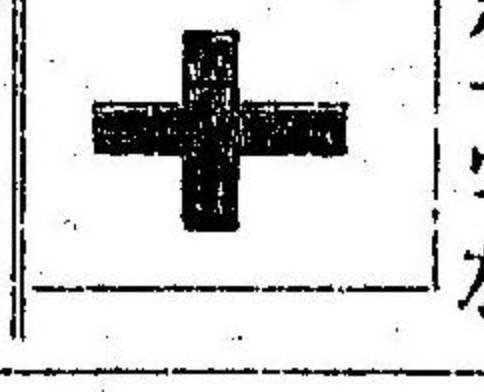
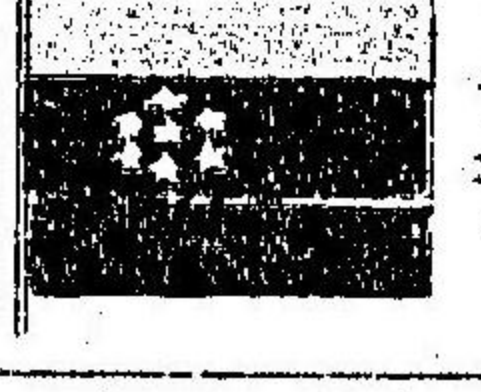

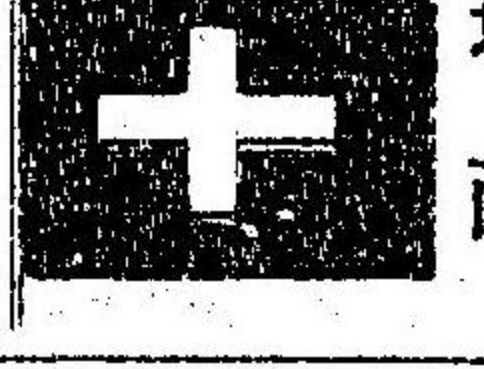


	伊 太 利		グ ア テ マ ラ		エ ク ア ド ル	軍 艦
	伊 太 利		グ ア テ マ ラ		エ ク ア ド ル	商 船
	日 本		ハ イ チ		獨 逸	軍 艦
	日 本		ハ イ チ		獨 逸	商 船
	墨 西 哥		ホ ン デ ユ ラス		希 臘	軍 艦
	墨 西 哥		ホ ン デ ユ ラス		希 臘	商 船



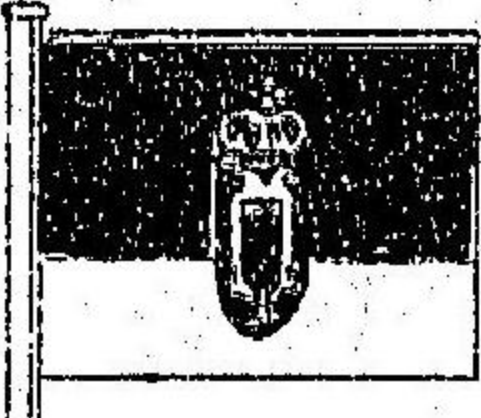
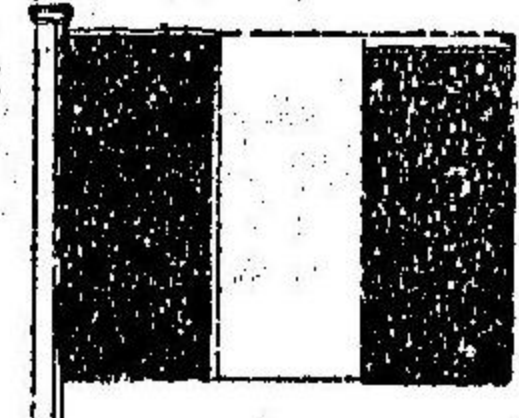
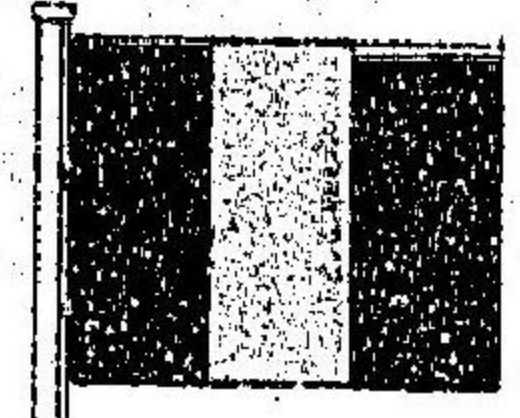
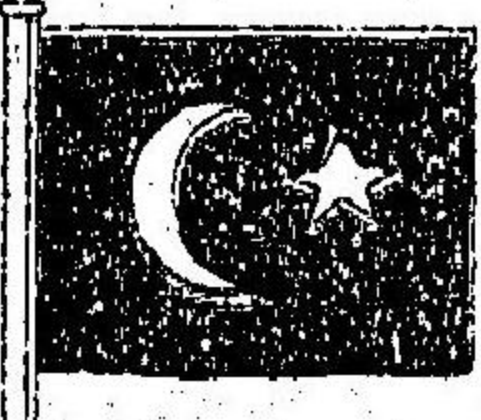

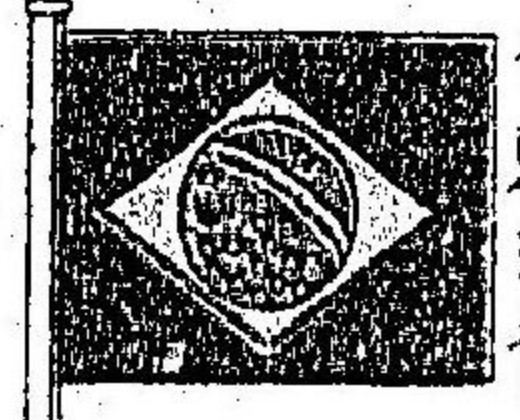


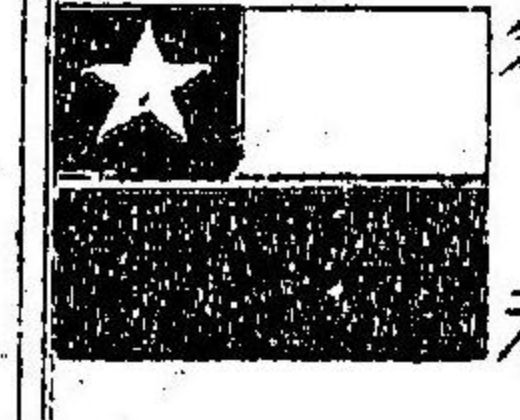

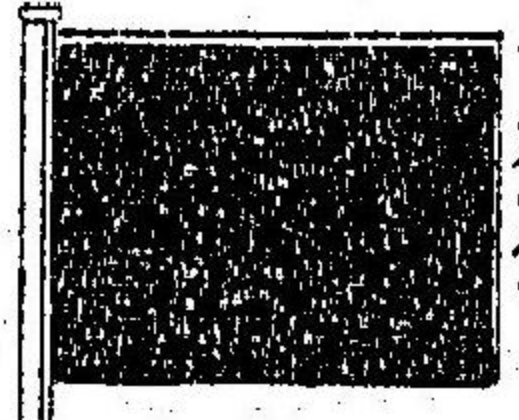
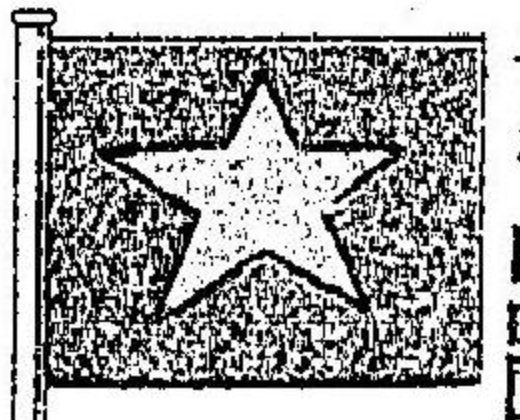
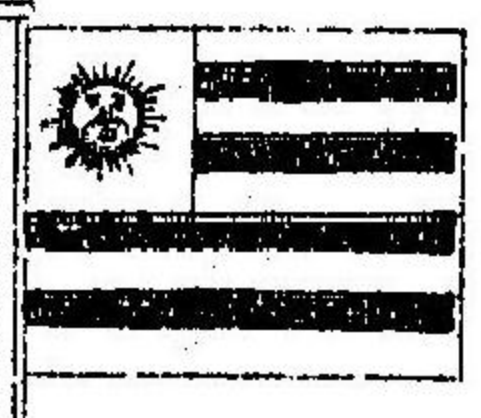
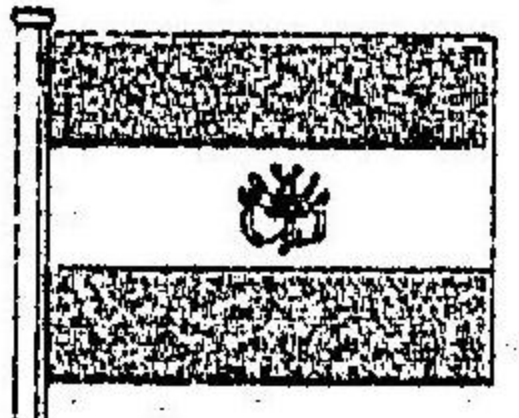
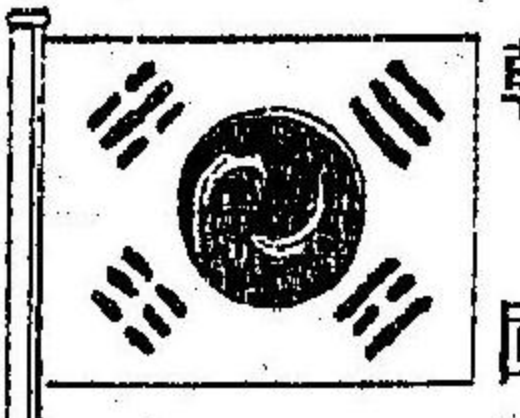
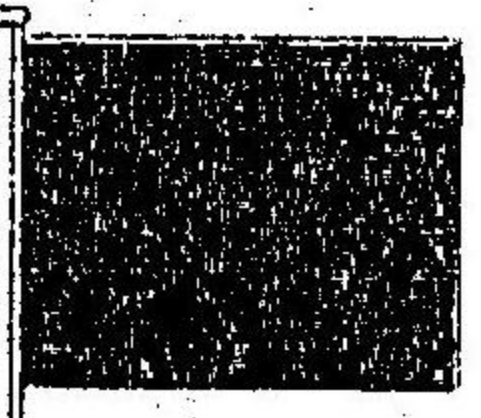
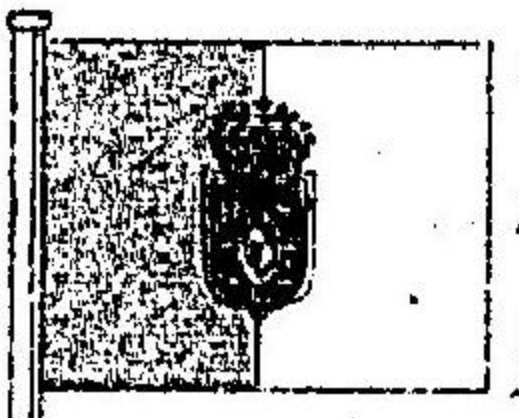
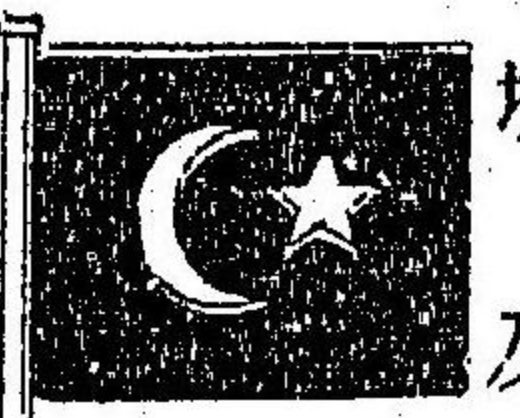
各 國 軍 艦 及 商 船 旗 章

	露 西 亞		波 斯		軍 艦 商 船
	サ ル ヴ ハ ド ル		祕		軍 艦
			露		商 船
	暹 羅		ル メ ー ニ ア		軍 艦
					商 船

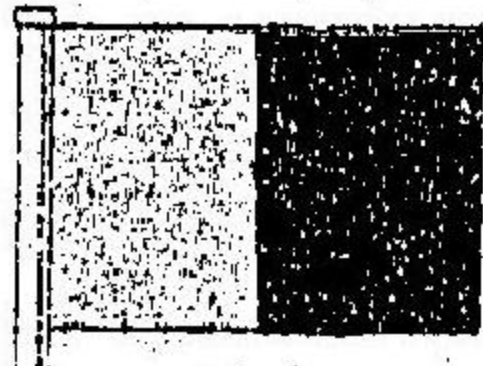
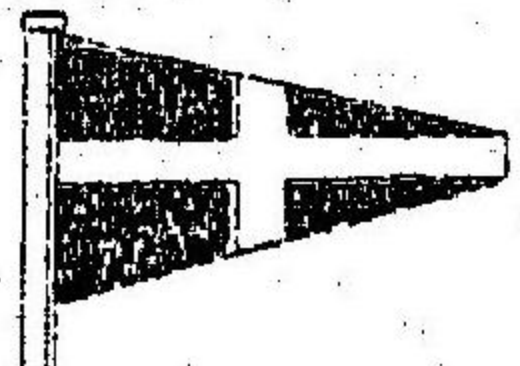
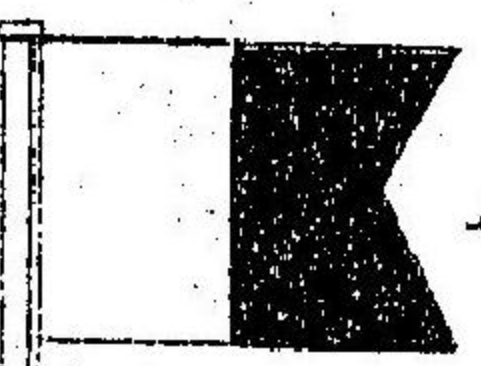
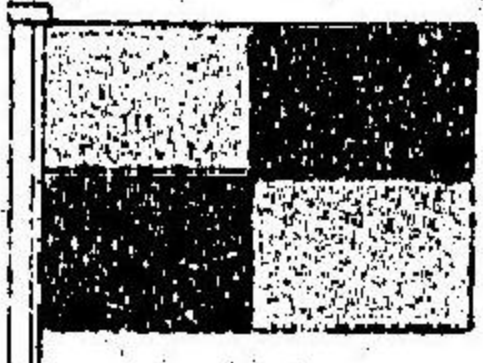
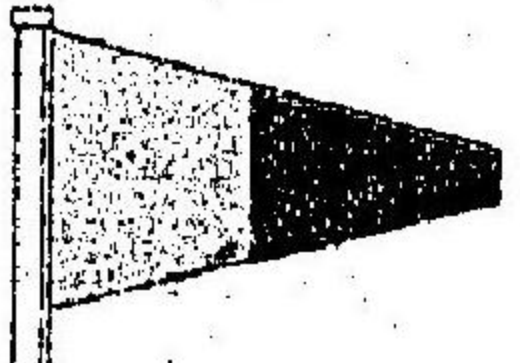
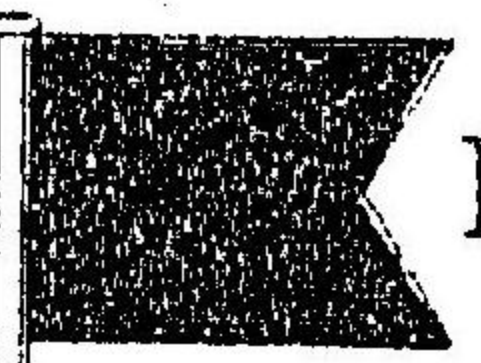

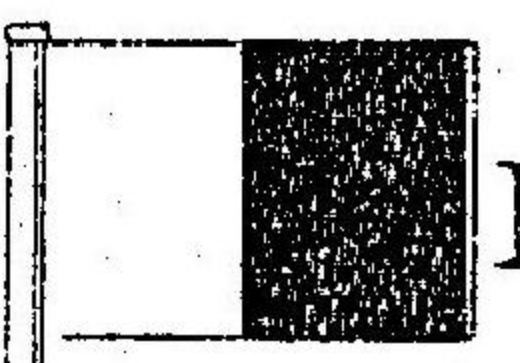
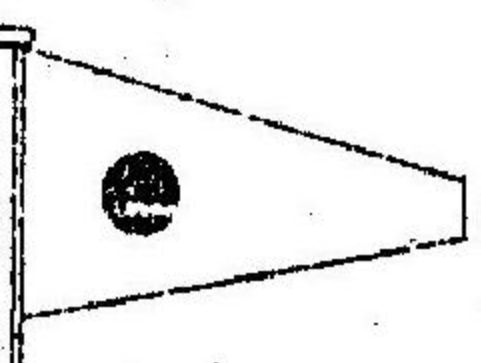
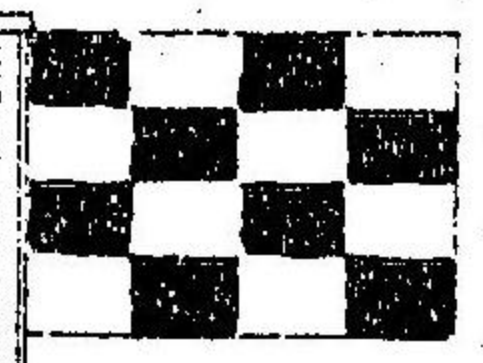
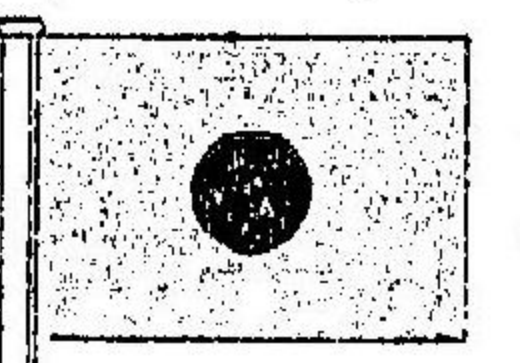
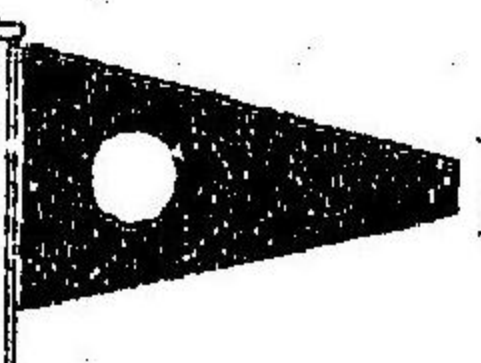
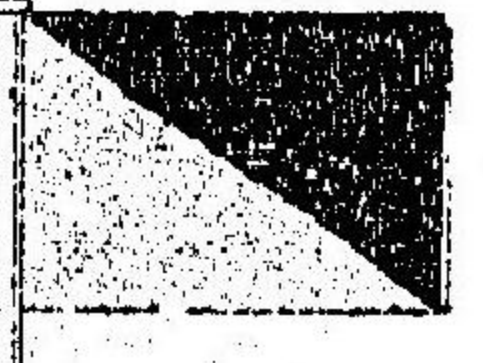

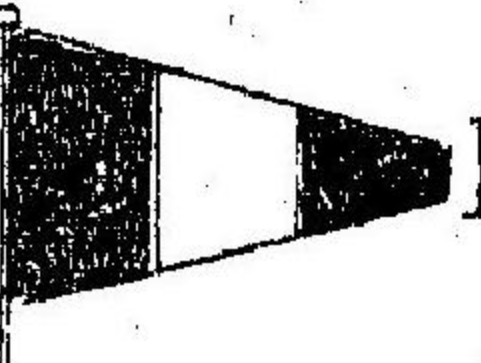
各 國 軍 艦 及 商 船 旗 章

	ト ン ガ		ブ ル ガ リ ヤ		西 班 牙	軍 艦
	ト ン ガ タ ブ					商 船
	ク ツ ク 島		コ ロ ン ビ ヤ 合 衆 國		瑞 典	軍 艦
	土 耳 其 及 ト リ ホ リ					商 船
	ク リ ー ト		ウ ェ 子 ズ ウ イ ラ		チ ユ ニ ス	軍 艦
	赤 十 字 旗					商 船
	瑞 西		サ モ ア			

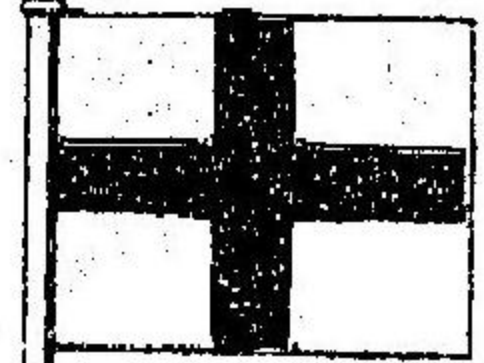
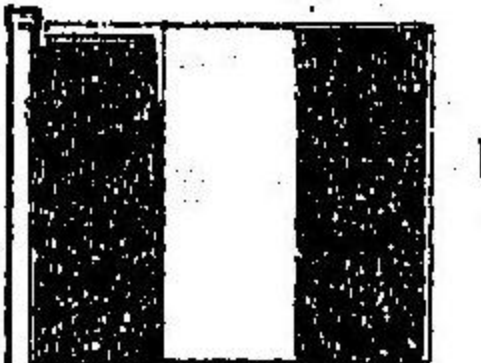
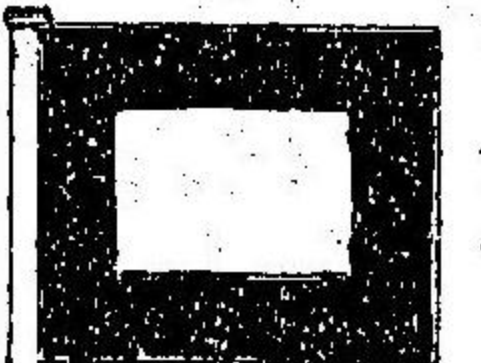

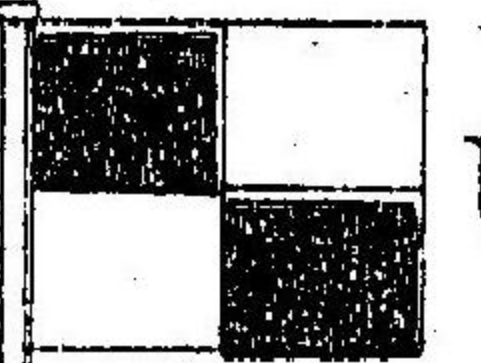

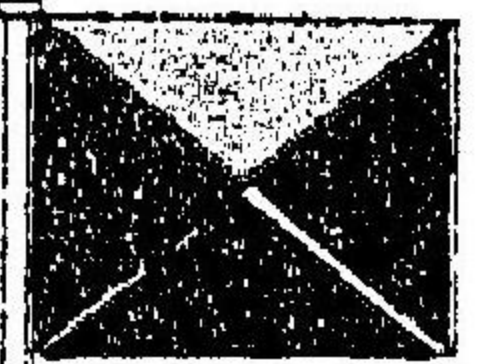
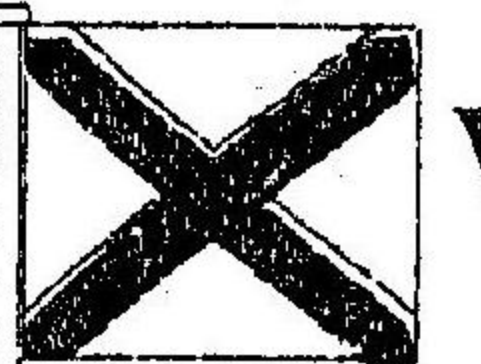
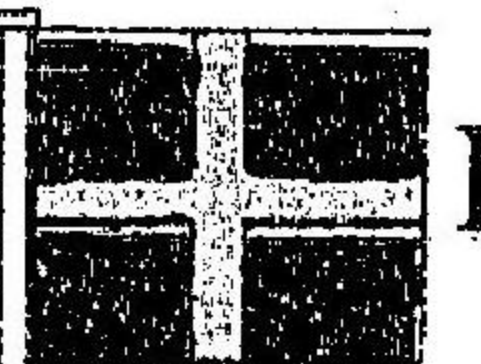
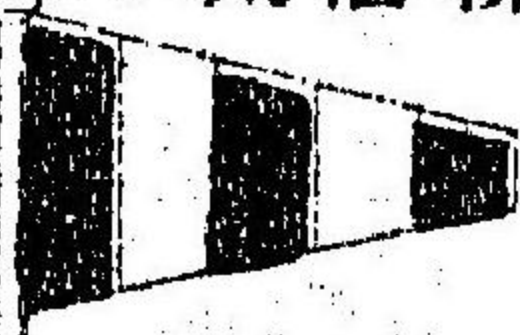
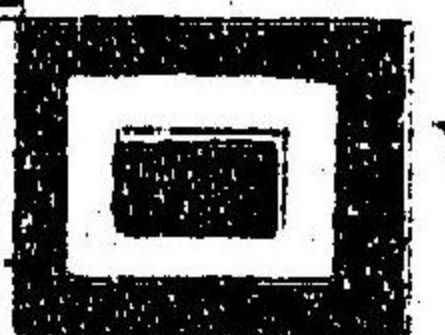

軍艦商船同一用各各國旗章

	セルヴィア		佛蘭西		白耳義
	トリポリ		和蘭		伯刺西爾
	土耳其		リベリア		智利
	亞米利加合衆國		摩洛哥及 マスコット		コンゴ自由國
	ウルグエー		ニカラガ		韓國
	サンジバー		葡萄牙		埃及

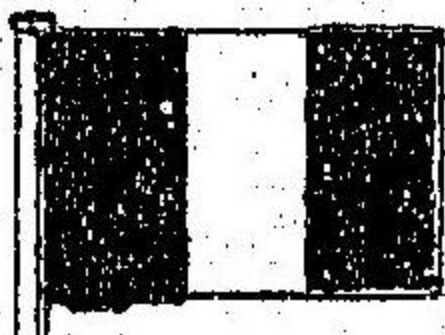
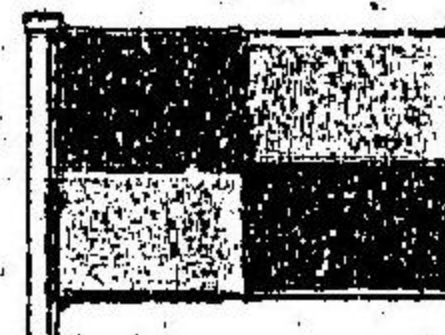
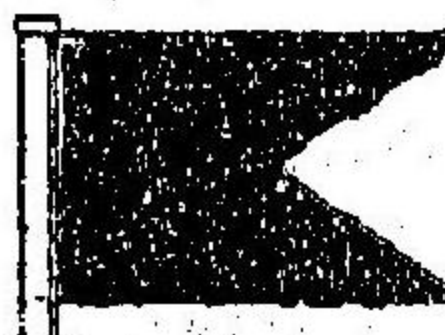
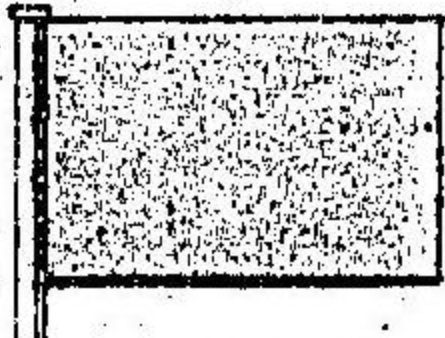
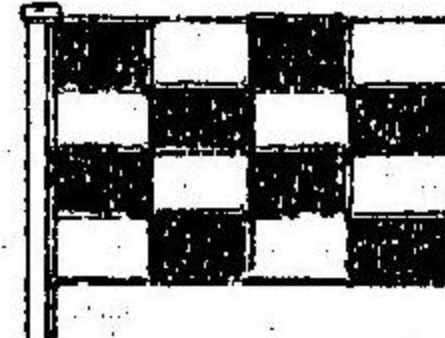
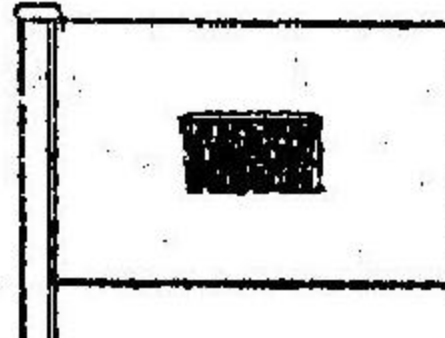
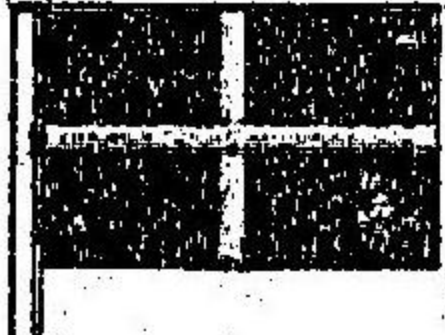
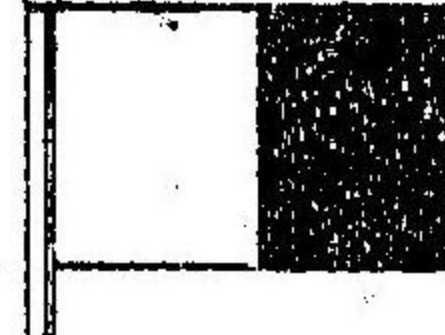
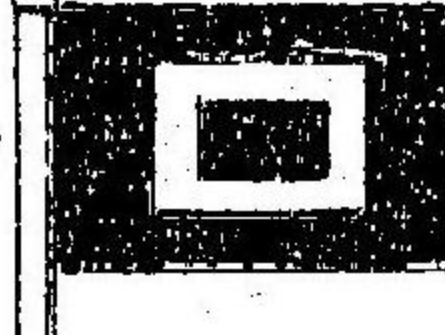
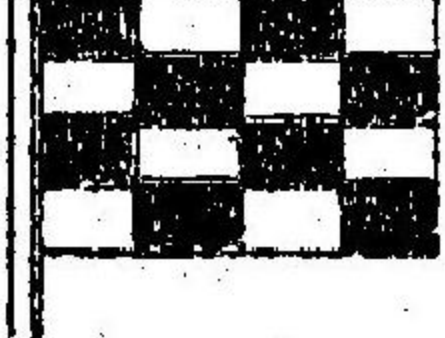
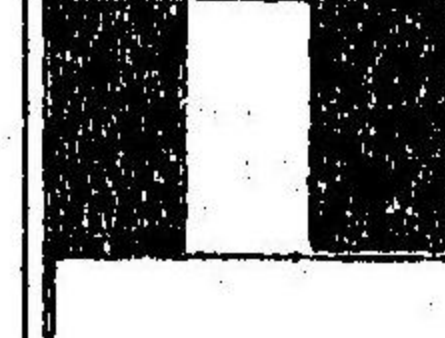

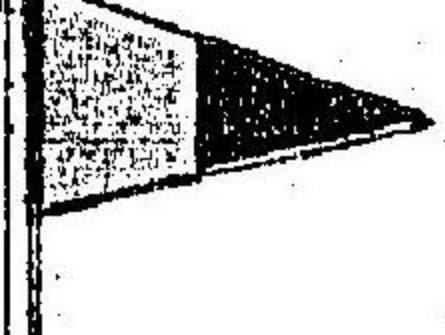

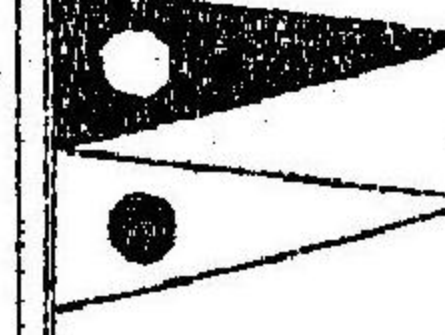
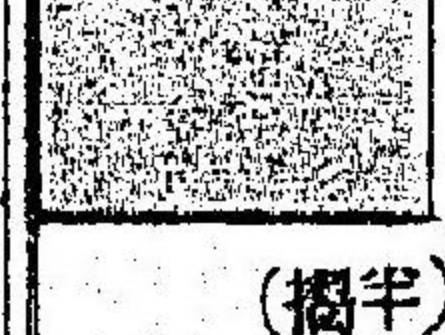


萬國船隻信號旗章

 K	 F	 A
 L	 G	 B
 M	 H	 C
 N	 I	 D
 O	 U	 E

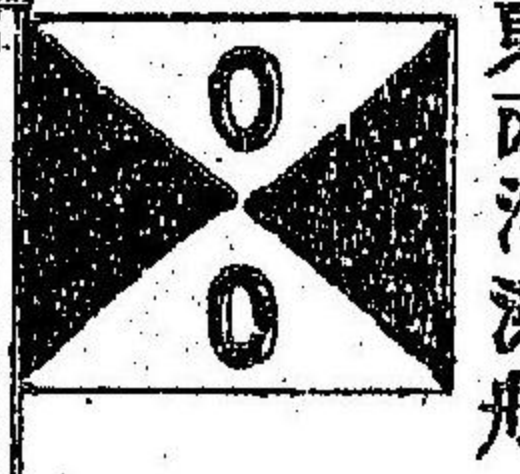
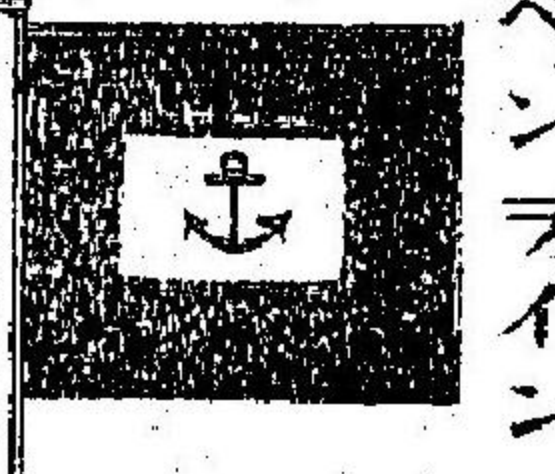
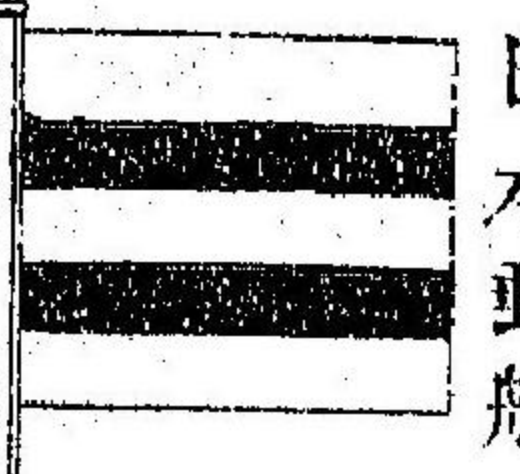
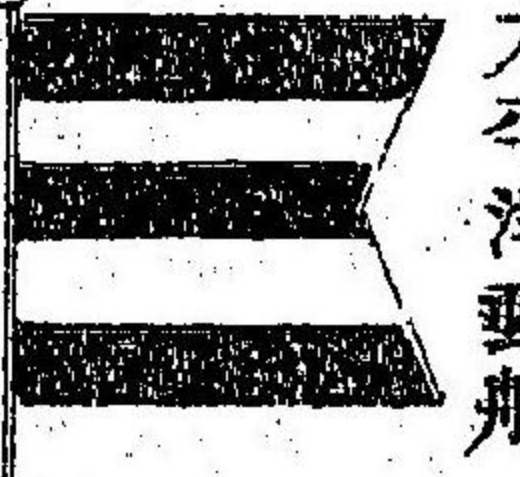
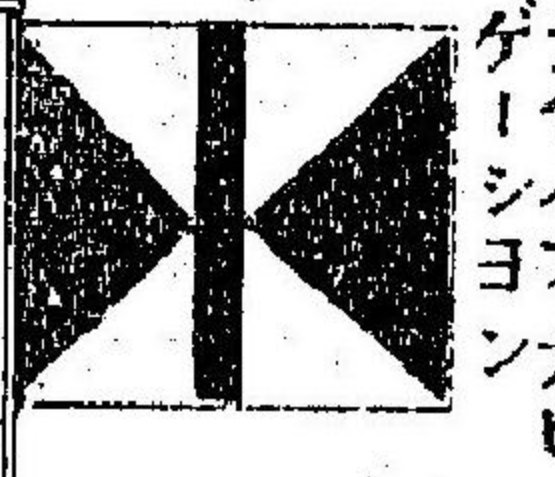
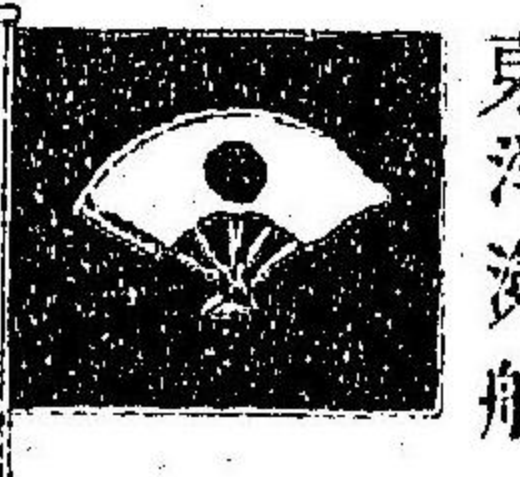
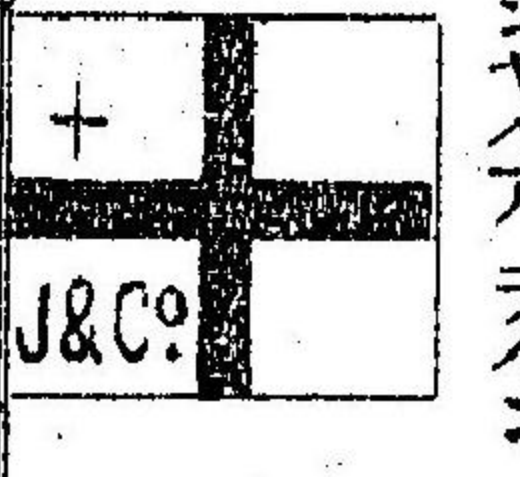
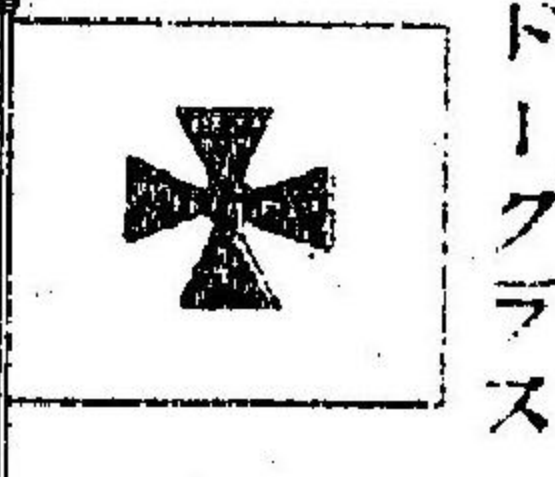
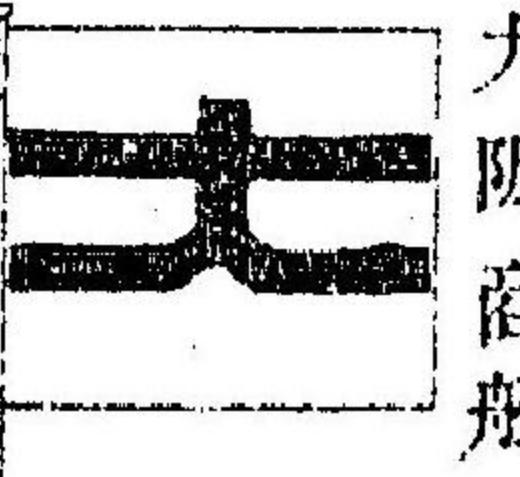
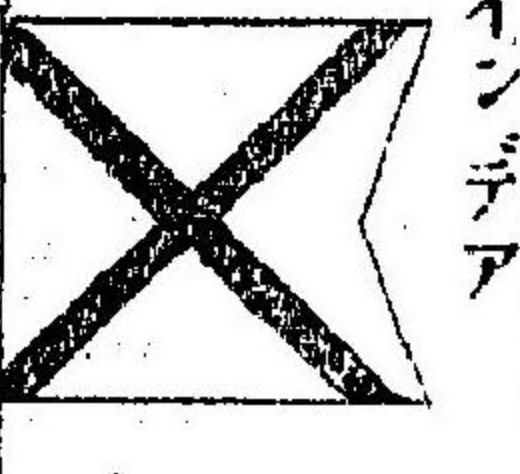

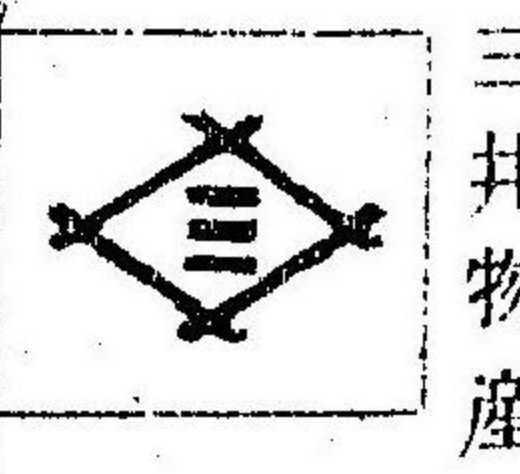


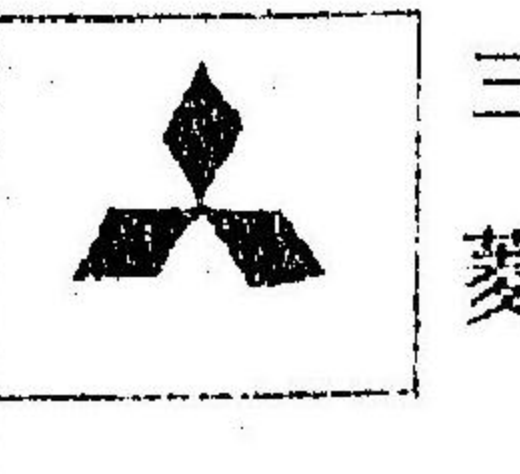
萬國船隻信號旗章

 <p>X</p>	 <p>T</p>	 <p>P</p>
 <p>Y</p>	 <p>U</p>	 <p>Q</p>
 <p>Z</p>	 <p>V</p>	 <p>R</p>
<p>標信旗又八</p>  <p>回答旗</p>	 <p>W</p>	 <p>S</p>

清國沿岸各港特定制旗

	電信旗		稅關招旗		火藥旗
	惡疫旗		上海招旗		上海船 招旗
	上海水旗		仙頭水旗		牛莊水旗
	芝罘水旗		廈門水旗		香港水旗
	上海招醫旗		仙頭招醫旗		廈門招醫旗
	芝罘招醫旗 (揭半)		人夫招旗 前稱三揭半		香港警 官招旗

各 國 船 主 旗 一 班

 <p>東 西 洋 汽 船</p>	 <p>ペ ン ラ イ ン</p>	 <p>日 本 郵 船</p>
 <p>太 平 洋 郵 船</p>	 <p>パ シ フ ィ ク シ ブ ン ナ ビ</p>	 <p>東 洋 汽 船</p>
 <p>シ ヤ イ ア ラ イ ン</p>	 <p>ド ー グ ラ ス</p>	 <p>大 阪 商 船</p>
 <p>パ シ フ ィ ク シ ブ ン ナ ビ</p>	 <p>ハ ン ボ ル グ ア メ リ カ</p>	 <p>三 井 物 産</p>
 <p>カ リ ホ ル ニ ア タ ル</p>	 <p>佛 國 郵 船</p>	 <p>三 菱</p>

各 國 船 主 旗 一 班

	<p>インドライン</p>		<p>スミツブツシヤ マリエンタル</p>		<p>輪船招商局</p>
	<p>北獨逸ロイド</p>		<p>漢口ロイド</p>		<p>グリーンライン</p>
	<p>ナーシヤン</p>		<p>加奈多太平洋鉄道</p>		<p>インドチャイナ</p>
	<p>露國義勇艦隊</p>		<p>チャイナミュー チュアル</p>		<p>北太平洋</p>
	<p>イースタイン、チ ーストラリアン</p>		<p>イースタイン、チ ーストラリアン</p>		<p>彼阿</p>



號 信 風 暴



ム進ニ南風暴

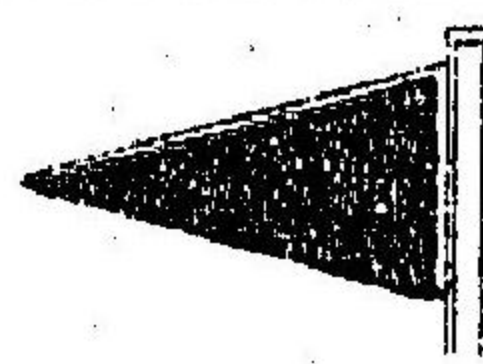


ム進ニ北風暴

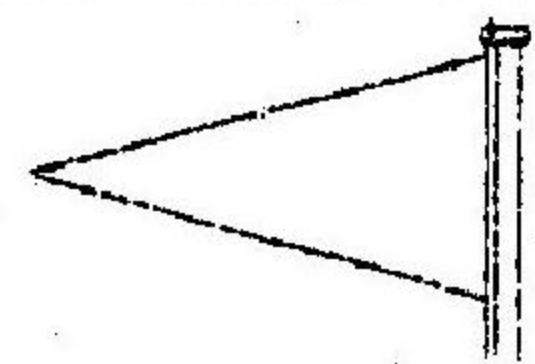


リア兆ノ風暴

號 信 候 天



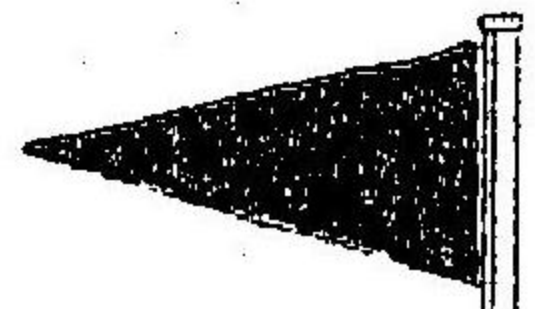
南若ク南風



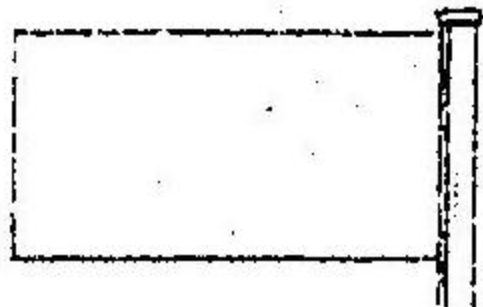
北若ク北東風



西若ク北風



東若ク南東風



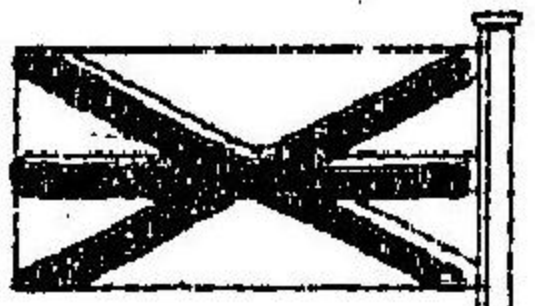
晴天



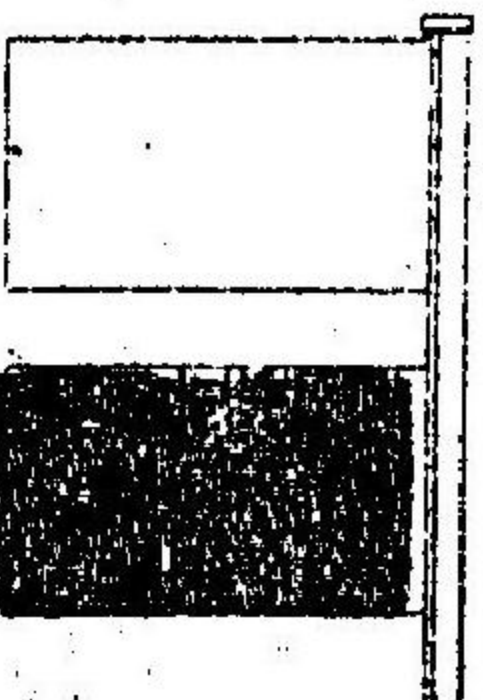
曇天



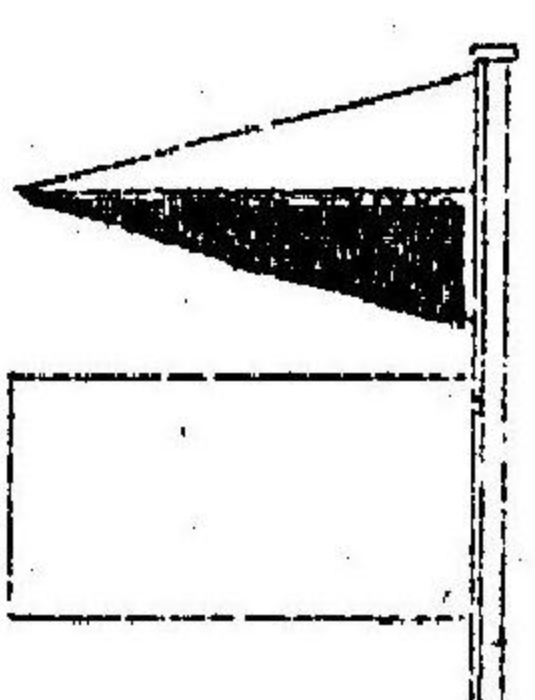
雨



雪



目下晴天ナレモ遠カラズシテ曇天トナルベシ



晴天ニシテ西若クバ北西ノ風

○海船職員航海中當直心得

當直運轉士は船橋に於て見張をなし必要のこゝあるに非れば決して船橋を立去る可からず

當直運轉士は夜間は常に舷燈及橋燈の光輝に注意し又見張番をして常に其持場にありしめ且の命令せられたる針路を嚴守す可し

命令帳を用ひざる時は通常海圖室に備付たる日誌石板に命令せられたる針路を記し置く可し

當直運轉士は屢々北極星の方位を観測し其當時の本基羅盤に於ける船首の方向と共に日誌に記入し置く可し

當直運轉士は常に各羅盤に注意して二三の羅盤を比較し置き若し異例異状を見出さば直に船長に申出可し

當直運轉士は二時間毎に測程をなす可し若し「ペーテント、ログ」を使用するときは毎度普通測程器に比較して其正否を確む可し

晴雨計示度は毎四時に日誌に記入す可し若し天候不良なるときは屢々記入する

○漁船職員航海中當直心得

を要す船長及運轉士は決して三 I 卽ち緯度 見 張及測深鉛を忘る可からず又海圖室には必ず常に天圖を掲げ置くものとす  
船長は若し休息の爲め甲板を立去る際は當直運轉士用の爲めに机上に其當所の海圖を展し置き若し疑はしきことあらば直に報告す可しと嚴命して休息に就く可し

一等運轉士は大工をして毎日午前八時と午後八時に<sup>ホムプ、ウエルス</sup> 水を検測せしめ若し異状あるときは是を船長に報告すべし然れども天候不良の時は毎四時間に一回以上海水を検して是を舵取室及機關室にある黑板に記載せしむべし

當直運轉士は天候の變化は勿論時に霧、雨、濛氣若くは多數の船に出會するか又は我針路に方り黒烟を認むる如き海上常ならぬ現象を發見せば直に船長に報告すべし而して切迫の場合には必要に應じて針路を左右し又は機關を進退せしむることを心得べし

當直運轉士は甲板當番をして直に其命令に應ぜしむる爲め舵取室の附近に當番せしむべし然るときは運轉士は船橋に居ながら人員を點檢し得るの便利あり

船長運轉士は常に操舵機の運轉に注意し且つ機關士をして時々これを検査せしむべし

一等運轉士は時々船員常用室を検査し清潔を嚴守せしめ且つ常に「ウフィンチ」に注意し殊に冬期は氷結せざる様流管を保護すべし

一等運轉士は大工をして一週間に一度「スルース、バルブ」の動作を検せしめ必要の外は常に是を閉鎖し置くべし

一等運轉士は大工をして<sup>ターボレン</sup> 船 覆 と<sup>ウエツチ</sup> 楔 とを擔當せしめ天氣晴朗の日には<sup>ベンチ</sup> 通風氣の覆及び艙口の蓋を開き以て艙内に空氣を流通せしめ而して日没前には是を閉鎖し置くべし

一等運轉士は石炭<sup>コールトリマー</sup> 係が毎朝炭庫口の蓋を格子蓋と取替へ日没前に之を閉づや否やを監視し若し怠慢なるを見出さば機關長に報告す可し「アシニュート」は船を清潔に保んが爲に特に設けたるものなれば汚物を捨るは必ず之を用ふ可し

○漁船職員航海中當直心得

◎船舶職員碇泊中當直心得

運轉士は上陸するに船内に休息することに拘はらず甲板を立去る前に碇泊燈が適  
常に輝くや否やに注意す可し

甲板には必ず見張番を置き決して片時も油断すべからず

一等運轉士は船内一般の任務を負ふものにして貨物の受渡勘定及貯蓄品の出納

等を監督し又大工が「リンバアー」を検せしや否や、各唧筒は總て故障なきや否

や水艀栓は良く動くや否やを注意し又貨物を積入る、前に必ず中甲板の各排水

孔を検して故障なからしむ又一等運轉士は「シヤツクル」に故障なき

や否を注意す可し「シヤツクル」に用ふるには「白レッド」を最良とす又木栓

は亞米利加楡を最上とす

二等運轉士及三等運轉士は一等運轉士の指揮の下にありて貨物の受渡勘定をな

し或は艀内を監督す若し必要なるときは「ホールド、アツク」を所持す可し

船舶は貨物揚卸の爲め特に設けたる港の荷揚船渠にあるときは外當直として必

らず一人の運轉士在船せざる可からず然れども番人來船して其任務に服したる

ときは上陸することを得可し又番人は運轉士の内一名歸船するに非れば決して  
船を立去る可からず

◎海上衝突豫防法

(明治廿五年六月二  
十二日法律第五號)

總 則

本法は海洋と海洋接續の場所とを問はず凡そ航洋船の運航し得べき水上に  
於ける船舶に適用す

本法中汽船と雖も帆を以て運轉し漉力を用ひざるときは帆船と見做し漉  
力を用うるときは帆を用うるに用ひざるの別なく汽船と見做すべし

本法中汽船とは凡そ機關の作用に因て運轉する船舶を云ふ

本法中船舶航行中とは碇泊若くは繫留又は坐礁膠沙に非ざる場合を謂ふ

船 燈

本法中船燈に關して見得ときは晴天の暗夜に於て認め得るを謂ふ

第一條 船燈に關する規定は天氣の如何に關せず日没より日出まで必ず遵奉す

べし此時間中は本法に定めたる船燈の外之に紛れ易き燈を掲ぐべからず  
第二條 漁船は航行中必ず左の燈を掲ぐべし

(一) 前櫓若くは其の前面に於て又は前櫓を具へざるときは本船の前方に於て船體上二十尺より低からざる所に若し船幅二十尺を超ゆるときは其の船幅より低からざる所に亮明の白燈一箇を掲ぐべし然れども船體上四十尺以上の所に掲ぐるを要せず此の燈は常に不同なき光を發して鍼盤の二十點間を照すべく製造し其の射光を左右舷外へ十點間づゝ即船の正首より各舷正横後の二點まで及ぶべき様装置し且つ少くとも五海里の距離より見得べきものを用うべし

(二) 右舷に綠燈を掲ぐべし此の燈は常に不同なき光を發して鍼盤の十點間を照すべく製造し其の射光を船の正首より右舷正横後の二點まで及ぶべき様装置し且少くも二海里の距離より見得べきものを用うべし

(三) 左舷に紅燈を掲ぐべし此の燈は常に不同なき光を發して鍼盤の十點間を照すべく製造し其の射光を船の正首より左舷正横後の二點まで及ぶべき様

装置し且少くも二海里の距離より見得べきものを用うべし

(四) 本條第二項第三項の舷燈には其の燈より前に少くも三尺突出したる隔板を其の燈の内側に装置し右舷の綠光は左舷にある船より左舷の紅光は右舷にある船より見得ざる様に爲すべし

(五) 漁船航行中は本條第一項に規定したる白燈の外に同種の白燈一箇を増掲するを得但し此の場合に於て其両燈を龍骨線上前後に隔て其の前燈を後燈より少くも十五尺下方に掲げ其の前後の距離は上下の距離よりも多きを要す

第三條 漁船他船を引きて航行するときは両舷燈を掲ぐるの外に白燈二箇を上下に少なくも六尺を隔て連掲すべし此の白燈は第二條第一項の白燈と同一の構造にして且同一の場所に掲ぐるを要す然れども二艘以上を引きて航行するときは其の引きたる船の船尾と最後に引かる、船の船尾との距離六百尺以上の場合に於ては右二個の白燈より上方若くは下方六尺の所に尙同種の白燈一個を増掲すべし

本條の引船は引かる、船舶の操舵目標として烟突若くは後櫓の後面へ小形の

白燈一箇を掲ぐるを得

但し此の白燈は本船正横より前面に見得ざる様に爲すを要す

第四條 事變の爲め運轉自由を得ざる船舶は夜間にありて第二條第一項に規定したる白燈と同一の高さに於て最も見得易き所に（汽船なれば其白燈の代りに）二箇の紅燈を上下に少くも六尺を隔て連掲すべし此の紅燈は周回少くも二海里の距離より見得べきものたるを要す又晝間にありては最も見得易き所に直徑二尺の黒球若くは黒色の形象二箇を上下に少くも六尺を隔て連掲すべし

海底電信線の布設又は引揚に従事する船舶は夜間にありては第二條第一項に規定したる白燈の位置に於て（汽船なれば其白燈の代りに）三箇の燈を上下に少くも六尺づゝを隔て連掲すべし但し此燈三箇の内上下の二箇は紅色中央の一箇は白色にして周回少くも二海里の距離より見得べきものたるを要す又晝間にありては最も見得易き所に直徑二尺以上の形象三箇を上下に少くも六尺づゝを隔て連掲し其上下の二箇は紅色球形を用ぬ中央の一箇は白色豎菱形を

用うべし

本條の船舶全く運行せざるときは舷燈を掲ぐべからず然れども運行するときは必ず之を掲ぐべし

本條規定の燈及形象は運轉自由を得ずして他船の航路を避くる能はざるの信號と認むべし

本條の信號は難船信號と混同す可らず難船信號は第卅一條に於て之を規定す  
第五條 航行中の帆船及他船に引かれて運行する船舶は第二條第二項第三項の舷燈のみを掲ぐべし決して同條第一項の白燈を掲ぐべからず

第六條 小形船航行中天氣の摸様に因り綠紅の二舷燈を掲げ置き難きときは何時にても使用し得べき様點火して之を手近かに備へ置き他船の我船に近寄り來るか又は我船の他船に近寄り行くときは衝突を防ぐに充分なる時間を見定めて其舷燈を他船より最も見得易き様各舷に表示すべし但し此の時綠光は左舷より紅光は右舷より見得す且成るべく各舷正横後の二點より後方へ見得ざる様に爲すを要す

○海上衝突豫防法

十

此の綠紅の各燈を間違ひなく容易に取扱ふ爲め綠燈は綠色、紅燈は紅色にて外面を塗り且適當の隔板を備置くべし

第七條 總積量四十噸未満の汽船總積量二十噸未満の帆船及櫓權を以て運轉する船航行中は必ずしも第二條第一項第二項第三項に規定したる燈を掲ぐるを要せず然れども若し之を掲げざるときは必ず左の規定に依るべし

(明治三十年三月法律第四十三號を以て本條及第三項を改正し第四項を追加す)

一 四十噸未満の汽船

甲 船の前部又は烟突若くは其前面に於て舷縁上九尺より低からず且最も見得易き所に第二條第一項に規定したる構造装置にして少くも二海里の距離より見得べき白燈一箇を掲ぐべし

乙 第二條第二項第三項に規定したる構造装置にして少くも一海里の距離より見得べき綠紅の二舷燈を掲ぐるか又は船首より各舷正横後の二點まで右舷は綠色左舷は紅色の射光を發すべく製造したる両色燈

一箇を掲ぐべし但し此燈は白燈より少なくも三尺下方に掲ぐるを要す

二 汽艇は第一項甲の白燈を舷縁上九尺の所より下方に掲ぐるを得然れども其の白燈は乙の両色燈より高きを要す

三 二十噸未満の帆船は帆を用うるに櫓權を用うるに拘はらず一面は綠色一面は紅色の玻璃を用ゐたる燈籠一箇を手近かに備置き他船の我船に近寄り來るか又は我船の他船に近寄り行くときは衝突を防ぐに充分なる時間を見定めて之を表示すべし但し此の時綠光は左舷より紅光は右舷より見得ざる様に爲すを要す

四 櫓權を以て運轉する船は櫓權を用うるに帆を用うるに拘らず白色の燈籠一箇を手近かに備置き衝突を防ぐに充分なる時間を見定めて臨時之を表示すべし

本條の諸船は第四條第一項及第十一條末項の燈を掲ぐるに及ばず

第八條 水先船其水先區に於て營業を爲すときは他船に要する燈を掲ぐべから

○海上衝突豫防法

十一

ず單に周回より見得べき白燈一箇を檣頭に掲げ且十五分時を超ゆる間隙を以て閃火一箇又は數箇を發すべし

水先船には右の外縁紅の二舷燈を用意し置き他船の我船に近寄り來るか又は我船の他船に近寄り行くときは我船の進行する方向を示す爲め一時之れを表すべし

但し此の時綠光は左舷より紅光は右舷より見得ざる様に爲すを要す

水先人を要する船舶へ直付けすべき水先船は白燈を檣頭に掲ぐる代りに隨時之を表示し又舷燈を両舷に掲ぐる代りに一面は綠色一面は紅色の玻璃を用ゐたる燈籠一箇を手近かに備置き前項に從て之を使用するを得  
水先船其の水先區に於て營業を爲さざるときは其積量に應じて他船と同一の燈を掲ぐべし

第九條 (明治三十年三月法律第四十三號を以て本條を削除す)

第十條 他船に追越されんとする船舶は他船に向て船尾より白燈を表示し又は閃火を發すべし

本條に從て表示すべき白燈は豫め船尾に掲げ置くを得然れども此の燈は少くも一海里の距離より見得べきものにして常に不同なき亮明の光を發し鍼盤の十二點間を照すべく製造し船の正後より左右へ六點間宛射光の及ぶべき様隔板を裝置し成るべく舷燈と同一の高さに掲ぐべし

第十一條 長さ百五十尺未満の船舶碇泊中は前方の最も見得易くして船體上より二十尺を越ゆる所に白燈一箇を掲ぐべし此の燈は常に不同なき亮明の光を發し周回少くも一海里の距離より見得べきものたるを要す

長さ百五十尺以上の船舶碇泊中は前方の最も見得易くして船體上二十尺以上四十尺以下の所に前項の白燈一箇を掲げ且船尾若くは其最寄に於て前方の燈より少くも十五尺下方に同種の白燈一箇を掲ぐべし

本條船舶の長さは本船船籍證書面の長さに依るべし

船路若くは其最寄に於て乗揚げたる船舶は本條白燈の外尙第四條第一項に規定したる紅燈二箇を掲ぐべし

第十二條 各船他船の注意を喚起する爲め必要なりとするときは本法に規定し



たる船燈の外尙閃火を發し或は難船信號と混同せざる爆裂信號を發するを得  
第十三條 本法船燈の規定は二艘以上の軍艦又は軍艦に護送せらるる船舶に増  
掲する列位燈及信號燈に關し各國政府に於て特に制定したる規則の施行を妨  
げず又船舶所有主に於て其の國政府の許可を受け登簿公告の手續を経て私用  
する識別信號の使用を妨げず

第十四條 瀛船晝間に帆のみを以て運轉するも其烟突を引下げざるときは前方  
の最も見得易き所に直徑二尺の黒球若くは黒色形象一個を掲ぐべし

霧中信號

第十五條 航行中の船舶に關し本條に規定したる信號を爲すには左の信號器を  
用ゆべし

瀛船は瀛笛若くは瀛角

帆船及他船に引かれて運行する船舶は霧中號角

本條中長聲とは四秒乃至六秒時間の發聲を謂ふ

瀛船は瀛力其他之に代用すべきものに因り發聲する適當の瀛笛若くは瀛角を

音響の妨害物なき所に装置し且號鐘及機關の作用に因り發聲する適當の霧中  
號角を備ふべし又總積量二十噸以上の帆船は瀛船同様の號鐘及霧中號角を備  
ふべし霧中降雪其の他暴雨中は晝夜の別なく左の各項に規定したる信號を爲  
すべし

- 一 瀛船航行中は二分時より多からざる間隙を以て長聲を一發すべし
- 二 瀛船航行中運轉を止めて速力を有たざるときは二分時より多からざる  
間隙を以て長聲を二發すべし但し其の二發の間隙は大約一秒時たるを  
要す
- 三 帆船航行中は一分時より多からざる間隙を以て右舷開なれば一聲を發  
し左舷開なれば二聲を連發し船の正横後に風を受けたるときは三聲を  
連發すべし
- 四 船舶碇泊中は一分時より多からざる間隙を以て大約五秒時間劇しく號  
鐘を鳴らすべし
- 五 他船を引きて運航する船舶海底電信線の布設若くは引揚に従事する船

○海上衝突豫防法

十六

船及航行中運轉自由を得ずして近寄り來る他船の航路を避け能はざるか又は本法に遵て運轉し能はざる船舶は本條第一項及第三項に規定したる信號の代りに二分時より多からざる間隙を以て三聲を連發し即ち長聲を一發したる後直に短聲を二發すべし又他船に引かれて運航する船舶も此の信號を爲すは妨なしと雖も他の信號を爲すべからず

六、七、八、九(明治三十年三月法律第四十三號を以て削除す)

總積量二十噸未満の帆船は必ずしも前數項に規定したる信號を爲すを要せず然れども其の信號を爲さざるときは一分時より多からざる間隙を以て適宜他の音響信號を爲すべし

霧中速力

第十六條 霧中降雪其他暴雨中は各船現時の狀況に注意し適度の速力を以て進行すべし

瀛船其正横より前面に方りて他船の霧中信號を聞き其の所在を定め得ざるときは成るべき機關の運轉を止め全く衝突の虞なきに至るまで其の運航に注意すべし

すべし

航 方

衝突の危険は其の現況により我船に近寄り來る他船の方位を看守して之を豫知するを得若し其の方位儘かに變更するを認めざるときは危険あるものと知るべし

第十七條 二艘の帆船互に近寄りて衝突の虞あるときは其の一船より左の如く他船の航路を避くべし

- 一 一杯に開かざる船は一杯に開きたる船の航路を避くべし
- 二 左舷に一杯に開きたる船は右舷に一杯に開きたる船の航路を避くべし
- 三 一杯に開かざる二艘の船、風を受くる舷同じからざるときは左舷に風を受けたる船より他船の航路を避くべし
- 四 一杯に開かざる二艘の船、風を受くる舷同じきときは風上の船より風下の船の航路を避くべし
- 五 船尾より風を受けたる船は他船の航路を避くべし

○海上衝突豫防法

十七

第十八條 二艘の汽船正しく眞向又は幾んど眞向に行逢ふて衝突の虞あるときは両船とも航路を右舷に轉じ互に他船の左舷の方を行過すべし

本條は兩船正しく眞向又は幾んど眞向に行逢ふて衝突の虞あるときに限り適用すべし兩船各其航路を保ちて互に替り行くときは適用すべからず本條を畫問にありては我船の橋と他船の橋と一直線又は幾んど一直線に見るとき即ち畫問にありては互に他船の両舷燈を見るべきに限るべし

本條は畫問他船の我船の航路を横切りて我船の前面に見ゆるときは又は夜間我船の紅燈他船の紅燈に對し或は我船の綠燈他船の綠燈に對するときは又は我船の前面に綠燈を見ずして紅燈を見或は紅燈を見ずして綠燈を見るときは又は綠紅の兩燈を我船の前面より他の位置に見るときは適用すべからず

第十九條 二艘の汽船互に航路を横切り衝突の虞あるときは他船を右舷に見る船より他船の航路を避くべし

第二十條 帆船と汽船と互に近寄り衝突の虞あるときは汽船より帆船の航路を避くべし

第二十一條 本法航方に依り二船の内一船より他船の航路を避くるときは他船に於て其針路及速力を保つべし

但し他船に於て天氣密濛又は其他の事故に因り航路を避くる船の處置のみにては衝突を避け能はざる程兩船接近したることを認むるときは自ら臨機衝突を避くるに至當の處置を爲すべし(明治卅年三月法律第四十三號を以て第廿一條に此但書を追加す)

第二十二條 本法航方に依り他船の航路を避くべき船は成るべく他船の前面を横切るべからず

第二十三條 本法航方に依り他船の航路を避くべき船は他船に近寄りたるとき時宜に應じて速力を緩め若くは運轉を止め又は後退すべし

第二十四條 總て他船を追越す船は本法航方中前數條の規定に拘はらず他船の航路を避くべし

總て他船の兩舷正横後の二點以外即ち夜間にありて舷燈を見難き位置より其船を追越さんとする船舶は之を追越船と爲し其後兩船の位置に變更を來すも

其追越船を以て本法の航路横切船と爲さず故に其の船は他船を全く追越し了るまで他船の航路を避くべきものとす

晝間他船を追越さんとする船舶にして前項に記載したる方位の内外を辨知し難きものは本船を追越船と見做して他船の航路を避くべし

第二十五條 瀛船狭隘の水道に於て無難に通航し得るときは其の中流の右側即ち本船の右舷に當る方を航行すべし

第二十六條 航行中の帆船は網或は繩を用ゐて漁業に従事する帆船の航路を避くべし但し漁船と雖も猥に他船の通航すべき線路を妨ぐべからず

第二十七條 本法を履行するに當り運航及衝突に關し百般の危険に注意するは勿論若し危険切迫して本法を履行し能はざる特殊の場合に於ては其の危険を避くる爲め臨機の處置を爲すことに注意すべし

航路信號

第二十八條 本法中短聲とは大約一秒時間の發聲を謂ふ

航海中の瀛船他船に近寄り航路を變ぜんとするときは瀛笛若くは瀛角を以て

左の信號を爲し他船に我船の航路を通知すべし

短聲一發 我船航路を右舷に取る

短聲二發 我船航路を左舷に取る

短聲三發 我船全速力にて後退す

懈怠の責

第二十九條 本法は點燈、信號又は見張の怠り其の他海員の職務又は臨機の處置に必要な注意の怠りより生じたる結果に付船、船主、船長海員をして其責を免れしめざるものとす

特 例

第三十條 本法は地方長官に於て規定したる港、川其の他内海の運航に關する特別規則の施行を妨げず

難船信號

第三十一條 危難に罹りて他船又は陸地より救助を要する船舶は左の信號を同

時又は別々に使用すべし

(明治卅年法律第四十三號を以て晝間信號第一項を改正し第四項を削除して第五項を第四項に繰上げ夜間信號第一項第三項を改正す)

晝間信號

- 一 大約一分時の間隙を以て砲又は其の他の爆裂發火信號を一發す
- 二 萬國船舶信號書に掲載するNCの難船信號を表示す
- 三 方形旗の上又は下に球若くは之に類似の者を掲ぐる遠隔信號を表示す
- 四 霧中信號器を以て間斷なく音響を發す

夜間信號

- 一 大約一分時の間隙を以て砲又は其の他の爆裂發火信號を一發す
- 二 船上の發煙(タール桶、油樽等を燃燒するの類)
- 三 星火を發する榴彈或は火箭を一次一發づ、度々打揚ぐ
- 四 霧中信號器を以て間斷なく音響を發す

附 則

第三十二條 本法中船舶積量噸數に關し日本形船は十石を以て一噸に通算す

第三十三條 本法は明治二十六年一月一日より施行す

第三十四條 明治十三年(七月)第三十五號布告海上衝突豫防規則同十四年(五月)第三十三號布告同規則追加同十八年(八月)第二十七號布告同規則改正追加は本法施行の日より廢止す

◎海上法規拔萃

海 商 法

第五百五十八條 船長は其職務を行ふに付き注意を怠らざりしことを證明するに非ざれば船舶所有者、備船者荷送人其他の利害關係人に對して損害賠償の責を免るゝことを得ず

船長は船舶所有者の差圖に従ひたるるときと雖も船舶所有者以外の者に對しては前項に定めたる責任を免るゝことを得ず

第五百五十九條 海員が其職務を行ふに當たり他人に損害を加へたる場合に於て船長は監督を怠らざりしことを證明するに非ざれば損害賠償の責を免るゝ

ことを得ず

第五百六十二條 船長は左に掲げたる書類を船中に備へ置くことを要す

- 一 船舶國籍證書
- 二 海員名簿
- 三 屬具目錄
- 四 航海日誌
- 五 旅客名簿
- 六 運送契約及び積荷に關する書類
- 七 税關より交付したる書類

前項第三號乃至第四號に掲げたる書類は外國に航行せざる船舶に限り命令を以て之を備ふることを要せざるものと定むることを得

第五百六十三條 船長は已むことを得ざる場合を除く外自己に代りて船舶を指揮すべき者に其職務を委任したる後に非ざれば荷物の船積及び旅客乗込の時より荷物の陸揚及び旅客の上陸の時まで其指揮する船舶を去ることを得ず

第五百七十八條 海員が服役中不行跡其他重大なる過失に因らずして疾病に罹り又は傷疾を受けたるときは船舶所有者は三箇月を超ゆる期間内の治療及び看護の費用を負擔す

前項の場合に於て海員は其服役したる期間に對する給料を請求することを得但其職務を行ふに因りて疾病に罹り又は傷疾を受けたるときは其給料の全額を請求することを得

第五百八十條 海員が就役の後死亡したるときは船舶所有者は死亡の日までの給料を支拂ふことを要す

海員が其職務を行ふに因りて死亡したるときは其葬式の費用は船舶所有者の負擔す

第五百八十一條 左の場合に於ては船長は海員を雇止むることを得

- 一 發航前海員が其職務に不適任なることを認めたるとき
- 二 海員が著しく其職務を怠り又は其職務に關し之に重大なる過失ありたるとき

三 海員が禁錮以上の刑に處せられたるとき

四 海員が疾病に罹り又は傷痍を受け其職務に堪へざるに至りたるとき

五 不可抗力に因り廢航を爲し又は航海を繼續すること能はざるに至りたるとき

前項第一號乃至第三號の場合に於ては海員は其服役したる期間に對する給料を請求することを得

第一項第四號及び第五號の場合に於ては海員は其雇止の日までの給料及び雇入港までの送還を請求することを得但第四號の場合に於て海員に過失あるときは前項の規定を準用す

水先法施行細則

第二章 水先區

第十三條 水先區は左の四種とす

- 一 東京灣水先區 安房國洲の崎より相摸國城ヶ嶋西端を経て諸磯崎に引きたる線を以て境界とす

- 二 内海水先區 紀伊國田倉崎より友ヶ島を経て淡路國生石鼻に引きたる線淡路國押登崎より阿波國大磯崎に引きたる線伊豫國佐田岬より高島を経て後國地藏崎に引きたる線及長門國網代崎より筑前國岩屋崎に引きたる線を以て境界とす

- 三 長崎港水先區 肥前國福田崎より伊王島北端に引きたる線及同國沖の島南端より香焼島南端を経て深堀に引きたる線を以て境界とす

- 四 函館港水先區 渡島國尾花岬より葛登支岬に引きたる線を以て境界とす

第三章 水先案内料

第十四條 水先案内料は總噸數千噸又は千噸未滿にして喫水十二呎又は十二呎未滿の船舶に付きては第一號表に定むる所に依り總噸數千噸若しくは千噸未滿又は喫水一呎若しくは一呎未滿を増毎に同表に定むる額に百分の三を加ふ

第十五條 前條に於て喫水と稱するは各水先區に付き水先人水路を嚮導する爲め船舶に乗込たるときより其の嚮導を終るまでの間に於て船首又は船尾の有

したる最深の喫水を云ふ

第十六條 水先人船長の便宜に依り第一號表に掲ぐる各航路の一部を嚮導したるときは特約ある場合を除く外其の全部に對する水先案内料を請求することを得

第十七條 水先人水路嚮導中海難其他不可抗力に依り第一號表に掲ぐる各航路の全部を嚮導すること能はざるときは水先案内料は嚮導したる里程の割合に應ずべきものとす  
第一號表

東京灣	水先區	航路	
		航	路
東京灣	水先區	水先區境界線ヨリ横濱錨地迄	水先案内料
		又ハ横濱錨地ヨリ水先區境界線マテ	三〇
		水先區境界線ヨリ品川錨地マテ	四〇
		又品川錨地ヨリ水先區境界線マテ	六〇
		横濱錨地ヨリ品川錨地マテ	一五
		又品川錨地ヨリ横濱錨地マテ	二五
東京灣	水先區	友ヶ島水道ヨリ神戸錨地マテ	三〇
		又神戸錨地ヨリ友ヶ島水道マテ	四五
		友ヶ島水道ヨリ品川錨地マテ	四〇
		又品川錨地ヨリ友ヶ島水道マテ	六〇
		横濱錨地ヨリ品川錨地マテ	一五
		又品川錨地ヨリ横濱錨地マテ	二五

内海	水先區	航路	
		航	路
内海	水先區	友ヶ島水道ヨリ大坂錨地マテ	四〇
		又大阪錨地ヨリ友ヶ島水道マテ	六〇
		神戸錨地ヨリ大坂錨地マテ	一五
		又大阪錨地ヨリ神戸錨地マテ	二五
		神戸錨地ヨリ門司若クハ下ノ關錨地マテ	一〇〇
		又門司若クハ下ノ關錨地ヨリ神戸錨地マテ	一七五
		神戸錨地ヨリ水先區境界線迄	一〇〇
		又水先區境界線ヨリ神戸錨地マテ	一七五
		門司若クハ下ノ關錨地ヨリ水先區境界線迄	二五
		又水先區境界線ヨリ門司若クハ下ノ關錨地迄	三五
		門司若クハ下ノ關錨地ヨリ下ノ關海峽東口マテ	二五
		又下ノ關海峽東口ヨリ門司若クハ下ノ關錨地迄	三五
		水先區境界線ヨリ下ノ關海峽東口マテ	四〇
		又下ノ關海峽東口ヨリ水先區境界線マテ	五〇
		豊後水道北口ヨリ門司若クハ下ノ關錨地迄	五〇
		又門司若クハ下ノ關錨地ヨリ豊後水道北口迄	八〇
		豊後水道北口ヨリ水先區境界線マテ	七〇
		又水先區境界線ヨリ豊後水道北口マテ	一〇〇
又神戸錨地ヨリ豊後水道北口マテ	一〇〇		
又神戸錨地ヨリ水先區境界線マテ	一七五		
水先區境界線ヨリ港内錨地マテ	二〇		
又港内錨地ヨリ水先區境界線マテ	三〇		



函館港

水先區境界線ヨリ港内錨地マテ  
又港内錨地ヨリ水先區境界線マテ

二〇三〇

◎船員法

(明治三十二年三月七日法律第四十七號)

第一章 總則

第二章 船員手帖

第三章 船長

第四章 海員

第五章 紀律

第六章 罰則

附則

船員法

第一章 總則

第一條 本法は日本船舶の船員に之を適用す但湖川、港灣のみを航行する船舶

又は船舶法第二十條に掲げたる船舶の船員に付ては此限に在らず

第二條 本法に於て船員とは船長及び海員を謂ひ海員とは船長以外は一切の乗組員を謂ふ

第二章 船員手帖

第三條 日本に於て船員と爲らんと欲する者は管海官廳に船員手帖の交付を申請することを要す

申請人は戸籍吏の書面其他の公正證書に依りて左の事項を證することを要す但申請人が其本籍地又は寄留地に於て申請を爲す場合に於て其地の管海官廳が戸籍吏の職務を行ふときは此限に在らず

一 氏名

二 本籍地

三 身分

四 出生の年月日

第四條 未成年者が船員と爲るには其法定代理人の許可を得ることを要す未成

年者が船員手帖の交付を申請するには前條第二項に掲げたる事項の外前項の許可を得たる旨を證することを要す

第五條 船員と爲ることを許されたる未成年者は雇傭契約に關しては成年者と同一の能力を有す

第六條 外國に於て船員と爲りたる者が日本に到着したるときは其到着の日より一ヶ月内に船員手帖の交付を申請することを要す

第七條 船員手帖に記載したる事項にして第三條第二項に掲げたるものに錯誤ありたるとき又は同條第二項第一號乃至第三號に掲げたるものに變更を生じたるときは船員は其事實を知りたる日より一ヶ月内に管海官廳に船員手帖の訂正を申請することを要す

船員が日本に在らざる間に於て錯誤又は變更の事實を知りたるときは前項の期間は其船員が日本に到着したる日より之を起算す

第八條 第三條第二項及び第四條の規定は前二條の場合に之を準用す

第九條 船員手帖を滅失したるときは船員は遅滞なく更に其交付を申請することを要す

を要す

船員手帖が毀損したるときは船員は遅滞なく其書換を申請することを要す

第十條 船員が日本に在らざる間に於て船員手帖が滅失又は毀損したるときは船員が日本に到着したる後遅滞なく船員手帖の交付又は書換を申請することを要す

第十一條 第三條第二項及び第四條の規定は前二條の場合に之を準用す但原管海官廳に船員手帖の交付又は書換を申請するときは此限に在らず

第十二條 船員が廢業を爲したるときは遅滞なく管海官廳に其船員手帖を返還することを要す

船員が死亡したるときは其船員手帖を保管する者之を返還することを要す

第三章 船長

第十三條 船長は海員を指揮、監督し及び船中に在る者に對し其職務を行ふに必要なる命令を爲すことを得

第十四條 船長は管海官廳の命令ありたるときは商法第五百六十二條第一項に

掲げたる書類を提出することを要す

第十五條 船舶が港灣を出入するとき、狹隘なる水路を通過するとき其他危険の虞あるときは船長は甲板に在りて自ら船舶を指揮することを要す

第十六條 日本と外國との間又は外國各港の間を航行する船舶が外國の港に入港し又は日本に到着したるときは船長は二十四時間内に其港の管海官廳若し其港に管海官廳なきときは其後最初に到着したる港の管海官廳に航海日誌を提出して其檢閲を受くることを要す

前項の規定は船舶が入港の時より十二時間内に發航する場合には之を適用せず管海官廳は必要なる書類の提出を命し又は船員、旅客其他船中に在りたる者を呼出だして訊問を爲すことを得

第十七條 左の場合に於ては船長は最初に到着したる港の管海官廳に出頭して其報告を爲すことを要す

- 一 豫定の航路を變更したるとき
- 二 人命又は船舶を救ひたるとき

三 衝突其他の海難が生じたるとき

四 船舶が捕獲せられたるとき

五 船中に於て死亡したる者ありたるとき

船舶が豫定せざる港に寄港したるとき又は前項第二號乃至第五號に掲げたる事由が碇泊中に生じたるときは船長は其港の管海官廳、若し其港に管海官廳なきときは其後最初に到着したる港の管海官廳に出頭して其報告を爲すことを要す

前條第三項の規定は前二項の場合に之を準用す

第十八條 前條第一項及び第二項の場合に於ては船長は報告書を作り其認證を申請することを得

第十九條 船舶に急迫の危険あるときは船長は人命、船舶及び積荷の保護に必要なる手段を盡し且旅客、海員其他船中に在る者を去らしめたる後に非ざれば其指揮する船舶を去ることを得ず

第二十條 船舶が衝突したるときは船長は互に人命及び船舶の保護に必要なる

手段を盡し且船舶の名稱、船籍港、發航港及び到達港を告ぐることを要す

但自己の指揮する船舶に急迫の危険あるときは此限に在らず

第二十一條 船長が航海中救援を求むる船舶を認めたるときは人命を救ふことを要す

但自己の指揮する船舶に急迫の危険あるときは此限に在らず

第二十二條 海員が船中に於て死亡したるときは船長は其船中に在る遺産を保管することを要す

第二十三條 外國に駐在する日本の公使、領事又は貿易事務官が法令の定むる所に依り日本臣民を日本に送還すべきことを命じたるときは船長は正常の理由あるに非ざれば之を拒むことを得ず

送還費用の償還に關する規程は命令を以て之を定む

第二十四條 船長は其指揮せんとする船舶に乗込む前に其船員手帖を管海官廳に提出して就職の認證を申請することを得

前項の規定に依りて就職の認證を得たる船長が其職を退きたるときは遲滞な

く退職の認證を申請することを要す

第二十五條 船長が死亡したるとき、船舶を去りたるとき又は之を指揮すること能はざるに至りたる場合に於て他人を選任せざるときは運航に従事する海員は其職掌の順位に従ひて船長の職務を行ふ

第四章 海員

第二十六條 海員の雇入若くは雇止を爲し又は雇入契約の更新若くは變更を爲したるときは管海官廳に海員名簿を提出して公認を申請することを要す

第二十七條 管海官廳が公認を爲すには海員名簿に記載したる事項を當事者雙方に讀聞かせたる後之に署名、捺印せしむることを要す但海員の雇止を爲したる場合に於て正常の理由あるときは當事者の一方が出頭せざることも雖も公認を爲すことを得

當事者が印を有せざるときは署名するを以て足る署名すること能はざるときは氏名を代署せしめ捺印するを以て足る若し署名すること能はず且印を有せざるときは氏名を代署せしめ捺印するを以て足る

前項の規定に依り捺印せず又は氏名を代署せしめ若くは拇印したる場合に於ては海員名簿に其事由を附記することを要す

第二十八條 當事者は正當の理由ある場合に限り代理人をして公認を受けしむることを得

第二十九條 公認ありたるときは海員は遅滞なく其船員手帖を管海官廳に提出して公認の認證を申請することを要す

第三十條 海員の雇止に關して争あるときは當事者の一方は管海官廳に其事由を申立て雇止の公認を申請することを得

管海官廳が前項の申請を正當なりと認めたるときは當事者雙方を呼出し海員名簿及び船員手帖を提出せしめ雇止の公認を爲すことを要す

當事者の一方が出頭せざるときは管海官廳は相手方の申立に因りて雇止の公認を爲すことを得此場合に於ては海員名簿及び船員手帖に其事由を記載することを要す

前二項の場合に於ては管海官廳は海員名簿又は船員手帖の提出を強制するこ

とを得

第三十一條 船長は海員の雇入期間中其船員手帖を保管することを要す

第三十二條 海員が雇入期間中脱船したるときは船長は遅滞なく管海官廳に其海員の船員手帖を返還することを要す

第三十三條 海員は雇止ありたる場合に於ては船長に對し其職務の執行又は品行に關する證明書の交付を請求することを得

第三十四條 海員名簿が滅失又は毀損したるときは船長は更に海員名簿を作り之を管海官廳に提出して公認を申請することを要す

第二十七條及び第二十八條の規定は海員名簿及び船員手帖が共に滅失又は毀損したる場合に之を準用す但原管海官廳に公認を申請するときは此限に在らず

第三十五條 海員が雇入期間中第九條又は第十條の規定に依りて船員手帖の交付又は書換を申請したる場合に於て其交付又は書換ありたるときは海員は遅滞なく第二十九條に定めたる手續を爲すことを要す

第五章 紀 律

第三十六條 左の場合に於ては船長は海員を懲戒することを得

- 一 海員が上長に對して尊敬又は従順の道を失ひたるとき
- 二 海員が其職務を怠りたるとき
- 三 海員が他の海員の職務執行を妨げたるとき
- 四 海員が喧争したるとき
- 五 海員が船長の許可を得ずして船舶を去りたるとき又は船長が指定したる時までには歸船せざりしとき
- 六 海員が船長の許可を得ずして點火又は焚火したるとき
- 七 海員が船長の許可を得ずして端艇を使用したるとき
- 八 海員が食料を濫費したるとき
- 九 海員が船長の許可を得ずして酒類を所持するるとき又は吸煙したるとき
- 十 海員が酩酊して事を省せざるとき
- 十一 其他海員が船中の秩序に反する行爲を爲したるとき

第三十七條 懲戒は左の四種とす

- 一 監禁
- 二 上陸禁止
- 三 加役
- 四 減給

第三十八條 監禁は三日以下とし船中の一室に拘置す

上陸禁止は七日以下とし此期間には船舶の碇泊日數のみを算入す

加役は七日以下とし常務時間外に於て役務に服せしむ但一日二時間を超ゆることを得ず

減給は給料月額十分の一以下とす

第三十九條 前條第一項乃至第三項の期間には初日を算入す

第四十條 懲戒の適用は行爲の輕重に従ひ船長之を定む但二種以上の懲戒を併科することを得ず

第四十一條 海員が兇器、爆發若くは發火し易き物、劇藥其他の危險物又は酒

類を所持するときは船長に於て其物を保管又は放棄することを得

第四十二條 海員が人身又は船舶に危害を及ぼすべき行爲を爲さんとするときは船長は必要の期間内其海員の身體を拘束することを得

第四十三條 船長は必要あるときは旅客其他船中に在る者に對しても前二條に定めたる處分を爲すことを得

第四十四條 海員が船長の指定したる時に於て船舶に乗込まざるべき又は船長の許可を得ずして之を去りたるときは船長は乗船を強制することを得

第四十五條 船長の命令に服従せざる者ある場合に於て必要と認むるときは船長は海軍の艦船地方官廳又は管海官廳に援助を求むることを得

第六章 罰 則

第四十六條 詐僞の所爲を以て船員手帖の交付を受けたる者は十五日以上六月以下の重禁錮に處し貳圓以上貳拾圓以下の罰金を附加す

詐僞の所爲を以て海員名簿に公認を受け又は船員手帖に認證を受けたる者亦同じ

第四十七條 第七條、第九條、第十條、第十二條、第二十九條、第三十二條又は第三十五條の規定に反し船員手帖の交付、訂正若しくは公認の認證を申請し又は船員手帖を返還することを怠りたる者は貳圓以上貳拾圓以下の罰金に處す

第四十八條 虚偽の海員名簿又は船員手帖を行使したる者は一月以上一年以下の重禁錮に處し四圓以上四拾圓以下の罰金を附加す

公認を受けたる海員名簿又は認證を受けたる船員手帖を増減變換して行使したる者亦同じ

第四十九條 左の場合に於ては船長を十一日以上六月以下の重禁錮に處し又は參拾圓以上參百圓以下の罰金に處す

- 一 船長が正當の理由なくして商法第五百六十二條第一項に掲げたる書類を船中に備へざるべき又は之を毀棄したるとき
- 二 船長が第十四條の規定に反して書類の提出を拒みたるべき
- 三 船長が商法第五百六十二條第一項第二號乃至第五號に掲げたる書類に記載すべき事項を記載せず又は不正の記載を爲したるとき

四 船長が第十七條第一項又は第二項の場合に於て虚偽の報告を爲したるとき

第五十條 左の場合に於ては船長を拾圓以上五百圓以下の罰金に處す

一 船長が商法第五百六十一條の検査を爲さずして發航を爲したるとき

二 船長が船舶を安全に碇泊せしめ且商法第五百六十三條の規定に従ひ其職務を委任せずして船舶を去りたるとき

三 船長が第十五條の規定に反して甲板に在らざるとき

四 船長が必要なくして豫定の航路を變更したるとき

第五十一條 船長が第十六條第一項、第十七條第一項、第二十二條又は

第三十一條の規定に違反したるときは五圓以上五拾圓以下の罰金に處す

第五十二條 船長が第十九條の規定に違反したるときは二月以上五年以下の重禁錮に處す

第五十三條 船長が第二十條の規定に反して人命又は船舶の保護に必要な手段を盡さざるときは一月以上三年以下の重禁錮に處し又は五拾圓以上五百圓

以下の罰金に處す

船長が第二十條の規定に反して告知を爲さざるときは拾圓以上參百圓以下の罰金に處す

第五十四條 船長が第二十一條の規定に違反したるときは十一日以上一年以下の重禁錮に處し又は參拾圓以上參百圓以下の罰金に處す

第五十五條 船舶に急迫の危険ある場合に於て海員が船長の許可を得ずして其船舶を去りたるときは十一日以上三年以下の重禁錮に處す

第五十六條 第十九條又は第二十條の場合に於て船長が人命又は船舶の保護に必要な手段を爲すに當たり海員が上長の命令に服従せざるときは十一日以上二年以下の重禁錮に處し又は五圓以上百圓以下の罰金に處す

第五十七條 船長が第二十三條第一項の規定に反して送還の命令を拒みたるときは參拾圓以上參百圓以下の罰金に處す

第五十八條 船舶所有者又は船長が第二十六條の規定に違反したるときは拾圓以上參百圓以下の罰金に處す



船舶法第三十條及び第三十一條の規定は前項の場合に之を準用す

第五十九條 船長が第三十三條に定めたる證明書を交付せず又は不正の記載を爲したる證明書を交付したるときは五圓以上五拾圓以下の罰金に處す

前項の罪は被害者の告訴を待て之を論ず

第六十條 船長が第三十四條第一項の規定に違反したるときは五圓以上貳百圓以下の罰金に處す

第六十一條 海員が雇入手續の終はりたる後正當の理由なくして船長の指定したる時に於て船舶に乗込まざるときは貳圓以上貳拾圓以下の罰金に處す

第六十二條 船長が第五章に定めたる處分を爲すに當たり海員に助力を爲すべきことを命じたる場合に於て海員が其命令に服従せざるときは十一日以上六月以下の輕禁錮に處し又は五圓以上百圓以下の罰金に處す

第六十三條 船員、旅客其他船中に在りたる者が本法の規定に依り管海官廳より呼出を受け又は書類の提出を命ぜられたる場合に於て正當の理由なくして之に應ぜざるときは五圓以上五拾圓以下の罰金に處す

第六十四條 海員が船長の許可を得ずして二十四時間以上船中に在らざるときは貳圓以上貳拾圓以下の罰金に處す

海員が脱船したるときは十一日以上六月以下の重禁錮に處す

海員が外國に於て前二項の罪を犯したるときは一等を加ふ

第六十五條 船長が正當の理由なくして船舶を遺棄したるときは一月以上二年以下の重禁錮に處す

船長が外國に於て正當の理由なくして海員を遺棄したるときは一月以上一年以下の重禁錮に處す

第六十六條 海員が船長の許可を得ずして兇器、爆發又は發火し易き物、劇藥其他の危険物を所持するときは五圓以上百圓以下の罰金に處す

第六十七條 故なく船體若しくは機關の要部を毀損し又は重要な屬具を毀損若しくは放棄したる者は十一日以上三年以下の重禁錮に處し五圓以上五拾圓以下の罰金を附加す

前項の罪を犯し因て船舶の運航を妨げたるときは一等を加へ船舶を覆没し又

は人を死に致したるときは重懲役に處す

第六十八條 船舶の運航を妨ぐる目的を以て前條第一項の罪を犯したる者は重懲役に處し因て船舶を覆没し又は人を死に致したるときは刑法第六十九條の例に依りて處斷す

第六十九條 海員が上長に對して脅迫の罪を犯したるときは刑法各本條の例に照し一等を加ふ

刑法第三百二十九條の規定は前項の場合には之を適用せず

第七十條 海員が上長に對して毆打創傷の罪を犯したるときは刑法各本條の例に照し一等を加ふ

第七十一條 船長が旅客、海員其他船中に在る者に對して其職權を濫用し又は虐待を爲したるときは十一日以上三月以下の重禁錮に處し又は十圓以上參百圓以下の罰金に處す

前項の罪を犯し因て人を疾病、死傷に致したるときは前條の例に依りて處斷す

第七十二條 海員が相黨與して左の行爲を爲したるときは各號の區別に依りて處斷し首魁は一等を加ふ

一 職務に服せず又は上長の命令に服従せざるときは十一日以上六月以下の重禁錮に處す

二 脱船したるときは一月以上一年以下の重禁錮に處す

三 第六十九條又は第七十條の罪を犯したるときは各本條の例に照し一等を加ふ

第七十三條 船員が著しく其職務を怠り因て船舶を毀損若くは覆没し又は人を死傷に致したるときは一月以上五年以下の重禁錮に處し又は拾圓以上千圓以下の罰金に處す

第七十四條 本章の規定中船長に適用すべきものは船長に代りて其職務を行ふ者にも亦之を適用す

附 則

第七十五條 本法は商法施行の日より之を施行す

石数を以て積量を表示する船舶に關しては勅令を以て別に本法施行の期日を定むることを得

第七十六條 明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則は本法施行の日より之を廢止す但本法施行前に同規則に定めたる罰則を適用すべき行爲ありたるときは本法施行の後と雖も其罰則を適用す

第七十七條 船員は本法施行の日より六箇月間は船員手帖の交付を申請することを要せず

前項の期間經過の後は船員は遲滞なく船員手帖の交付を申請することを要す  
第七十八條 從來の海員名簿は本法施行の日より六箇月間は商法に定めたる海員名簿と同一の効力を有す

前項の期間内に公認ありたるときは其期間經過の後と雖も其後始めて公認あるまでは從來の海員名簿は尙ほ其効力を有す

第七十九條 本法の規定に依り管海官廳が行ふべき事務に付ては主務大臣は市町村長、市制又は町村制を施行せざる地方に在りては戸長又は之に準すべき

者をして其事務を行はしむることを得

第八十條 本法の施行に關する細則は主務大臣之を定む

○船員法施行細則

(明治三十二年六月十二日  
遞信省令第二十五號)

第一章 總 則

第一條 船員法又は本則の規定に依る申請は特に明文を掲ぐる場合を除く外書面又は口頭を以て之を爲すことを得

第二條 代理人に依りて前條の申請を爲すときは代理人は其權限を證する書面を管海官廳に差出すべし

第三條 船員法及本則中最初に到着したる港の管海官廳と稱するは最初に到着したる管海官廳ある港の管海官廳を謂ふ

第四條 本則第二章乃至第四章の事務は管海官廳に於て當事者の申請に依り理由ありと認むるときは休暇日と雖も之を行ふことあるべし

第二章 船員手帖

第五條 船員法第三條第一項又は第六條に依り船員手帖の交付を申請せんとする者は第一號書式の申請書を最寄管海官廳に差出すべし

船員法第三條第二項但書の場合を除く外申請者は同項に掲ぐる事項を證する戸籍吏の書面其他の公正證書を申請書に添附すべし但申請書に其證明を受けたるときは此限にあらず

第六條 未成年者は前條の規定に従ふ外左の事項を記載し法定代理人の署名捺印したる書面を申請書に添附すべし

- 一 未成年者の氏名及本籍地
- 二 船員と爲ることを許したる旨
- 三 船員と爲ることを許したる年月日
- 四 法定代理人の本籍地及住所

第七條 船員法第七條に依り船員手帖の訂正を申請せんとする者は船員手帖を添へ同法第三條第二項但書の場合を除く外訂正を要する事項を證する戸籍吏

の書面其他の公正證書を最寄管海官廳に差出すべし

第八條 船員法第九條又は第十條に依り船員手帖の交付又は書換を申請せんとする者は其事由及從來受有の船員手帖を交付したる管海官廳の名稱を最寄管海官廳に説明し且書換を申請する場合には船員手帖を差出すべし

第五條第二項及第六條の規定は前項の場合に之を準用す但船員法第十一條但書の場合に此限にあらず

海員雇入期間中第一項の申請を爲すには書面を以て船長之に連署することを要す

第九條 船員法第十二條又は第三十二條に依り船員手帖を返還せんとする者は其事由を説明し最寄管海官廳に船員手帖を差出すべし

第十條 船員手帖餘白なきに至りたるときは船員は現に受有する船員手帖を最寄管海官廳の檢閲に供し更に其交付を申請すべし

第十一條 本章に掲ぐる申請は日本に於ける管海官廳に之を爲すべきものとす  
第十二條 船員手帖の様式は第二號書式に依る

第三章 船長

第十三條 船長は海員名簿、屬具目錄、航海日誌又は旅客名簿を船中に備へたる  
とき遅滞なく書式に従ひ必要なる事項を之に記載すべし  
前項に依り記載したる事項に變更を生じたるときは船長は遅滞なく之を訂正  
すべし

第十四條 左の場合に於て船長は事實の發生後遅滞なく書式に従ひ航海日誌に  
事實の顛末、發生の年月日時、場所其他關係の事項を記載すべし

- 一 豫定の航路を變更したるとき
- 二 人命又は船舶を救ひたるとき
- 三 衝突其他の海難に罹りたるとき
- 四 豫定せざる港に寄港したるとき
- 五 船舶に急迫の危険ありたる爲め船長に於て船舶を去りたるとき
- 六 船長に於て海員を懲戒したるとき
- 七 船員法第四十一條乃至第四十四條に依りて處分を爲したるとき

八 船員法第四十五條に依り援助を求めたるとき

九 船中に於て犯罪ありたるとき

十 船中に於て出生ありたるとき

十一 船中に於て死亡ありたるとき及死亡者の遺産を處分したるとき

十二 前各號に掲ぐる場合の外船中に於て異常の事變發生したるとき

第十五條 船長は旅客乗船したるときは其乗船後、下船したるときは其下船後  
遅滞なく旅客名簿に書式に定むる事項を記載すべし

第十六條 本章に掲ぐる書類を記載するに當り文字を訂正、挿入又は削除した  
るときは文字の前後に括弧を附し船長之に認印し訂正又は削除したる文字は  
之を讀み得べき様字體を存すべし

第十三條第二項に依り書類を訂正したるときは前項の規定に従ふ外其行端に  
訂正を爲したる年月日を記載し船長之に認印すべし

第十七條 管海官廳に於て船員法第十六條第一項に依り航海日誌の檢閲を爲し  
たるときは之に檢閲を爲したる旨及檢閲の年月日を記載し管海官廳の印を捺

して之を船長に還付す

第十八條 船員法第十七條第一項又は第二項の報告は書面を以て之を爲すことを要す

前項の書面及船員法第十八條の報告書には左の事項を記載し船長之に署名捺印することを要す

- 一 船舶の名稱
- 二 船籍港
- 三 船舶所有者の氏名又は名稱
- 四 報告すべき事實の發生したる場所及年月日時
- 五 報告すべき事實の顛末

第十九條 報告書の認證は報告書に認證を爲したる旨及認證の年月日を記載し管海官廳の印を捺して之を爲す

第二十條 海員船中に於て死亡したるときは船長は遲滞なく重立ちたる海員二名以上の立會を以て其遺産を取調べ遺産目録を作るべし

遺産目録には左の事項を記載し船長之に署名捺印し遺産の取調べに立會ひたる海員之に連署することを要す

- 一 死亡したる海員の氏名、本籍地、住所及死亡の年月日時
- 二 遺産の品名及各品の數量、若し金錢なるときは其金額
- 三 遺産目録を作りたる年月日

第二十一條 船長は戶籍法の規定に依り死亡に關する航海日誌の謄本を戶籍吏公使又は領事に送付する場合に於ては其港の管海官廳、其港に管海官廳なきときは其後最初に到着したる港の管海官廳に遺産目録を差出すべし

船中に死亡者ありたるも前項に掲ぐる謄本の送付を要せざるときは船長は遺産目録を作りたる港の管海官廳、其港に管海官廳なき場合又は航行中之を作りたる場合に在りては其後最初に到着したる港の管海官廳に遺産目録を差出すべし

第二十二條 前條に依り遺産目録を受けたるときは管海官廳は其管海官廳又は其指定する管海官廳に遺産を差出すべきことを船長に命ずることを得

第二十三條 船長就職又は退職の認證を申請せんとするときは就職又は退職及其年月日を證する書面を添へて船員手帖を最寄管海官廳に提出すべし  
就職の認證を申請せんとする場合には船長は前項の規定に従ふ外船舶の種類名稱、航路定限及積量を記載したる書面を差出し且其海技免狀を管海官廳の檢閲に供すべし

第二十四條 第十九條の規定は前條の認證の場合に之を準用す  
第四章 海員

第二十五條 海員雇入の公認を申請せんとするときは雇者は海員名簿に書式に定むる事項を記載し左の書類を添へて雇入港の管海官廳、其港に管海官廳なきときは其後最初に到着したる港の管海官廳に之を提出すべし  
一 第三號書式の申請書  
二 被雇者海技免狀を有するときは其免狀  
第二十六條 海員名簿及前條第一號の書面に被雇者の氏名及之に關する事項を記載するには左の順序に従ふべし

第一 甲板部海員

第二 機關部海員

第三 事務部海員

同一の部に屬する海員間に在りては上長を先にすべし

第二十七條 當事者代理人をして海員雇入の公認を受けしめんとするときは其理由を記載し且其權限を證する書面を代理人に交付し代理人は之を管海官廳に差出すべし

第二十八條 海員雇入の公認を爲すに當り管海官廳に於て海員名簿に記載したる事項を當事者に讀聞かすには被雇者に付ては第二十六條の順序に依り之を爲す

當事者をして署名捺印せしむるには雇者を先にし被雇者を後にす被雇者間に在りては第二十六條の順序に依る

第二十九條 被雇者總員署名捺印したるときは管海官廳は海員名簿に海員雇入の公認を爲したる年月日を記載し管海官廳の印を捺して第二十五條第二號の

書類と共に之を雇者に還付す

第三十條 船員法第二十九條に依り雇入の公認の認證を申請せんとするときは海員は船員手帖に書式に定むる事項を記載し公認を爲したる管海官廳に之を提出すべし

第三十一條 船員法第三十五條に依り公認の認證を申請せんとするときは海員は書式に従ひ船員手帖に現在の契約條項其他の事項を記載し最寄管海官廳に之を提出すべし

前項の場合に於て船長は現在の契約條項を記載したる海員名簿を管海官廳に提出すべし

第三十二條 船員法第六條に依り船員手帖の交付を申請したる者其雇入期間中船員手帖の交付ありたるときは遲滞なく前條第一項の手續を爲し公認の認證を申請すべし

前條第二項の規定は前項の場合に之を準用す

第三十三條 左の場合に於ては海員雇止の公認を申請すべし

- 一 海員雇入期間満了したるとき
  - 二 海員死亡したるとき
  - 三 商法第五百八十一條又は第五百八十三條に依り海員を雇止めたるとき
  - 四 商法第五百八十七條に依り海員雇入契約終了したるとき
- 第三十四條 海員雇止の公認を申請せんとするときは雇者は海員名簿に書式に定むる事項を記載し左の書類を添へて前條に掲ぐる事實の發生したる港の管海官廳、其港に管海官廳なきときは又は航行中其事實發生したるときは其後最初に到着したる港の管海官廳に之を提出すべし

一 第四號書式の申請書

二 被雇者に關し記載を爲したる航海日誌

第三十五條 第二十六條乃至第二十八條及第三十條の規定は海員雇止の公認の場合に之を準用す

第三十六條 被雇者總員又は船員法第二十七條第一項但書の場合に在りては出頭したる當事者總員署名捺印したるときは管海官廳は海員名簿に海員雇止の



公認を爲したる年月日並當事者の一方出頭せずして公認を爲したるときは其事由を記載し管海官廳の印を捺して第三十四條第二號の書類と共に之を雇者に還付す

第三十七條 船員法第三十條第一項に依り雇止の公認を申請する者は其申立を確むべき證憑あるときは之を管海官廳に提出すべし

第三十八條 管海官廳に於て船員法第三十條第二項に依り當事者雙方を呼出したるときは當事者の争に關し各申立を爲さしむべし此場合に於て申請者の相手方は其申立を確むべき證憑あるときは之を提出することを得

第三十九條 管海官廳に於て前條の手續を爲したる後申請を理由ありとするときは海員名簿に書式に定むる事項船員法第三十條に依り海員雇止の公認を爲したること及公認の年月日を記載し管海官廳の印を捺して之を雇者に還付す

第四十條 海員雇入契約更新の公認を申請せんとするときは雇者は海員名簿に書式に定むる事項を記載し左の書類を添へて更新を爲したる港の管海官廳、其港に管海官廳なきときは又は航行中更新を爲したるときは其後最初に到着し

たる港の管海官廳に之を提出すべし

一 第五號書式の申請書

二 第二十五條第二號の書類

三 第三十四條第二號の書類

第四十一條 海員雇入契約變更の公認を申請せんとするときは雇者は海員名簿に書式に定むる事項を記載し左の書類を添へて變更を爲したる港の管海官廳其港に管海官廳なきときは又は航行中變更を爲したるときは其後最初に到着したる港の管海官廳に之を提出すべし

一 第六號書式の申請書

二 契約の變更被雇者の職務に係る場合に於て被雇者海技免狀を有するときは其免狀

第四十二條 第二十六條乃至第二十九條の規定は海員雇入契約の更新又は變更の公認の場合に之を準用す

第四十條第二號及第三號の書類又前條第二號の書類は更新又は變更の公認あ

りたるときは之を雇者に還付す

第四十三條 海員公認の認證を申請したるときは管海官廳は船員手帖に公認及公認の認證の年月日並第三十一條又は第三十二條の場合に在りては公認の認證の事由及前條の場合に在りては更新又は變更の要旨、場所及年月日を記載し管海官廳の印を捺して雇止の場合には之を海員に還付し其他の場合には之を雇者に交付す

第四十四條 船員法第三十四條第一項に依り公認を申請せんとするときは左の書類を添へ海員名簿を作りたる港の管海官廳、其港に管海官廳なきときは又は航行中之を作りたるときは其後最初に到着したる港の管海官廳に之を提出すべし

一 第七號書式の中請書

二 第二十五條第二號の書類

三 被雇者の船員手帖現存するときは其手帖

前項の海員名簿には現に雇入期間中に係る海員に付て書式に定むる事項及原

管海官廳に海員名簿を提出する場合に在りては被雇者總員の氏名、其他の場合に在りては前項に依り提出する船員手帖を受有する被雇者の氏名を之に記載すべし

第二十六條の規定は前二項の場合に之を準用す

第四十五條 第二十七條及第二十八條の規定は被雇者全部又は一部の船員手帖滅失又は毀損したる場合に之を準用す但原管海官廳に前條の海員名簿を提出するときは此限にあらず

第四十六條 船員法第三十四條第一項の申請に依り公認を爲したるときは管海官廳は海員名簿に同項の公認を爲したること及公認の年月日を記載し管海官廳の印を捺して第四十四條第二號及第三號の書類と共に之を船長に還付す

第四十七條 第十六條第一項の規定は認印に關する規定を除く外第二十五條第三十條第三十一條第三十二條第三十四條第三十五條第四十條第四十一條又は第四十四條第二項に依り海員名簿又は船員手帖に記載を爲すに當り文字を訂正、挿入又は削除したる場合に之を準用す此場合には管海官廳に於て公認又

は公認の認證を爲すに當り之に認印するにあらざれば文字の訂正、挿入又は削除は其效を有せず

第四十八條 公認及公認の認證は管海官廳に於て當事者の申請に依り理由ありと認むるときは管海官廳外の場所に於て之を行ふことあるべし

第五章 手数料

第四十九條 手数料の額左の如し

- 一 船員手帖の交付又は書換 一部に付 貳拾錢
- 二 船員手帖の訂正 船員法第三條第二項の事項一箇に付 五錢
- 三 報告書の認證 一通に付 壹圓
- 四 船長就職又は退職の認證 一件に付 貳拾錢
- 五 公認 被雇者一人に付 拾錢
- 六 公認の認證 被雇者一人に付 五錢

但船員法第三十四條の場合に於ては 一件に付 五錢

第五十條 前條第一項第一號の手数料は第八號書式の手数料納付書に其金額に相當する収入印紙を貼用して之を納付すべし

前條第一項第二號乃至第六號の手数料は遞信大臣の告示する場所に於ては前項の規定に依り、其他の場所に於ては現金を以て之を納付すべし

前二項に依り貼用したる印紙は管海官廳に於て消印を爲すべきものとす但申請者に於て自己の便宜上消印を爲すは妨なし

第六章 罰則

第五十一條 第十三條第二項第二十條第一項第二十一條第三十一條第二項又は第三十二條に違反したる者又は第二十二條の命令に違反して管海官廳に遺産を差出さざる者は貳圓以上貳拾圓以下の罰金に處す

附則

第五十二條 本則は船員法施行の日より之を施行す

第五十三條 從來の海員名簿を提出して海員雇入の公認を申請せんとするときは雇者は被雇者(海員)氏名、浦役人檢印及事故摘要の欄を除く外其各欄に相

當の事項を記載すべし

第五十四條 前條の場合に於ては雇者は明治年月日雇主と記載したる下、被雇者は被雇者(海員)氏名の欄に署名捺印すべし

第五十五條 従來の海員名簿を提出して海員雇止の公認を申請せんとするときは本則施行前に雇入の公認を受けたる者なるを否かを問はず雇止の事由、場所及年月日を之に記載すべし

第五十六條 前條の規定は従來の海員名簿を提出して海員雇入契約の更新又は變更の公認を申請せんとする場合に之を準用す

第五十七條 前二條の場合に於て當事者をして署名捺印せしむるには各條の記載を爲したる次行に之を爲さしむべし

第五十八條 海員の雇止、雇入契約の更新又は變更の公認に關し第三十六條第三十九條第四十二條又は第四十六條に依り管海官廳に於て爲すべき記載及捺印は前條の署名捺印を爲したる次行に之を爲す

第五十九條 船員法施行の日より六箇月間に海員雇止の公認を爲したるときは

管海官廳は左の事項を記載し管海官廳の印を捺したる書面を海員に交付すべし

一 船舶の名稱、番號、積量、船籍港及船舶所有者の氏名又は名稱

二 海員の氏名及本籍地

三 雇入の公認ありたる年月日、場所、海員の従事したる職務及給料

四 雇止の公認ありたる年月日、場所及雇止の事由

第六十條 従來の海員名簿にして二葉以上の用紙を綴合せたるものには管海官廳に於て公認を爲すとき其各葉に契印すべし

第六十一條 第四章中海員名簿に關する規定は前八條に於て特に明文を掲ぐる場合を除く外従來の海員名簿に付て之を準用す

第六十二條 最後の雇止の公認ありたることを證する海員雇止證書又は第五十九條の書面は船員法施行後六箇月間に雇入の公認を受くる場合及該期間満了後初めて雇入の公認を受くる場合に雇者より之を管海官廳に提出すべし  
前項に依り提出したる海員雇止證書又は第五十九條の書面には管海官廳に於

て雇入の公認を爲したるとき其裏面に公認の年月日及船舶の名稱を記載し管  
海官廳の印を捺して之を雇者に還付すべし (書式畧之)

○開港々則實施港

開港々則に據るときは同港則を實施すべき港は七港即ち横濱、神戸、新潟  
夷港、大阪、長崎、函館と規定せられたり此等諸港は早晚同港則を實施せ  
らるべきも現今實施中の港は横濱、神戸、長崎及門司の四港とす其港長及  
港務官の氏名左の如し

横濱港	港長	海軍少將 森 又七郎	港務官	海軍少佐 天野才藏
神戸港	港長	海軍大佐 田代郁彦	港務官	船 長 林 治 定
長崎港	港長	海軍少佐 河村弘貞	港務官	船 長 椎名清人
門司港	港長	船 長 藤井治三郎	港務官	海軍大尉 小林廉平

○開港港則

(明治卅一年七月 勅令第一三九號)

「明治三十二年八月勅令 第三六〇號にて追加

第一條 左に記載する外國通商を許したる諸港の經界は左の如く之を定む

横濱の港界は十二天(マンダリン、アラフ)より燈船まで夫より正北に向ひ鶴

見川口の東岸まで引きたる一線内に含まる

神戸の港界は脇の濱の東角より正南に引きたる一線と和田岬より北東に引き

たる他の一線との二線を經界となしたる面積内

新潟の港界は燈臺を中心とし二海哩半の半徑を有する圓圍の一弧内に含まる

夷港の港界は椎泊村より北五十里村外堺まで引きたる一線と加茂湖東岸港町

より同湖北西岸加茂村まで引きたる一線との内に含まる

大阪の港界は武庫川口目標(ツリーポイント)より南微西に向ひ引きたる一線

と大和川口より引きたる一線と武庫川口目標(ツリーポイント)より六海哩

大和川口より五海哩の所に於て相接する其二線内に含まる

長崎の港界は小瀬戸浦の南東端より鼠島の外端を經て長刀岩まで夫より東微

○開港港則

七十二

南に引きたる線以内

函館の港界は阿野岡崎より南方沖合半海哩の所より上磯村有川口の東岸まで引きたる一線内に含まる

「清水の港界は真崎より正北に引きたる一線以内

武豊の港界は布土村より正東に引きたる一線以内

四日市の港界は燈臺を中心として二海里半の半徑を有する圓圈の一弧内  
絲崎の港界は糸崎よりカイノ山の巔に引きたる一線以内

下ノ關の港界は彦島弟子待の鼻より巖流島の南東端まで夫より北東微北に向ひ引きたる一線及彦島海士浦の鼻より北東に引きたる一線以内  
門司の港界は白木崎より北西四鐘の所より門司崎に引きたる一線と正南に引きたる他の一線との二線を經界となしたる面積内

博多の港界は殘島の北端より滿切に引きたる一線及小戸鼻より殘島の南端に引きたる一線以内

唐津の港界は高島の北端より正東及正西に引きたる二線以内

口の津の港界は宮崎鼻より正南に引きたる一線と白間崎より正東に引きたる他の一線との二線を經界となしたる面積内

三角の港界は瀬戸の鼻より大矢野島コンピラ鼻まで際崎の鼻より戸馳島野崎まで同島兎鼻より千束島六四郎鼻まで夫より大矢野島塔ヶ崎まで引きたる四線以内

嚴原の港界は虎崎より耶良崎(一名寢釋迦鼻)に引きたる一線以内

佐須奈の港界は立塲崎よりトロク崎に引きたる一線以内

鹿見の港界は長崎島より塔崎に引きたる一線以内

那覇の港界は先原崎より千の瀬の北端に引きたる一線及安里川口より千の瀬の北端に引きたる一線以内

濱田の港界は黒崎より馬島の西端に引きたる一線と馬島の北端(千疊敷鼻)より入遺鼻崎に引きたる一線以内

境の港界は燈臺を中心として一海里半の半徑を有する圓圈の一弧内及外の江の西端より正北に引きたる一線以東

○開港港則

七十三

○開港港則

七十四

宮津の港界は片島鼻より日置崎に引きたる一線以内

敦賀の港界は赤崎より蛭子崎に引きたる一線以内

七尾灣の港界は能登島松ヶ崎より南東に引きたる一線以西及屏風崎峽以東

伏木の港界は燈臺を中心として一海里半の半徑を有する圓圈の一弧内

小樽の港界は平磯岬よりカヤシバ岬に引きたる一線以内

釧路の港界は燈臺より正西二海里に引きたる一線以北及該線の西端より正北に引きたる一線以東

室蘭の港界はエンルム崎より大黒島を経てホテイシ崎に引きたる一線以内

第二條 各船舶は入港するに當り其國旗及信號符字を掲ぐべし定期郵便船は會社旗を以て信號符字に代用することを得

右國旗及信號符字又は會社旗は船舶の著港を港長に届出たる後にあらざれば之を引下すべからず

著港届は日曜日及大祭日を除くの外著港後二十四時間内に之を差出すべし但し著港届を差出したる後にあらざれば如何なる船舶たりとも税關手續の便利

を興へざるものとす

第三條 各船長は其著港に際し自由交通の許可を受くるまでは其船舶と他の船舶或は陸地との間に於ける一切の交通を差止むべし

第四條 港長の端艇は港の入口近傍に出向き居り港長は各船舶の入港するに當り其泊船所を示定すべし而して各船舶は止むことを得ざる場合を除くの外特許なくして其泊船所を去るべからず但し港長に於て必要と認むるときは船舶をして其泊船所を移さしむることを得

第五條 港長は其執務の間常に制服を著け其端艇には別紙雛形の如き旗を掲ぐべし港長は何時たりとも船舶の運動繫船の適否及碇船所に關する指揮が果して實行せられ居るや否を検査することを得

第六條 如何なる船舶も公けの航路に投錨し若くは其他航海の自由を障礙すべからず

「デブ、ブームス」を接ぎ出したる船舶にして其「デブ、ブームス」が航海の自由を障礙するときは港長の請求に従ひ之を取込むべし

○開港港則

七十五

第七條 港界内に碇泊し又は運航する各船舶は日没と日出の間には海上衝突豫防に關する法令に規定したる各種の船燈を掲ぐべし

第八條 暴風雨の來らんとするときは或は警報信號を掲げたるときは各船舶に於て直に一個又は一個以上の豫備錨を投下するの準備を爲すべし尤も瀛船は此外別に蒸氣を發生せしむべし

第九條 常用に超過し爆發物又は容易に燃焼すべき物料を積載したる一切の船舶は港界外に來り其處にて港長の指揮を待つべし斯く指揮を待つ間右船舶は日出と日没の間にはBの信號日没と日出の間には紅燈を前檣の頂上に掲ぐべし各船舶は港長の指定したる場所にあらずれば前記の物料を積入れ又は荷卸すべからず

「港長は港界内に於て前項の場所を指定し難しと認むるときは港界外に於て適當の場所を指定することを得

前項に依り指定したる場所は港界内に在るものと看做す」

「」は明治三十二年十月勅令第四〇三號にて追加

第十條 休繋中又は修繕中の船舶及總て「ヤット」倉庫船、貨船及端艇等は特に港長の指定したる泊船所に碇泊すべし

第十一條 船舶が港界内に於て火を失したるときは救援の來るまで船鐘を打鳴すべし且つ日出と日没の間にはNMの信號を掲げ日没と日出の間には斷へず紅燈を上下すべし

警察官の救援を要するときは日出と日没の間にはGの信號を掲げ日没と日出の間には藍火若くは閃火を示すべし  
前記の如き信號に用ゆる場合の外港長の允許を得るにあらずれば港界内に於て銃砲及烟火等を發することを得ず

第十二條 帝國政府に於て流行病若くは傳染病(虎烈刺、天然痘、黃熱、猩紅熱「ペスト」の類)のある地と布告したる地より來着し又は航海中船中に該病ありたる船舶は港界外に來り日出と日没の間には黃旗を日没と日出の間には紅白二燈を上下に連ね前檣の頂上に掲ぐべし又前記の船舶は當該衛生官吏の臨檢を受くべし



衛生官吏臨檢の爲め其船舶に近寄りたるときは適當の豫防を施し得る爲めに航海中現に該病發生の有無及該病の性質如何を該官に通知すべし

右船舶は自由交通の允許を受くるまで黄旗若くは前記の燈火を引下すべからず且當該衛生官吏の允許を得るにあらざれば何人たりとも上陸せしめ又は一切他の船舶と交通するを許さず

前數項の規定は港界内に碇泊する船舶中に於て前記の流行病及傳染病の内何病にても發生したるときに之を適用す

右船舶は港長より其旨命令に接するときは其泊船所を移轉すべし

牛羊等傳染病ある地より來着し又は航海中該病を發生したる船舶は當該衛生官吏の允許を得るにあらざれば牛羊等又は其死體、皮革又は骨を陸揚し又は他船に積換ゆることを許さず

第十三條 港界内に於て死體、荷足、灰燼、塵芥等を海中に投棄すべからず石炭、荷足其他之に類する物料を積卸するときは其海中に脱落するを防ぐ爲め必要の豫防を爲すべし

何船舶にても港に害ある一切の物料を海中に投棄し又は怠慢に依り脱落せしめたるときは港長より其旨命令に接せば該船舶に於て之を取除くべし若し取除かざるに於ては港長は該船舶の費用を以て之を取除かしむることを得

第十四條 船舶出港せんとするときは其旨港務局に届出で且出帆旗を引揚ぐべし一定の時日出帆する漁船は其著港及出帆に對し單に一回の届出を爲すを以て足れり

第十五條 一港内又は其附近の公けの航路の防害となるべき總ての難破物又は其他の物件は港長の指定せる時間内に其所有主に於て之を取除くべし若し港長の指定せる時間内に此命令を遵行せざるに於ては港長は所有主の費用を以て之を取除かしめ又は破壊せしむることを得

第十六條 港務局は定期郵便漁船の爲め適切にして且充分なる浮標の繫船器若干を備へ置き之を使用する所の船舶をして成規の使用料を拂はしむべし

第十七條 燈船、信號用浮標又は立標には鏈、綱其他の船具を繋ぐべからず船舶若し燈船、浮標、立標、埠頭及其他の造營物に乗掛け又は之を毀損した

るときは其修繕又は再設の爲めに必要の費用は該船舶に於て之を支辨すべし  
 第十八條 本則の規定を犯したるときは貳圓以上貳百圓以下の罰金に處す  
 第十九條 船舶に科する罰金、使用料又は費用に付ては船長も亦其責を負ふもの  
 第二十條 本則に依り船舶に科したる罰金、使用料又は費用を完納するか或は之に對し港長の満足すべき擔保物を港長に差出すにあらざれば其船舶の出港を許さず

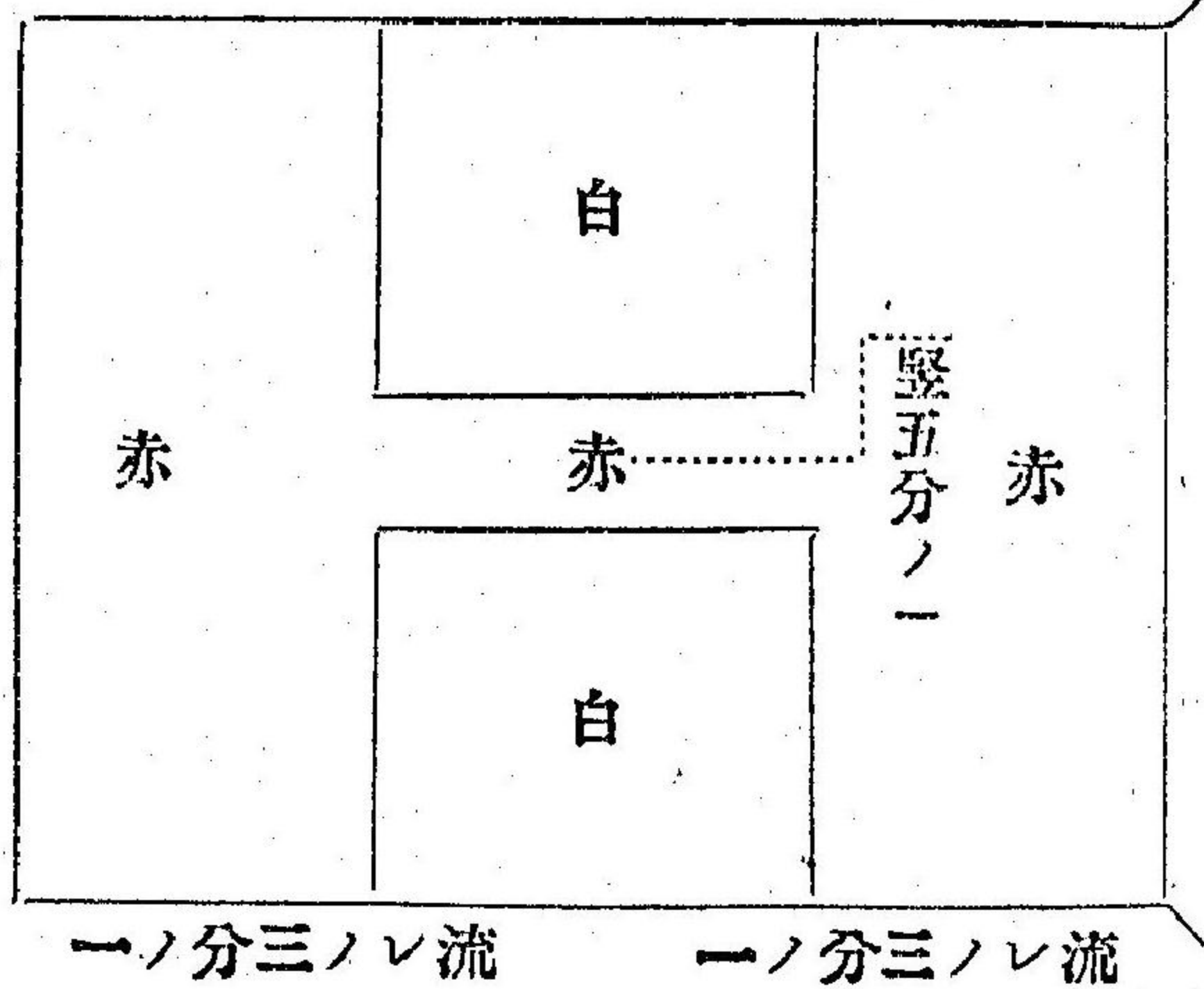
第二十一條 本則に於て港長と稱するは助役及代理者をも包含し船長と稱するは其名稱の何たるを問はず船舶を指揮監督する者の義にして港と稱するは本則第一條中に列記せる諸港の一を指す

第二十二條 各港に於て其一部分を軍艦の碇泊所として取除け置くべし  
 第二十三條 本則の規定中軍艦に適用せらるべきものは第四條、六條、十二條

第二十一條の規定及第十三條第一項及二項の規定に限る  
 第二十四條 本則施行の時期及場所は遞信大臣之を告示す

本則實施に關する細則は遞信大臣之を發布す

形 雜 章 旗 の 條 五 第



○開港港則施行細則

（明治卅一年九月遞信省令第一六號）  
（明治三十二年七月遞信省令第三二號にて改正）

第一條 「港務局官吏船舶に臨檢したるときは検査に關する許可證を査閲すべし」

第二條 港長の示定したる泊船所を移轉せんとするときは船長は願書を港務局に差出し豫め允許を受くべし

第三條 船舶の著港届は第二號書式に依り港務局に差出すべし

第四條 「開港港則第九條に於て爆發物と稱するは「プラスチック、セラチン、彈藥包、爆發管、ダイナマイト、煙火、導火管、セリグナイト」、「ナイトロケリセリン」、火藥、棉火藥、無煙火藥、雷管の類を謂ひ容易に燃焼すべき物料と稱するは生石油（ブルマ）油、ラングーン油、ロツク油を包含す）石油、ナフタ、的列並底油、依的兒、偏蘇爾、石油偏陳、アセトン、酒精、及硫化炭素の類其他華氏九十五度以下の熱度に依り發火すべき氣體を發するものを謂ふ」

第五條 船舶に設備する大砲一門毎に火藥五十發分導火管類七十箇、小銃一挺

毎に火藥百發分雷管百五十箇及信號用の榴彈、火箭、燭管、救命燭を除くの外爆發質の物料は總て之を常用外と看做す

容易に燃焼すべき物料は船舶所用の目的を證明し得るもの、外總て之を常用外と看做す

第六條 信號用の外港界内に於て銃砲及煙火等を發せんとするときは願書を港務局に差出し豫め允許を受くべし

第七條 港界内に於て船舶を休繋し又は修繕せんとするときは豫め其旨を港務局に届出づべし

第八條 開港港則第十二條第六項の船舶及碇泊中獸類傳染病の發生したる船舶は速に其旨を港務局に届出づべし

第九條 動物の死體、灰燼、塵芥等を取棄んとする船舶は港務局に於て承認したる塵船を使用すべし

塵船を使用せんとする船舶は船内見易き處にFの信號若は籃を掲げて目標となすべし

第十條 繫船浮標を使用せんとする船舶は豫め港務局の允許を受くべし  
前項の允許を受けたる船舶は港務局の告知を受けたるときは遅滞なく成規の  
使用料を納入すべし

繫船浮標使用料に關する規程は別に之を定む

第十一條 繫船浮標使用の允許を受けたる船舶は港長の指定したる繫船浮標に  
限り之を使用することを得

港長は必要に依り使用すべき浮標の變更を命ずることを得

第十二條 船舶出港せんとするときは第四號書式の出港届を港務局に差出すべ  
し

第十三條 一定の日時に發着する漁船にして其著港及出港に付一回の届出を爲  
す者は第六號書式に依るべし

第十四條 出港したる船舶避難、修繕其他事故の爲め出港後十二時間内に歸港  
したるときは其事由を記載したる届書を港務局に差出し著港届に代ふること  
を得

第十五條 開港港則第二十條に規定する擔保物は帝國の通貨及帝國政府の公債  
證書に限る

第十六條 本則の規定は第二條、第八條及第九條を除くの外軍艦には之を適用  
せず

第十七條 第一條の規定は沿海通航船には之を適用せず

第十八條 船籍證書を受有するに及ばざる船舶及一定の港津間に往復する積量  
百噸以下の沿海通航船は船主より豫め港務局に届出で允許を受くるに於ては  
第三條及第十二條第一項の手續を省畧することを得

第十九條 警報信號、正午標準時、港界内の航路、泊船所、碇泊所の區域、船  
舶の運動及繫船の方法は各港に付き港長之を定む  
第二號書式

著 港 届

一船の種類  
一船名

○開港港則施行細則

八十六

第四書式

一船主  
 一國籍  
 一船籍港名  
 一總噸數  
 一登簿噸數  
 一發航地名(原發航地)及發航年月日  
 右年月日時當港入船候間此段及御届候也  
 年月日

何港務局宛

船長 某

出港届

一船名

右年月日時(何地)へ向け當港出船可致候間此段及御届候也  
 年月日

船長 某

第六號書式

何港務局宛

著發届

一船名  
 一船主  
 一國籍  
 一船籍港名  
 一總噸數  
 一登簿噸數  
 一發航地名(原發航地)及發航年月日  
 一到達地名(最後發航地)

右年月日時當港入船年月日時出船可致候間此段及御届候也  
 年月日

何港務局宛

船長 某

○開港港則施行細則

八十七

◎港務局所屬繫船浮標使用料規程

(明治三十一年十月  
遞信省告示第二六六號)

- 第一條 繫船浮標使用料は使用時間二十四時に付參圓とす但二十四時未滿の端數は二十四時として計算す
- 第二條 前條の使用時間は港務局に於て使用指定の時より起算す
- 第三條 既納の繫船浮標使用料は使用者に於て實際使用せざるにきと雖も之を還付せず

◎横濱港規程

(明治三十一年九月  
横濱港務局告示第一號)

- 第一條 横濱港内を四區に別ち軍艦汽船帆船及雜種船の碇泊所とす
- 第二條 新波止場立標より北東二分の一北に向ひ防波堤立標まで直線を引き此線より直角に北西二分の一西に當る防波堤内を第一區とす  
前項直線より直角に南東二分の一東に當る防波堤内を第二區とす

白色燈臺より正東に向ひ港界線まで引きたる一線より直角に正南に當る港内を第三區とす

赤色燈臺より正東に向ひ港界線まで引きたる一線より直角に正北に當る港内を第四區とす

第三條 前條に定むる第一區及第二區を汽船小帆船及雜種船の碇泊所とす

第三區を軍艦の碇泊所とす

第四區を爆發物又は容易に燃燒すべき物料を搭載する船舶及登簿噸數三百噸以上の帆船の碇泊所とす

第四條 軍艦の碇泊所は第三區内に限ると雖も港長は時宜に依り防波堤内に碇泊することを許可することあるべし但水雷驅逐艇及水雷艇は防波堤内に於て港長の示定したる場所に碇泊することを得

第五條 港界内に在る船舶風波の爲め避難せんとする場合に於ては港務局の許可を待たずして適宜の錨地に就くことを得

第六條 防波堤内に入るべき航路は兩防波堤の極端に在る各燈臺より東西に走

る所の二並行線内とす但該航路の延長は防波堤外に於ては該燈臺より半海里防波堤内に於ては二鐘半とす

第七條 荒天の場合に於ては港長は特に燈船に於て信號を以て入港船舶の繫泊すべき浮標又は錨地を指示す

第八條 入港の船舶港長の云定したる泊船所に到着したるときは常に雙錨を投じて碇泊すべし

第九條 日没後入港したる船舶は日出に至るまで防波堤外に於て航路を避け碇泊すべし但定期郵便船にして豫め繫船浮標若しくは泊船所の示定を受けたるものは天候其他の事情に於て許す限は直に之に向て進入することを得

第十條 總て船舶は碇泊中軍艦を除くの外「スウインギングブーム」を用ゆるを得ず但防波堤外に於ては此限にあらず

第十一條 漁船防波堤外に屬する港界内を運航するときは半速力を超ゆべからず防波堤の入口を通過し若しくは防波堤内を運航するときは船の安全なる針路を保つに足るの速力に止むべし又帆船は帆を減じて徐行し若しくは曳船を用ゆ

べし

第十二條 總て船舶は航路内及防波堤内に於て他船の前路を横切り又は追越をなす可らず

第十三條 總て船舶は互に他船の運航及投錨を妨害すべからず

第十四條 漁船防波堤内に於て曳船を爲さんとするときは特に港務局の允許を受けたる場合を除くの外左の制限に従ふべし

一 荷船又は端艇を曳くときは曳船の艦より被曳船の船尾に至るまでの距離三百五十尺を超ゆ可らず

二 荷船又は端艇は二隻を限り並列して曳くことを得

三 航洋船は一隻以上を曳くことを得ず

第十五條 總て船舶は西波止場税關棧橋の周圍六百尺以内に入るべからず但棧橋に横着けする船舶は此限にあらず

第十六條 總て位置を變更せんとする船舶は綱を浮標其他棧橋に執るに際し必要外に之を延長 可からず

- 第十七條 警報信號は港務局構内に在る信號竿に之を掲ぐ
- 第十八條 繫船浮標に繫留する船舶荒天に際し尙本船の錨を投ぜんとするときは該浮標に結着したる錨鎖一節を延長したる後投錨すべし
- 第十九條 港内碇泊若くは運航に關しては本規程に定むるもの、外總て海上衝突豫防法に依るべし

○神戸港規程

(明治三十三年十一月廿六日)  
神戸港務局告示第四號

- 第一條 神戸港の經界は北東は脇の濱に建設したる頭部圓形赤白色二基の立標を一線に見たるものとし南西は和田岬に建設したる頭部圓形赤白色二基の立標を一線に見たるものとす
- 第二條 神戸港内を三區に分ち第五條に規定する航路を除き軍艦商船及雜種船の碇泊所とす
- 一 第一區は海上より湊川埵東端に建設したる頭部圓形赤黑色立標を北八

十五度西(磁針方位)に見たる一線より北方一圓とす

二 第二區は海上より前記の立標を北八十五度西(磁針方位)に見たる一線と立標を北五度東(磁針方位)に見たる一線との中間とす

三 第三區は海上より前記の立標を北五度東(磁針方位)に見たる一線より西方一圓とす

第三條 前條に定むる第一區及第三區を商船及雜種船の碇泊所とし第二區を軍艦の碇泊所とす但小形水雷艇は兵庫運河の北口より南方及米利堅波止場より東方税關物揚場入口までの海岸に沿ふて碇泊することを得

港内第一區の極東部と第三區の極南部を帆船及容易に燃燒すべき物料を搭載せる船舶の碇泊所に充つ

第四條 雜種小形船は第一區及第三區の海岸に沿ふて碇泊すべし

第五條 港内航路を分て左の三種とし總噸數六百噸以下の漁船にして神戸西波止場及兵庫陸揚場又は其附近に往復するものは左の航路を取るべし

一 第一種航路は湊川尻北岸に建設したる頭部三角形二基の白色立標を海



上より北西(磁針方位)に見通したる一直線と同所南岸に建設したる頭部三角形二基の赤色立標を海上より北西(磁針方位)に見通したる一直線との一鍵間とす

二 第二種航路は辨天濱防波堤端と同所海岸北端に建設したる頭部三角形二基の白色立標を第一種航路より北十五度西(磁針方位)に見通したる一線の東方半鍵間とす

三 第三種航路は兵庫陸揚場附近に建設したる頭部三角形二基の赤色立標を第一種航路より西(磁針方位)に見通したる一直線の南方半鍵間とす

第六條 瀛船神戸港内を運航するときは船の安全なる針路を保つに足る速力に止むべし又帆船は帆を減じて除行し若し曳船を用ゆべし

第七條 第五條第一項に示定したる瀛船にして海上より兵庫陸揚場に至らんとするに際し神戸西波止場より海上に向ひ運航する同種の船舶と湊川崎附近に於て行違ふときは瀛船短聲を四發して其兵庫陸揚場に至るべきことを他船に示すべし且事宜に依り速力を緩め又は機關を停止し若し後退すべし

第八條 總て船舶は衝突の虞あるときは航路を横切り或は之に進入すべからず

第九條 總て船舶は衝突の虞あるときは港界内に於て追越をなし又は竝行すべからず

第十條 總て船舶は港界内に於ては他船の後部に接近して運航し又は他船の前路を横切るを得ず

第十一條 總て船舶は互に運航及投錨を妨害すべからず

第十二條 入港の船舶港長の指定したる泊船所に到着したるときは常に雙錨を投じて碇泊すべし但定期郵便瀛船又は定期瀛船にして六時間以内に出航せんとするものは港長の許可を得單錨を投じて碇泊することを得

第十三條 爆發物若しは容易に燃焼すべき物料を搭載したる船舶は和田岬の東北港界外に於て港長の指揮を待つべし

第十四條 瀛船港界内に於て曳船を爲さんとする時は特に港務局の允許を受けたる場合を除くの外左の制限に従ふべし

一 荷船及端艇を曳く時は曳船の艦より被曳船の船尾に至るまでの距離三

百五十尺を越ゆべからず

二 荷船又は端艇は二艘を限り並列して曳くことを得

三 航洋船は一艘以上を曳くことを得ず

第十五條 總て船舶は波止場若は運河の入口又は船渠及棧橋等の附近に停留すべからず但波止場運河若は船渠に進入し又は棧橋を使用せんとするものは此限にあらず

第十六條 總て荷船及端艇又は瀛艇は止むを得ざる場合の外船舶の後部に繫留すべからず

第十七條 總て位置を變更せんとする船舶綱を浮標に其他棧橋等に執るに際し必要外に之を延長すべからず又必要の時間外に渉ることを得ず

第十八條 總て船舶は碇泊中軍艦を除くの外「スウヰンゲンクプーム」を用ゆることを得ず

第十九條 警報其他船舶に對する信號は湊川尻に建設したる黄色塗擬檣に之を掲ぐ

第二十條 繫船浮標に繫留する船舶荒天に際し尙ほ本船の錨を投ぜんとするときは該浮標に結著したる錨鎖を延長したる後投錨すべし

第二十一條 港界内にある船舶風波其他災害の爲めに避難せんとする場合には港務局の許可を待たずして適宜の錨地に就くことを得

第二十二條 日没後來着したる船舶は日出まで港界外に於て航路を避け停留すべし但定期郵便瀛船其他の船舶にして豫め港長より繫船浮標若は泊船所の示定を受けたるものは天候其他の事情に於て許す限りは直に之に向て進入することを得

第二十三條 港内碇泊若は運航に關しては本規程に定むるもの、外海上衝突豫防法に依るべし

○長崎港規程

(明治三十一年十月  
長崎港務局告示第一號)

第一條 長崎港内を三區に別ち軍艦、瀛船、帆船及雜種船の碇泊所とす

第二條 出島立標より(方位西二分北)横瀬を通じて對岸瀬の脇立標に至る直線以北を第一區とし小菅修船所入口の立標より(方位北西微北)立神浮標に至り又該浮標より(方位西四分三南)遠見鼻立標に至る鈍角線以北第一區境界線までを第二區とし港界線以北第二區境界線までを第三區とす

第三條 第一區は總噸數五百噸未満の船舶及雜種船の碇泊所とす

第二區の中央部は總噸數五百噸以上の漁船の碇泊所とし東沿岸即ち出島立標より(方位南西微南八分一西)小菅立標に至る線内は小帆船及雜種船の碇泊所とし西沿岸即ち飽の浦及立神造船所附近は修理船の繫船場とす

第三區の内神埼を約一鏈離れ暴風標を北東の方位に見通し第二區の境界線に至る一線より北西の海面を軍艦の碇泊所とし又該一線より南東の海面を帆船の碇泊所とし戸町澳は小帆船及雜種船の碇泊所とす

第四條 港界内船舶出入の航路は高鈴島及神埼の南東端を連ぬる一線(方位東北東八分一東)と陸の尾島北西端と女神検査所前面に突出したる小半島の外端を連ぬる一線(方位東北東)との中間とす

第五條 港長は必要に際し第三條第三項の規定に拘はらず軍艦の泊船所を神埼以外若くは第二區内に示定し又石炭を搭載する帆船の泊船所神埼以外に示定することあるべし

第六條 爆發物又は容易に燃焼すべき物料を積卸する船舶の泊船所は第三區の内安全なる場所を撰定し港長之を示定す

第七條 漁船港界内を運航するときは安全の針路を保つに足るの速力に止め帆船に在ては帆を減じて疾行し若くは曳船を使用すべし但神埼以内に於ては逆風に廻り帆走することを得ず

第八條 總て船舶は互に他船の運航若くは投錨を妨害すべからず

第九條 總て船舶は港界内に於て他船の前路を横断し又は追越を爲すべからず

第十條 各船舶は神埼以内に於ては雙錨を投じて碇泊すべし但總噸數五百噸未満若くは石敷を以て積量を表示する船舶にして入港後十二時間以内に出港するものは單錨にても妨なし

第十一條 日没後來著したる船舶は日出に至るまで港界線附近に於て航路の入

口を避け停留すべし但し郵便汽船其他の船舶にして豫め泊船所の示定を受けたるものは天候其他の事情に於て許す限りは直に之に向て進入することを得

第十二條 荒天に際し入港する船舶に對しては港長は女神見張所より信號を以て錨地を指示す

第十三條 總て船舶は碇泊中軍艦を除くの外「スウヰンギングーム」を用ゆることを得ず

第十四條 總て荷船端艇又は舢舨は船舶の後部に繋留すべからず

第十五條 總て位置を變更せんとする船舶は綱を浮標、埠頭、棧橋若しくは他の船舶に執るに際し必要外に之を延長すべからず

第十六條 汽船港界内に於て曳船を爲さんとするときは特に港務局の允許を受けたる場合を除くの外左の制限に従ふべし

- 一 端艇若しくは舢舨は三艘荷船及水船は二艘を限り曳くことを得
- 二 航洋船は一艘を限り曳くことを得

第十七條 警報信號は長崎縣廳構内に在る信號竿に之を掲ぐ

第十八條 繋船浮標に繋留する船舶荒天に際し尙ほ本船の錨を投ぜんとするときは該浮標に結著したる錨鎖を適宜に延長したる後投錨すべし

第十九條 港内碇泊若しくは運航に關しては本規程に定むるもの、外海上衝突豫防法に據るべし

第二十條 本規程に定むる方位は磁針方位とす(其差三度五十五分西)

○門司港規程

(門司港務局告示第一號明)  
治三十三年十一月十六日

第一條 門司港内を分ち左の三區とす

第一區 自木崎標柱より北三十三度東門司内洲南西端の紅色浮標に該浮標より北五十度東該洲北東端の白色浮標に及び夫より南四十四度東門司税關波止場標柱に引きたる各線内

第二區 第一區以外にして柁ヶ鼻より南四十七度西彦島弟子待標柱に向ひ引きたる一線と自木崎標柱より北々西に引きたる他の一線と相會したる線内

第三區 第二區以外港界線内

第二條 總噸數八百噸未満の船舶は第一區總噸數八百噸以上の漁船は第二區軍艦及總噸數八百噸以上の帆船は第三區に碇泊すべし但水雷驅逐艦及水雷艇は港長の承認を受け第一區若くは第二區に碇泊することを得

第三條 總噸數五十噸未満若くは積石數五百石未満の船舶及舢舨は前條の規定に拘はらず白木埼標柱より北五十九度東門司税關波止場標柱に引きたる線内及該標柱より北三度東陸軍兵器製造所大煙突に引きたる線内に碇泊すべし

第四條 港長は前二條の規定に拘はらず港内の秩序又は船舶の現狀に依り特に泊船所を示定することあるべし

第五條 總て船舶は左の場所に停留すべからず

- 一 門司洲北東浮標(紅色)より四分の三鐘の圈内
- 二 門司洲南西浮標(黑白)より南西二鐘以内

第六條 船舶出港の爲め進航を始めんとするに際し其航路に當り他船の入港するを認むるときは他船の碇泊するを待ちて進航を始むべし

第七條 下の關海峽東口より入港せんとする漁船は燈の浦燈臺に並びたるときより又港内より東口に向ひ出港せんとする漁船は舵ヶ鼻に並びたるときより何れも門司埼を通過するまで漁笛長聲を三發づゝ間斷なく吹鳴すべし

第八條 入港の船舶港長の指定したる泊船所に到着したるときは常に双錨を投じ碇泊すべし

第九條 港内に於ては漁船は他船に危害を加ふる如き速力を以て航行すべからず又帆船は帆を減じて徐行し若しくは曳船を使用すべし

第十條 總て船舶は港内に於て他船の通航を妨ぐる如き舢舨端舟又は漁艇を船尾或は船側に繋留すべからず

第十一條 總て漁船は港内に於て特に規定せる場合の外漫りに漁笛を吹鳴すべからず

第十二條 舢舨端舟及漁艇港内を航行するときには他船の航路を避くべし

第十三條 港界内に於て曳船を爲さんとするときは特に港長の認可を受けたる場合を除くの外左の制限に従ふべし

一 航洋船を曳くときは一艘に限る

二 浮舟又は端舟等を曳くときは曳船の船尾より最後の被曳船の船尾に至るまでの距離三百尺を越ゆることを得ず

三 被曳船を横列して曳くときは二列二艘に限る但曳船の船尾より被曳船の船尾に至るまでの距離百五十尺を超ゆることを得ず

第十四條 港界内にある船舶風波其他災害の爲め避難せんとする場合に於て港長の許可を得る暇なきときは適宜錨地を變更することを得  
前項の場合に於て錨地を變更したるときは遅滞なく其理由を具し港長に届出づべし

第十五條 下の關海峽西口より入港せんとする各船舶は六連島燈臺の前面に來り其國旗及信號符字を掲げ港長より泊船所の示定を受くべし  
前項の示定は荒天の際に在ては該燈臺に在る旗竿の「ヤーゲーム」に信號旗を掲げ之をなすべし

第十六條 下の關海峽東口より入港せんとする各船舶は部埼燈臺の前面に來り

其國旗及信號符字を掲げ港長より泊船所の示定を受くべし  
前項の示定は荒天の際に在ては該燈臺に在る旗竿の「ヤーゲーム」に信號旗を掲げ之をなすべし

第十七條 總噸數八百噸未満の船舶は港長の示定を待たずして第二條及第三條に規定せる泊船所に入り投錨することを得

第十八條 信號旗を以て泊船所を示定するときは左の規定に依るべし

Ⅰは第一區内に碇泊すべし

Ⅱは第二區内適宜の場所に碇泊すべし

Ⅲは第二區内門司洲北東浮標の正南以東に碇泊すべし

Ⅳは第二區内門司洲南西浮標の正南以東に碇泊すべし

Ⅴは第二區内白木埼立標の北々西以内に碇泊すべし

Ⅵは第三區内に碇泊すべし

第十九條 常用に超過し爆發物若くは容易に燃燒すべき物料を搭載し又は船中に傳染病ありたる船舶は六連島燈臺又は部埼燈臺に接近する前に別に開港港

○日本氣象區及測候所

則第九條及第十二條に規定せる旗又は燈を掲げ泊船所の示定を待つべし  
 第二十條 各船舶は夜間入港することを得ず但定期汽船及總噸數八百噸未満の船舶は第二條及第三條に定むる碇泊所に進入することを得  
 第二十一條 港界内に於ては船舶の通路に當り曳綱を以て漁業をなすを得ず  
 第二十二條 港内の碇泊若くは運航に關しては本規程に定むるもの、外海上衝突豫防法に依るべし  
 第二十三條 本規程に定むる方位は總て磁針方位とす(其差四度四十分西)

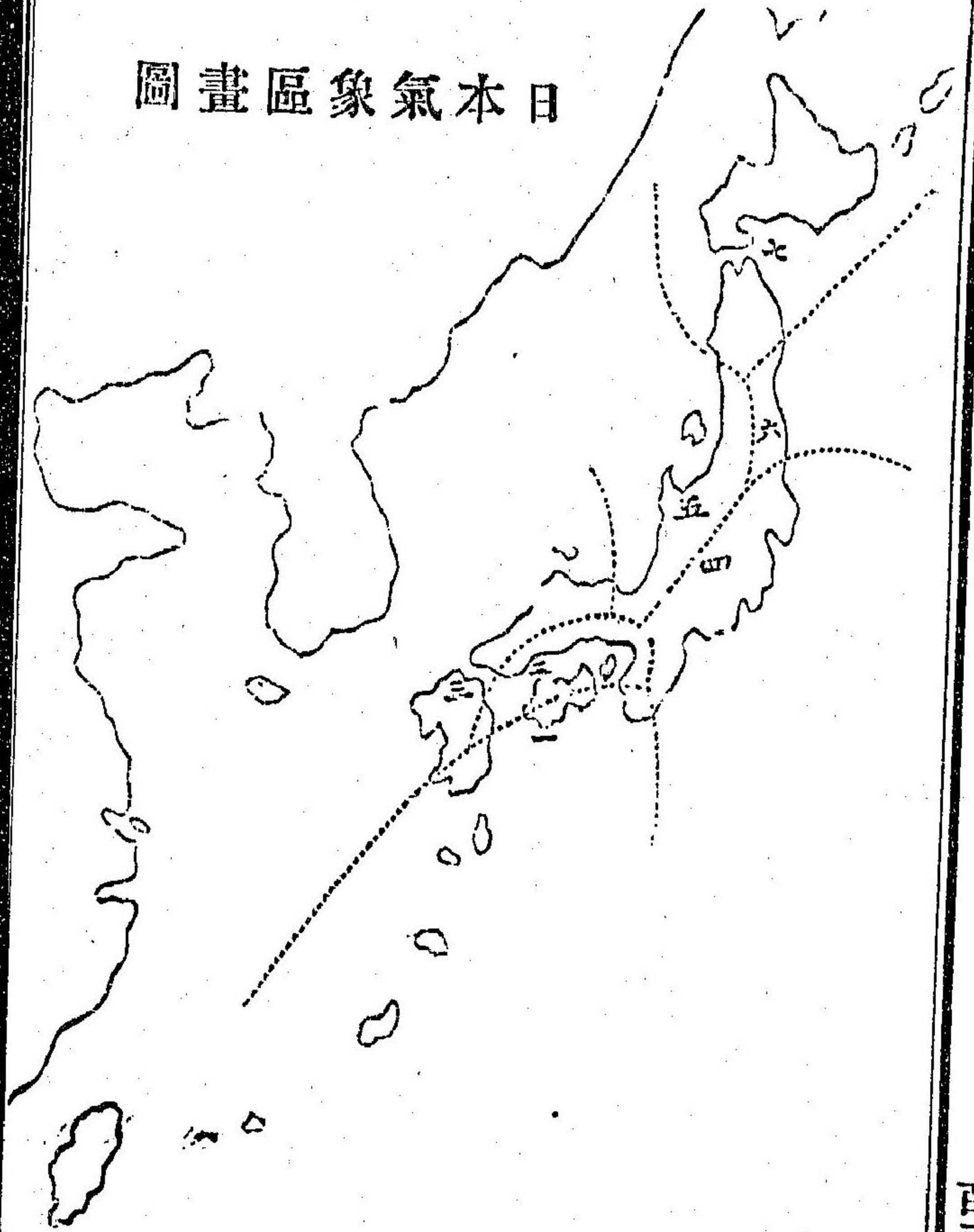
◎日本氣象區及測候所

氣象區	測候所
第一區	石垣島 那覇 大島 鹿兒島 佐多岬 宮崎
第二區	高知 徳島 和歌山 日ノ岬 松山 松永 多度津 大分 廣島 吳 京都 八木 岡山 神戸 大阪

第三區	熊本 佐賀 長崎 大瀬崎 佐世保 福岡
第四區	嚴原 赤間關 濱田 境 西郷 濱松 潮岬 彦根 岐阜 名古屋 津 横須賀 飯田 松本 甲府 沼津 長津呂 横濱 東京 布良 銚子 水戸 熊谷 前橋 宇津宮
第五區	福井 金澤 輪島 伏木 高山 長野
第六區	新潟 山形 秋田 石巻 宮古
第七區	福島 金山 石巻 宮古 札幌 十勝 艦作崎 青森 函館 壽都 上川 釧路 網走 根室 紗那
區外	恒春 臺南 澎湖島 臺中 臺北 臺東 釜山

○日本氣象區及測候所

日本氣象區圖畫



○海岸望樓位置

第一海軍區	第二海軍區	第三海軍區	第四海軍區
安房國	陸前國	大隅國	能登國
野島	潮ノ	佐多岬	沖繩島
伊豆國	紀伊國	肥前國	先花崎
石室崎	日ノ	肥前國	五十洲崎
	淺落崎	野母崎	
	都井崎	平戶志目崎	
		大島與那可崎	
		壹岐國	
		大隅國	
		大島東崎	
		隱岐國	
		西	
		鄉	

○海岸望樓位置



第五海軍區

後志國	神威崎	根室國	納紗布崎
膽振國	室蘭	石狩國	ラファイ崎
陸奥國	艦作崎		

○改正増補萬國船舶信號書凡例

一本書は西曆千八百九十九年英國商務院に於て改正増補したる萬國船舶信號書に據り編成したるものとす

第一編

一難船信號

(一頁)

晝間信號

- 一 大約一分時の間隙を以て砲又は其他の爆裂發火信號を一發す
- 二 萬國船舶信號書に掲載するNCの難船信號を表示す
- 三 方形旗の上又は下に球若くは之に類似の者を掲ぐる遠距離信號を表示す

四 尖端を上にしたる圓錐形の上又は下に球若くは之に類似のものを掲ぐる遠距離信號を表示す

五 霧中信號器を以て間斷なく音響を發す

夜間信號

- 一 大約一分時の間隙を以て砲又は其他の爆裂發火信號を一發す
- 二 船上の發煙(タール桶、油樽等を燃燒するの類)
- 三 星火を發する榴彈或は火箭を一次一發づ、度々打揚ぐ

(一頁)

晝間信號

- 一 前橋に船首旗又は國旗を掲ぐ  
但英國船に限り船首旗又は旗幅五分の一に相當する白布を周圍に附したる國旗を前橋に掲ぐ
- 二 萬國船舶信號書に掲載するPTの水先信號を表示す
- 三 萬國船舶信號書に掲載するSの旗の上に標信旒を附し又は附せずして之

を表示す

四 尖端を上にしたる圓錐形の上に球若くは之に類似のもの二個を掲ぐる遠距離信號を表示す

夜間信號

一 十五分時間毎に青色燐光を發す

二 須臾の間隙を以て約一分時間亮明の白燈を舷上に表示す

一萬國船舶信號方法

(一頁)

發信法

一 甲船信號を爲さんとするときは其國旗の下に標信旒を附して之を掲ぐべし

二 二個以上の船若くは信號所の見ゆる場合に於て其一に信號を爲さんとするときは甲船は符字信號を以て其船名若くは所名を表示すべし

三 若し該符字信號の知れざるときは甲船はD IよりD Qに至る信號(第二編緊急及切要信號)の一を使用すべし

四 甲船に於て受くべき船若くは信號所の應答を認めたるときは信號用必要なれば先づ其標信旒を引下し然る後所要の信號に着手すべし

五 信號は常に最も見易き所に之を掲ぐべし必ずしも之を頭橋に掲ぐるを要せず

六 信號は乙船に於て回答旒を全揚するまで掲げ置くべし

七 甲船信號を了りたるときは其國旗及標信旒(未だ標信旒を引下さざるときは)を引下すべし

八 信號を爲さんとするときは第三編萬國船舶信號假名分の部に於て所要の信號を索むべし

受信法

九 乙船に於て甲船の信號を認むるときは回答旒を半揚すべし(半揚とは全附して掲ぐることを要す)

回答旒は常に最も見易き所に之を掲ぐべし

十 乙船に於て甲船の信號意義を了解したるときは回答旒を全揚し甲船の信

號を引下すを待つべし

十一 甲船信號を引下したるときは乙船に於て回答旒を半下し次の信號を待つべし

十二 乙船に於て甲船の信號を見分け得ざるか又は其意義を了解せざるときは回答旒を半揚の儘に爲し置きO W L、W C X 又は其他相當の信號を掲げて甲船の信號を繰返し若くは訂正するを待ち全く了解したるときは回答旒を全揚すべし

信號上の注意

- 一 此信號書の原本に於ては便宜上複稱を廢除せり依て信號中前後の關係上複稱を認め得るもの、外總て單稱なりと知るべし
- 二 經緯儀の比較若くは平時の信號を爲さんとするときは甲船に於て先づ時を示す信號を掲げ乙船に於て回答を爲したる後少時を経て急速に之を引下し次に其引下したるとききの分秒を示す信號を掲ぐべし又精確を期せんとするには再び比較を繰返すべし

三 經度若くは時の信號は佛國船を除き總て英國綠威の子午線より起算す若し疑惑を生じたる時はN B L 即ち「汝の第一子午線は如何」の信號を掲ぐべし

四 英國第一子午線は綠威とす

巴里(觀象臺)の第一子午線は綠威の東二度二十分十五秒即ち零時九分二十一秒とす

「カヂズ」(サンフエルナンド)觀象臺)の第一子午線は綠威の西六度十二分二十四秒即ち零時二十四分四十九秒六とす

五 船舶互に行過せんとし又は信號所の前面を通過せんとするときは左の順序により信號を爲すを可とす

一 國旗の下に附したる標信旒(國旗は信號を終るまで掲げ置くべし標信旒は必要なれば引下すも妨げなし)

二 船名符字

三 仕出地

四 仕向地

五 出帆後の日數

六 我が經線儀經度

是に於て國旗を半下し再び之を全揚して告別の意を表す

又船舶互に速に行過する場合に於ては回答旗を掲げずして左の方法に依り時間を節省することを得べし

乙船に於て甲船の船名を了解したるときは直に自己の船名を掲ぐ、此時甲船は乙船の信號を了解するまで自己の信號を掲げ置き之を了解したるときは両船共に其信號を引下し斯の如くにして次の信號を繼す

六 船舶には豫め其の符号信號旗を聯結し置くの慣行あり斯くの如き場合に於ては之れを掲ぐるの際旗の顛倒を防ぐ爲め上下の目標を附し置くを要す

七 船名及船主の住所氏名を包含する信號を爲さんとするには左の順序に依るべし

甲船其船主より命令を得んと欲するとき

一 船名符号信號

二 SWの信號即ち「我は—の船主—よりの命令を得んことを欲す」

三 船主の氏名（字母を綴り又は綴字表を以て表示す）

四 船主の住所（字母を綴り又は綴字表を以て表示す又場所は地理信號を以て番號は數字信號を以て表示することを得）

（例畧之）

綴字信號

左の方法に依り綴字信號第一を掲げたる後其第三若くは數字信號第一を掲ぐるまでに掲ぐる所の各旗旒は之に配附せる字母を表示するものとす故に其二十六字母を用ふるときは如何なる語字をも綴ることを得べし  
信號旗の聊結即ち一綴は四個を限るを以て四字以上を綴らんとするときには二回以上に分ちて信號し又同字母は共に一綴中に之を表示することなさずして次の綴中に分ち表示すべきものとす

其方法左の如し

信 號	E の上に標信旒
	F の上に標信旒
	G の上に標信旒

意 義

綴字信號第一即ち此信號は綴字信號を始むることを表示す  
綴字信號第二即ち此信號は綴字信號中一語或は畧字の句讀ミす  
綴字信號第三即ち此信號は綴字信號を終りたることを表示す

數字信號

(例畧之)

左の方法により數字信號第一を掲げたる後其第三若くは綴字信號第一を掲ぐるまでに掲ぐる所の各旒は左の數字表に記載する數字を表示するものとす  
信號旗の一綴は四個を限るを以て信號すべき數四位以上なるときは二回以上に分ちて信號し又同數字は共に一綴中に之を表示することななざずして次の綴中に分ち表示すべきものとす

其方法左の如し

信 號	M の上に標信旒
	N の上に標信旒
	O の上に標信旒

意 義

數字信號第一即ち此信號は數字信號を始むることを表示す  
數字信號第二即ち此信號は奇零符を表示す  
數字信號第三即ち此信號は數字信號を終りたることを表示す

數字表

G F E D C B A
七 六 五 四 三 二 一
N M L K J I H
四 三 二 一 一 〇 九 八
U T S R Q P O
一 〇 九 八 七 六 五
〇 〇 九 八 七 六 五
Z Y X W V
〇 〇〇 〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇

小數及分數の信號は第一編小數及分數の部にあり (例畧之)

一引船と引かれ船とに用ふる短閃光の夜間號 (六頁)

■ 尙ほ左舷に向ける

■ 尙ほ右舷に向ける

■ 引索を解き放つ

一羅針信號 (七頁)

▲旗を最上に掲ぐる三旗信號にして羅盤の度及每點及每半點の方位を示す羅盤の度(磁針方位)

注意 別に指示せざる限りは度を以て示したる方位は磁針方位にして羅針方位に自差を加減したるものと知るべし

羅盤の點(羅針方位)

注意 別に指示せざる限りは點及半點を以て示したる方位は羅針方位にして自差及偏差を加減せざる羅盤の示せる儘の方位を云ふ

一各國通貨 (一一頁)

▲旗を最上に掲ぐる三旗信號にして各國貨幣の名及貨幣表に對する信號符を示す

一各國度量衡 (二〇頁)

▲又はB旗を最上に掲ぐる三旗信號にして各國の尺度、積量及衡量に對する信號符を示す

一小數及分數 (三一頁)

B旗を最上に掲ぐる三旗信號にして小數及分數に對する信號符を示す

一米突式を用ふる國名表 (三二頁)

信號符を付せず單に米突式を用ふる各國名を示す (三三頁)

一緯度及經度 (三三頁)

標信旒の下に二旗を掲ぐる三旗信號にして緯度及經度の信號符を示す  
注意 巴里の子午線を用ふる佛國船を除き其他の船舶は普通綠威の子午線より起算したる經度を用ふるものとす若し信號に疑あるときはNBL即ち「汝の第一子午線は如何」の信號を掲げ左の信號の一を掲ぐべし

N B K 即ち「我第一子午線は綠威なり」

T B L 即ち「我第一子午線は二度廿分十五秒若は零時九分廿一秒綠威の東なる巴里なり」

H S I 即ち「我第一子午線は六度十二分廿四秒若は零時廿四分四十九秒綠威の西なる「カヂズ」なり」

一時刻の時、時及度の分秒

(三七頁)

標信旒の下に二旗を掲ぐる三旗信號にして時刻は午前零時より午後十二時まで毎時又時及度は毎分秒に對する信號符を示す

一晴雨計

(三九頁)

標信旒の下に二旗を掲ぐる三旗信號にして「インチ」及「ミリメートル」に對する信號符を示す

一寒暖計

(四〇頁)

標信旒の下に二旗を掲ぐる三旗信號にして華氏、攝氏及び列氏の度数に對する信號符を示す

注意 一を附したるは氷點以下とし印を附せざるは氷點以上とす

一數字信號

(四四頁)

二旗の下に標信旒を掲ぐる三旗信號にして〇より五、〇〇〇、〇〇〇〇までの數に對する信號符及其信號方法を示す

一遠距離信號

(四七頁)

一 遠距離信號は距離遠隔の爲め又は天氣模様により萬國船舶信號旗を見分け難き場合又は信號旗を使用し難き場合に於て用ふるものとす

二 遠距離信號の方法に三種あり左の如し

甲 圓錐形、球形及鼓形、

乙 球形、方旗、旒及括旗、

丙 定設「セマフォール」、

丙法は遠距離信號にのみ必要なるにあらずして近距離にして信號旗を使用し得る場合にも之を使用するものなりと雖も説明に便利の爲め遠距離信號の部に加へたり

○改正増補萬國船舶信號書凡例



- 三 遠距離信號の特標は球形にして各信號中少くも一個の球形を掲ぐるものとす但し「セマフォール」に於ては頂圓を以て球形に代ふ
- 四 從來遠距離信號には三種の符を用ひたるも新法に於ては旗旒の増加したる爲め更に一種の符を加へて四種となすの必要を生ぜり
- 五 遠距離信號は船舶に於ては形象を用ひ陸地に於ては形象又は「セマフォール」を用ひて信號を爲すものとす
- 六 信號符として用ふる形象は左の如し
  - 甲 上尖錐形(尖端を上方に向けたる圓錐形)壹個  
球形壹個
  - 乙 下尖錐形(尖端を下方に向けたる圓錐形)壹個  
球形壹個
  - 丙 上尖錐形に代用すべき方旗壹個  
球形壹個
  - 丁 下尖錐形に代用すべき旒壹個

鼓形に代用すべき尖端を信號索に結ひたる旒若くは括旗(括旗とは如何なる旗にても之を疊みて其中央を括りたるものを云ふ)壹個  
旗旒は無風又は風向の爲め之を明白に見分くること能はず又其翻動せざるときは球形を蔽ひ信號を解し得ざることあり故に圓錐形若くは鼓形を用ふるを優れりとす

丙 「セマフォール」の腕木の位置









七 信號上便宜の爲め「セマフォール」腕木の四位置及形象の四符に番號を付して一、二、三、四と稱す即ち左圖の如し(圖並に入より十六まで畧之)  
特定遠距離信號表

此信號は「セマフォール」又は通常遠距離信號の形象に依て之を爲す

信號	號	意	義
	一	起信、受信、應信、又は止信の符、	
	二	我は擱坐れり直に助を要す、	

○改正増補萬國船舶信號書凡例



信號	意	義
 二二	出火又は漏水あり直に助を要す、	
 一一	然り、	
 一一二	然らず、	
 二二二	上陸は出来難し、	
 二二二	水先人を要す、	
 二二三	止まれ、脚蹴せよ或は近寄れ我れは汝に緊要なることを通信せんことを	
 二四一	汝の旗を見分け難し近寄るか又は遠距離信號を爲せ、	
 四一二	汝の航行を続けよ、	

一「セマフオール」信號

(五一頁)

特定の信號符を以て陸上信號所と海上船舶との間に行ふ信號方法を示す

一手旗信號法

(五三頁)

桿に小旗を付したるものを手にし其振り方により信號を爲す方法を示すものにして英式及佛式の二様あり

一「モールス」式信號法

(五三頁)

甲 閃光及音響信號法

注意 此信號殊に音響信號を亂用するときは大に錯雜を惹起すことを免れず依て之を用ふる船舶は就中船舶輻湊の場合に於ては十分の注意を加ふることを要す

夜中又は天氣溟濛のときに於ては長短二様の閃光を發し又は汽笛、汽笛、霧中號角等に依り長短二様の音響を發して緊急必要の信號を爲すことを得べし其方法左の如し

- 一 閃光信號に於ては常に燈火を受信者の方に向はしむべし
  - 二 受信者の注意を喚起する爲め迅速なる短光又は短音を連發し受信者より同様の應信を爲すまで之を繼續すべし
- 但し受信者に於て應信を爲し難きことを想像したるときは相當の間隙を

經て通信に着手することを得又事情によりては起信符を表示せずして直に通信することを得べし

三 受信者は應信として迅速なる短光又は短音を連發し其後通信の信號に注意し其終了に至りたるときは了解を表示すべき信號を爲すべし

四 受信者其通信を了解せざるときは其信號の繰返しを待ち之を了解するまで應信すべからず

五 短光又は短音即ち—は一秒時間

長光又は長音即ち— — —は三秒時間

各光又は各音の間歇は一秒時間

受信即ち了解の符は長短交互の閃光又は音響即ち— — — — —

— — — — —等

特定信號

信號

意義

— — — — — 汝は危險の位置に進みつゝあり

— — — — — 我は助を要す我れの傍に止まれ

— — — — — 氷に出遇ふたり

— — — — — 汝の燈火は消れてあり或は直ほすことを要す

— — — — — 航路は我船を離れ居る汝は其航路にて我れを替り行き

— — — — — 得べし

— — — — — 止まれ或は踴躍せよ我は汝に緊要なることを通信せん

— — — — — ことす

— — — — — 我れは運轉自由を得ず我れと通信せよ

— — — — — 引船と引かれ船との間に用ふる閃光信號

— — — — — 尙ほ右舷に向くる

— — — — — 尙ほ左舷に向くる

— — — — — 引索を解き放す

— — — — — 「モールス」式綴字用字母信號符

— — — — — は約三秒時間の長符を示す

— は約一秒時間の短符を示す

— — — — — 等は起信符とす

各閃光又は各音響の間歇は一秒時間とす

各字母の間歇は三秒時間とす

各語の間歇は六秒時間とす

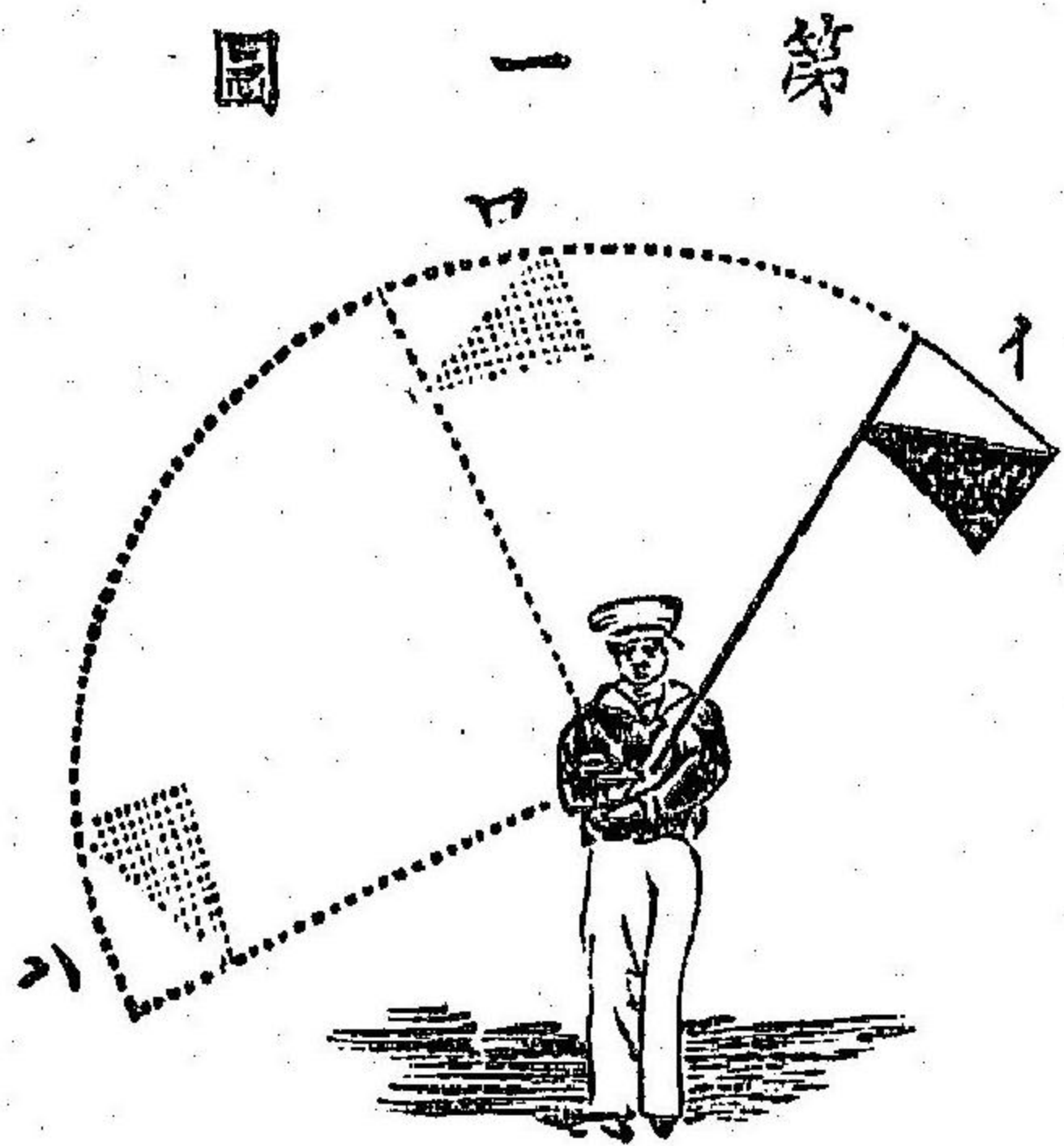
M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A
Z	Y	X	W	V	U	T	S	R	Q	P	O	N

乙 振旗信號法

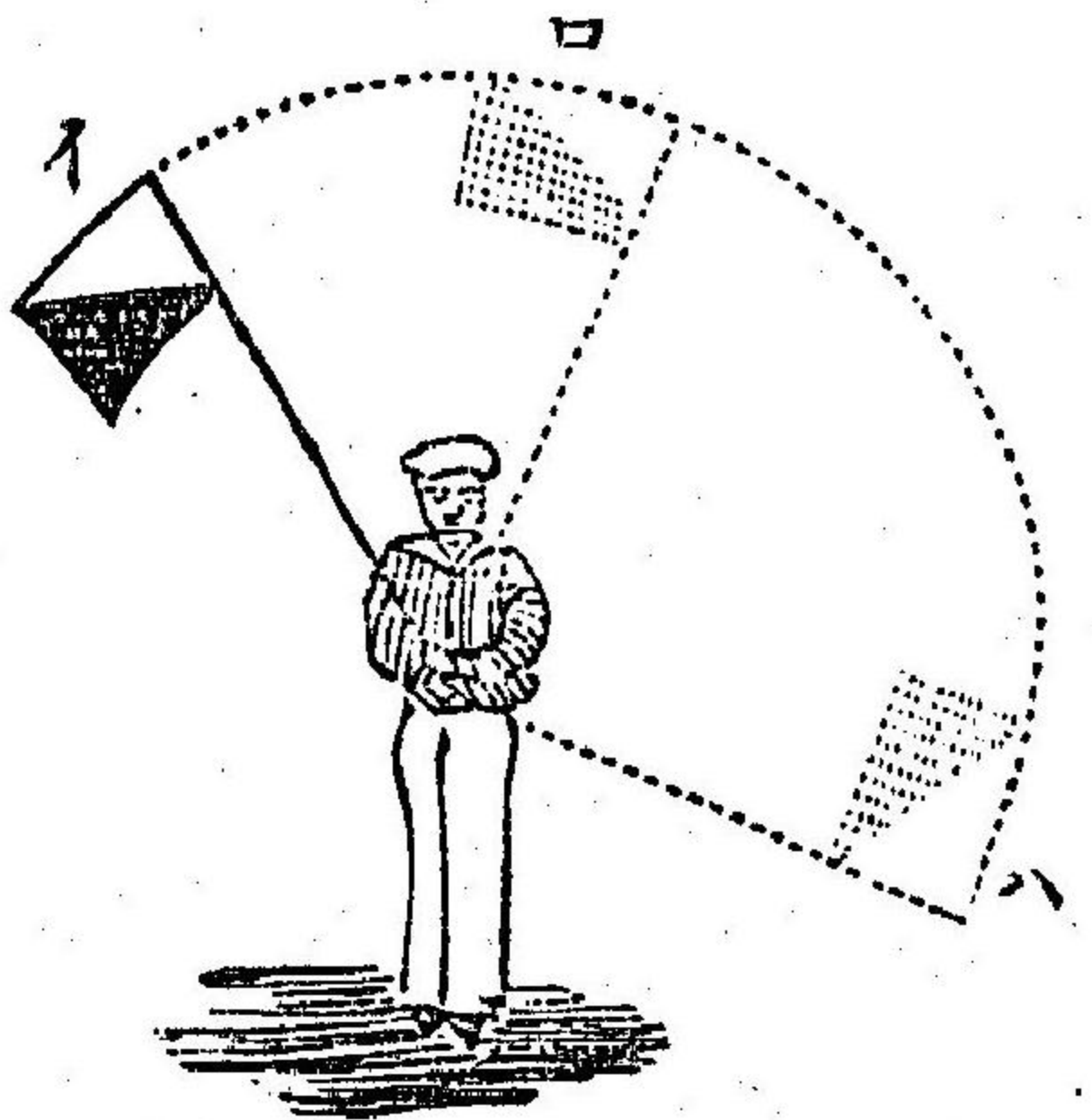
(五四頁)

此信號法は左に記載する如く旗を長短二様の圆弧間に振り其ノ長短に依りて「モールス」式字母信號符を表示するものとす

信號者は風向及便宜に従ひ左圖の如く旗を左より右に又は右より左に振ることを得



第一圖



第二圖

前圖の基點(イ)に於ては旗竿と信號者の中心を貫通する垂線との角度二十五度なることを要す

旗竿は振動中最下點に至るも尙ほ旗を見得る程の高さに保持することを要す  
短符は旗を(イ)より(ロ)に振り猶豫なく直に基點に戻すべし

長符は旗を(イ)より(ハ)に振り(ハ)に瞬時止めて後基點に戻すべし

一 字母の信號を爲す間は旗を基點に復したるとき此所に停滯せしめざる様注意して引續き之を振るべし

一 救命火箭器用法に關する船長及海員の心得

(五六頁)

英國海岸に於て船舶を乗揚げ船員に危険の虞ある場合には陸地より左の方法に依り救助を爲すことを勉むべし

一 陸地よりは遭難船を越ゆる様に細索を付したる火箭を發するを以て該船に於て之を認めたるときは速かに其細索を捕へ之を繫止したる後船員の一人他の船員より分離し晝間なるときは帽、手、旗、或は手巾を振り又夜間なるときは火箭、青色煙管或は號砲を一發するか又は短時間燈火を

舷上に顯はして陸地への信號と爲すべし

二 船舶に於て陸地の一人餘人より分離して赤旗を振り又夜間なるときは短時間紅燈を顯はしたるを認めたるときは尾索を付したる滑車に索の通りたるものを得るに至るまで火箭索を引き入るべし

三 前項の滑車を得たるときは其尾索を甲板上十分の高さに於て橋に若し橋を失ひたるときは相當の處に結着け然る後火箭索を取脱し第一項に定むる如く船員の一人他人より分離して信號を爲すべし但し滑車の尾索を結着くるには該車に通じたる索が船體其他に觸れて摩損せざる様且つ其上に第五項の「ホーサー」を結着くるに足るべき餘裕を存し置くことに注意するを要す

四 陸地に於て前項の信號を認めたるときは滑車に通ほりたる細索に「ホーサー」を結着け陸地より船舶へ引き送るべし

五 「ホーサー」船中に達したるときは之を尾索滑車と同處に於て其上部約十八寸の處に固結し此時「ホーサー」に滑車索の掬まざる様注意し然る後滑

車索を「ホーサー」より解き放つべし

六 船舶に於て「ホーサー」を固結したるときは第一項に定めたる信號を爲すべし

七 前項の信號を爲したるときは陸地に於て「ホーサー」を緊張し滑車索に依りて船員を上陸せしむべき吊浮具を船中に送るを以て之が達したるときは船員の一人之内に入り用意整はし船舶に於て第一項の信號を爲すべし然るときは陸地に於て該吊浮具を引き寄せ船員を救助したる後再び之を船中に送り全員を救助するに至るまで其手續を繰返すべし

八 天氣摸様又は船舶の状態により「ホーサー」を緊張し得ざる場合に於ては「ホーサー」を使用せず滑車索のみにて吊浮具を往復せしむることあり此心得を遵守し英國海岸に於て救命火筒器に依り年々幾多の生命を全ふしたる者あり故に乗揚船の船長及び海員たる者は上陸の成効如何は此心得に注意するに依るものなることを深く記憶せざるべからず此心得に定めたる信號方法は必ず之を嚴守し又婦女小兒旅客其他孱弱者

は船員より先に上陸せしむることを要す

一 帝國地理信號

(五八頁)

帝國版圖内樞要の地名に對する信號符にしてA旗又はF旒を最上に掲ぐる四旗信號なり其中A旗を最上に掲げたるものは各國一般に通ずる信號符なれどもF旒を最上に掲げたるものは特に本邦にて定めたるものなるを以て各國間には通ぜざるものとす

一 各國地理信號

(八〇頁)

A又はB旗を最上に掲ぐる四旗信號にして各地方分により定めたるものとす

(三二八頁)

一 綴字信號  
C旒を最上に掲ぐる四旗信號にして羅馬字綴字表及假名綴字表に據り名詞其他所要の語を綴合するに供するものとす

羅馬字綴字表

注意 本表はABCの羅馬字を用ふる諸國の船舶に使用するものとす  
假名綴字表

(三八二頁)

注意 本表末尾に設くる「ン」及「ー」の符號は表中發音なきもののみを使用するものなり

第二編

一緊急及切要信號

(一頁)

二旗信號にして主として受信の場合に用ふるものなり。雖も緊要なる語に付ては各標題の設あるを以て發信のときに於ても之を索出するの便ある者。一普通字靈信號

(二一頁)

三旗より成る尋問、通信、單語等に係る通常一般の信號にして受信用に供するものなり

一補助句

(三四八頁)

英語の所謂「カーキジリアリー、フレーズ」にして之を他の邦語に翻譯し適切の意義を表はすことは甚だ難し故に本書のみを用ひ信號を爲す場合に於て補助句を使用するときは大に注意を要す

第三編

一萬國船舶信號假名分

(一頁)

二旗及三旗より成る緊急、切要及普通一般の尋問又は通信を爲さんとするとき發信の用に供するものにして其信號中最も主要なる語を擧げて之を「イロハ」及字譜の順序により排列せり例へば我は衣服を洗濯せしめ得るやは衣の部に置き又鑄るは非よりも字譜多きを以て同一の部のに於ても之を前後に區別せり

一信號中主要なる語二個以上ある場合は其各語を假名分により編入しあるを以て其何れの部に索むるも所要の信號符を得べし假へば海流は陸地より沖に流るの信號は陸の部、海の部何れにても索出し得べし

一以上第二編第三編の信號に於て語句中に附したる——標は各所要の語を挿入すべきものにして「通信を完結するには先づ大體に對する信號符を掲揚し然る後——標に代はるべき語を各別に掲揚するものなり。假へば神戸に於ける検査は臺灣より來る船に對しては七日間なりの信號を爲すには左の如く各別に掲揚するものなり

一、U E C

所に於ける検査は——所より來る船に對しては  
日間なり(萬國船舶信號假  
名分の部を見よ)

二、A P B R

神戸(帝國地理信號  
の部を見よ)

三、A O B S

臺灣(同上)

四、U H の下  
に標信號

七(數字信號の  
部を見よ)

一括弧の使ひ方は種々にして豫め其場合を一定し難し或は括弧の内外に於ける  
同詞格の語句は何れを取り何れを捨つるも差支なき場合あり例へば「立標(或  
は浮標)は流失したり」は「立標は流失したり」「浮標は流失したり」何れの意義  
にも應用することを得或は括弧外は其儘にして單に括弧内の語句のみを取捨  
する場合あり例へば「風(——より)吹き來らば」は「風吹き來らば」も又「風  
——より吹き來らば」もなる又語句の終りに附したる括弧内の語句は單に  
意義の解釋に止まることあり例へば「海錨」(海上にて船首を風浪  
に向くる爲め流す錨)の如し

一「左舷へ一點針路を變<sup>する</sup>せよ」又「最良の錨場は水深——尋の所に在り」の如く語  
尾を二様にしたるものは其内何れの意義にも應用することを得

二「一致」する「せし」して「又」微かなる「かに」かなること」の  
如く——標を用ひたるものは本語重出の煩を省かんが爲め其畧符とす

一普通用語にして邦語に譯するも却て解し難きものは成るべく原語の儘假名に  
て記載するか又は譯語の左傍に之を假名にて附せり

一假名遣は正則に従ふときは混雜に涉りて假名分の索引に不便なるを以て總て  
通常發音に従ひ概ね左の如く之を一定せり

ラ	ウ	ラ	ウ	レ	ウ	カ	ク	ワ
ラ	フ	ト	ウ	タ	フ	カ	ク	ワ
ロ	ウ	ト	ウ	リ	ヨ	カ	ク	ワ
ハ	フ	テ	ウ	リ	ヤ	カ	ク	ワ
ハ	フ	テ	ウ	リ	ヨ	カ	ク	ワ
ホ	ウ	チ	ヨ	チ	ヤ	カ	ク	ワ
ホ	ウ	チ	ヨ	チ	ヤ	カ	ク	ワ
ホ	ウ	チ	ヨ	チ	ヤ	カ	ク	ワ

ヨ	ウ	エ	ヤ
ヨ	エ	エ	ヤ
ウ	フ	ウ	ウ
コ			
ウ			
カ	カ	カ	カ
ク	ク	ク	ク
コ	コ	コ	コ
ユ			
ウ			
イ	イ	イ	イ
エ	エ	エ	エ
ウ	ウ	ウ	ウ
シ			
ウ			
セ	セ	セ	セ
シ	シ	シ	シ
フ	フ	フ	フ
ウ	ウ	ウ	ウ

以上は濁音にも同じ

又イ井は(イ)、ヲオは(ヲ)、エエは(エ)、ヂは(ジ)、ずは(ヅ)の部に在り  
一萬國船舶信號旗各個單獨の意義

B	旗	意	義
	旒		
	火藥旗	火藥類を積卸しするときは常に掲ぐるもの	

C	然り
D	然らず
P	出帆旗
S	水先信號 我は水先人を要す
旒	標信旒又は回答 標信旒として用ふるときは國旗の下に掲ぐ 回答旒として用ふるときは橋頭若くは他船より最も見易き 處に掲ぐ

○東洋燈臺表凡例

一本表は東洋中日本、支那、朝鮮及黑龍沿岸州の沿海に屬する諸航路標識を登録す



- 一 日本海岸以外に屬する浮標及立標は之を畧す
- 一 日本沿岸の私設燈臺は其位置効用休廢等往々確實ならず唯其梗概を知るに過ぎざるものなるを以て別に私設欄を置き其中に登録す
- 一 但私設と雖航路標識管理所の監督を受くるものに限り官公設燈臺の部に編入し欄外に○印を付し之を區別す
- 一 方位は磁針方位にして燈光に關する方位は凡て海方より取る而して明弧中度を以て示すものは五捨六入法を以て度位に止む
- 一 浮標及立標の位置を示す方位は該標より取る而して浮標の位置は概測に係る
- 一 光達距離は晴天の夜海面上十五呎の處より燈火を認め得べき距離を擧げたるものなれば夜色に由て差あるものとす
- 一 但露國の燈臺光達距離は總て直ちに海面より認め得る時の規定なるを以て本表に載せたる露國建設の燈臺光達距離は本表の式に改め四涇半を加へたるものと知るべし

- 一 燈火の高は總て高潮面より測定したるものなり
- 一 燈火は日没より日出まで點す
- 一 經度は英國緯度グリニッチを零度として東方に算せるものなり
- 一 經緯度は單に燈臺の概位を示すの主意なるが故に五捨六入法を以て分位に止む
- 一 距離は涇及鏈を用ゆ即ち一涇は一海里(緯度の六十分の一)にして鏈は其十分の一とす
- 一 河川に於て左岸又は右岸と云ふは水源より下流に向ふて其左右を稱するものなり

○東洋燈臺表

日本本洲南岸

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又は晴天光達	高潮上燈
品川	東京海灣第二砲臺	武藏	一	紅	不動	光ノ期間	火之高呎
						涇數	
						十	五十二呎

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達 光ノ期間 湮敷	高潮上燈 火之高呎
羽根田	羽根田洲ノ外端水深七呎ノ處	武藏	一	白	明暗	…十一湮半	四十呎
橫濱燈	西波止場東側	同	一	紅	不動	…六	四十八呎
橫東水堤	東水堤ノ極端	同	一	白	不動	…九	四十一呎
橫北水堤	北水堤ノ極端	同	一	紅	不動	…七	四十一呎
本牧燈船	横濱港ノ南東本牧鼻瀬ノ外方	同	一	紅	不動	…十	三十六呎
觀音埼	埼ノ東端(東京海灣口)	相摸	一	紅 弧ヲ交分	不動	…十七湮	百七十八呎
第二海堡燈	東京海灣第二海堡ノ西端	同	一	白	不動	…八	五十三呎
第三海堡燈	東京海灣第三海堡上	同	一	紅	不動	…六	三十七呎
劍埼	埼ノ南東端(東京海灣口)	同	一	紅 弧ヲ交分	回轉十	…秒十六湮半	百十呎
城ヶ島	島ノ西端	同	一	綠	不動	…八	百〇六呎

○東洋燈臺表

野島埼	安房極南ノ地	安房	一	白	不動	…七	百三十三呎
神子元島	下田港ヨリ南ニ當ル神子元島	伊豆	一	紅 弧ヲ交分	不動	…十九湮半	百六十四呎
石室埼	伊豆極南ノ地	同	一	紅	不動	…十	百八十五呎
御前埼	遠江極南ノ地駿河灣ノ西	遠江	一	白	回轉三十秒	…十九湮半	百七十三呎
掛塚	天龍川口東岸	同	一	白	不動	…十一湮	五十五呎
四日市	四日市港	伊勢	一	白	不動	…十一湮半	四十二呎
費埼燈	津市岩田川口	同	一	白	不動	…八	四十二呎
菅島	島ノ北東角(鳥羽港口)	志摩	一	白	不動	…十六湮	百七十六呎
安乘埼	的矢港口	同	一	白	回轉三十秒	…十六湮	百〇二呎
梶取埼	東牟婁郡太地村字梶取埼	紀伊	一	白	不動	…八	百十七呎
櫻野埼	大島東岬	同	一	白	回轉三十秒	…十七湮半	百三十呎

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達ノ期間	高潮上燈火之高
潮岬	紀伊極南ノ地	紀伊一	白	不動	十九	百六十三呎
四國南岸						
龍頭崎	浦戶港口	土佐一	白	不動	十二	百三十三呎
室戶崎	同上	一	白	閃光十	秒三十	百九十七呎
九州東岸						
鞍崎	外浦港外大島ノ南端	日向一	白	回轉三十秒	二十四	二百八十七呎
佐多岬	大隅極南ノ小岩島	大隅一	白	不動	二十	二百呎
南西諸島						
屋久島	島ノ北西端永田崎上	大隅一	白	回轉一分	二十一	二百二十九呎
會津高崎	奄美大島ノ西端會津高崎上	同	白	不動	二十三	四百三十五呎

○東洋燈臺表

伊江島	島ノ西端	沖繩一	白	回轉三十秒	十九	百六十七呎
先原崎	那霸港ノ南角先原崎上	同	白	回轉十五秒	十四	九十二呎
三重城	那霸港	同	白	不動	八	三十呎
津堅島	島ノ南端上	同	白	不動	十四	七十六呎
鼻頭角	上	臺灣一	白	回轉三十秒	二十一	二百一十一呎
基隆	基隆港西角萬人堆	同	白	不動	十五	百三十三呎
富貴角	上	同	白	不動	十九	百六十一呎
白沙岬	上	同	紅白	回轉十	秒十八	百二十二呎
淡水	高燈赤堡ヲ距二鐘 低燈赤堡ヲ距半鐘	同	二導 燈高燈綠紅白 燈綠紅白	不動	高燈十 低燈九	高島三呎 低島三呎
安平	安平大樹ノ北西ノ	同	白	不動	十	三十七呎
旗後島	最高部	同	白	不動	十	百六十四呎

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達 光ノ期間 潤數	高潮上燈 火之高
鷺巒鼻 一名南岬	最南端ノ高潮界ヲ距 ル正北約五百五十碼	臺灣	一	白紅	不動	二十	百八十呎
漁翁島	島ノ南西端	澎湖 列島	一	白	不動	十五	二百五十呎
目斗嶼 一名北島		同	一	白	回轉	二十	
日本内海							
日ノ御崎	埼ノ外端	紀伊	一	白	回轉	三十秒	二百六十呎
友ヶ島	島ノ西端	同	一	白	不動	二十	百九十四呎
洲本燈 竿	港口南側	淡路	一	白	不動	七	二十八呎
堺	堺港埠頭ノ極端	和泉	一	綠	不動	八	潤半
木津川	大阪木津川口ノ東岸	攝津	一	紅	不動	九	潤四十呎
天保山	大阪安治川口砲臺	同	一	白	不動	十二	潤五十二呎

百四十八

突堤 掛燈浮標	安治川口南北突堤 ノ頭部	同	同	同	同	同	同	同	同	同
神戶燈 竿	神戶港東波止場	同	一	綠	不動	五	潤四十二呎			
和田岬	神戶港ヨリ南西ニ 當ル寄洲	同	一	紅	不動	十二	潤五十二呎			
平磯燈 掛	明石瀨戸東口ノ北 方平磯礁上	播磨	一	紅	不動	六	潤三十九呎			
江崎	島ノ北岬	淡路	一	白	不動	十七	潤百五十八呎			
飾磨港	飾磨港西波止場	播磨	一	白	不動	九	潤三十四呎			
鍋島	興島ノ南端ニ接近 セル小島	讃岐	一	白	不動	十五	潤八十五呎			
男木島	島ノ北端	同	一	白	回轉	十五秒	潤四十八呎			
波節岩燈 挂	岩上	同	一	白	不動	八	潤三十三呎			
百貫島	島ノ山上	伊豫	一	白	回轉	二十秒	潤二百四十呎			
大濱埼	因ノ島北端	備後	一	白	不動	八	潤五十二呎			

○東洋燈臺表

百四十九

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達ノ期間	湮數	高潮上燈火之高
長大夫燈	細島ノ北方立標上	備後	一	白	不動	...	八	湮二十二呎
小佐木島	島ノ北西端	安藝	一	白	不動	...	八	湮七十四呎
高根島	島ノ北西端	同	一	白	不動	...	八	湮百三十九呎
大久野島	島ノ南端	同	一	白	不動	...	九	湮五十六呎
蘇 <small>メバル</small> 崎	大崎上島ノ北東端	同	一	白	不動	...	八	湮百七十三呎
中野鼻	大崎上島ノ南東端	同	一	白	不動	...	八	湮百四十一呎
大下島	島ノ西端	伊豫	一	白	回轉	...	二十秒十六	湮百一十一呎
大濱	大濱ノ南口今治附近	同	一					
御代島燈	島ノ北端	同	一	白	不動	...	六	湮五十三呎
中渡島	島ノ北西端	同	一	白	不動	...	九	湮百二十六呎

コノ瀬燈	三津濱	釣島	根 <small>ナシ</small> 懸燈	部崎	關 <small>（填藏崎）</small> 崎	水ノ子島	大分燈	守江燈	金伏燈	壇ノ浦
來島海峽小島附近	北波止場ノ極端	興居島ノ西	情島ノ南東	下之關海峽ノ東口	崎上	佐伯灣ノ對面ニアル孤島	大分港埠頭	港口ノ洲上	下之關海峽金伏岩上	長門豐浦郡長府村
同	同	同	周防	豊前	豊後	同	同	同	長門	同
一	一	一		一			一	一	一	一
	白	白		白			白	白	白	白
	不動	不動		回轉			不動	不動	不動	不動
	...	...		十五秒十七			...	...	...	...
	九	二十		湮百二十二			八	八	八	六
	湮二十九呎	湮百八十六呎					湮四十一呎	湮三十二呎	湮二十七呎	湮五十二呎

○東洋燈臺表

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達高潮上燈 光ノ期間 湮數	火之高呎
赤間關燈高	赤間關市増ノ浦町丸山ノ山腹	長門	一	紅	不動	十六	六十五呎
同燈低	壇ノ浦町東端海岸	同	一	白	不動	六	四十呎
與治兵衛燈	下之關海峽與治兵衛岩上	同	一	紅	不動	六	十九呎
粗燈挂	下之關海峽粗岩上	同	一	白	不動	八	十九呎
高瀬燈挂	粗挂燈立標ノ南ノ東五纏半ノ淺洲上	同	一	：	明暗	：	十呎半
鳴瀬燈挂	下之關海峽航路ノ北方鳴瀬礁上	同	一	綠	不動	五	十七呎
壘場鼻	彦島ノ北西竹ノ子島ノ西端	同	一	白	不動	八	七十五呎
六連島	下之關海峽ノ西口同島ノ東端	同	一	白	不動	十五	八十九呎
大文字岩燈	岩	同	一	白	不動	八	四十五呎半

九州北岸及西岸

○東洋燈臺表

白洲	藍ノ島ノ南西ニ當ル低洲	豊前	一	白	閃光十	秒十一	湮半五十呎
博多	博多港	筑前	一	白	不動	十	湮四十呎
烏帽子島	肥前寧岐兩國間ノ孤島	筑前	一	白	不動	二十	湮百八十二呎
鷹島	呼子港口	肥前	一	白	不動	九	湮百五十六呎
三島	對馬ノ北端	對馬	一	白	不動	十	湮五十二呎
神埼	對馬ノ南端	同	一	白	不動	十六	湮百九十二呎
大立島	島	肥前	一	白	不動	九	湮二百六十呎
白瀬	瀬	同	一	白	不動	八	湮四十五呎
古志岐島	五島北端古志岐島	同	一	白	回轉三十秒	二十一	湮二百十二呎
大瀬崎	五島極南ノ一島福江島ノ南西端	同	一	白	回轉三十秒	二十三	湮二百六十呎
伊王島	長崎港口伊王島北端	同	一	白	不動	二十一	湮二百五呎

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達ノ期間	高潮上燈火之高
陸ノ尾島	長崎港口陸ノ尾島ノ北端	肥前	紅	不動	九	四十呎
口ノ津	島原灣口、口ノ津港ノ西岬	同	白	不動	十	百二十六呎
島原	島原灣口ノ北ナル小島	同	白	不動	九	百二十七呎
三角港	三角港北口西岸	肥後	白	不動	九	百二十九呎
戸馳島	島ノ南端	同	白	不動	十	百一呎
寺島	島ノ北東端ヨリ斗出セル礁上	同	白	不動	八	百二十七呎
上馬刀島	島	上	白	不動	八	百五十九呎
戸島	島ノ北東端上	同	白	不動	十	百五十二呎
長崎鼻	長島ノ南西端	薩摩	白	回轉	十秒	八十呎半
釣掛崎	下飯島ノ南端	同	白	回轉	一分二十八	四百六十

本洲北西岸

鹿兒島燈臺	鹿兒島市辨天砲臺	沖波止場	同	紅	不動	六	四十五呎
角島	油谷港口角島ノ北西端	長門	一	白	回轉	十秒十八	百四十二呎
馬島	島ノ西端	石見	一	白	連閃	十五秒十六	百九呎
地藏崎	崎上	出雲	一	白	回轉	三十秒二十三	二百七十
日ノ岬	釜川郡北西端	同					
境港	港口	伯耆	一	白	不動	九	五十呎
經ヶ岬	岬上	丹後	一	白	連閃	二十秒二十九	四百七十
立石	敦賀灣口ノ西端	越前	一	白	不動	十五	三百九十
上金石	上金石町字日和山	加賀	一	白	不動	九	五十九呎
大野	下金石町犀川口附近	同	一	紅	不動	六	七十八呎

○東洋燈臺表

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天氣達高潮上燈ノ期間	湮數	湮
祿剛崎	能登北東端	能登	一	白	不動	...	十八	湮百五十二呎半
伏木	伏木港別水川口ノ北西岸	越中	一	白	不動	...	十	湮三十八呎
姫崎	上	佐渡	一	白	不動	...	十	湮百三十六呎
新瀉	信濃川口ノ西岸	越後	一	白	不動	...	十	湮六十八呎
酒田	最上川口ノ南側	羽前	一	白	不動	...	九	湮五十四呎
船川	船川灣根ノ崎	羽後	一	白	不動	...	九	湮百四十一呎
入道崎	男鹿半島ノ北端	同	一	白	回轉十	...	秒二十	湮百八十三呎半
平館	陸奥海灣口明神崎	陸奥	一	白	閃光五	...	秒十四	湮六十九呎
尻矢崎	津輕海峽ノ東口	陸奥	一	白	回轉三十	...	秒十八	湮百五十呎

北洲西岸

熊崎	陸中	陸前	一	紅白	交閃十	...	秒十九	湮半百七十八呎
金華山	陸前極南ノ一島	同	一	紅	不動	...	六	湮百十八呎
萩ノ濱	萩ノ濱ノ北岸字	同	一	白	不動	...	八	湮五十二呎
石ノ巻	北上川口ノ東岸	同	一	白	閃光二十	...	秒二十三	湮二百六十呎
鹽屋崎	上	磐城	一	白	回轉三十	...	秒十九	湮百六十八呎
犬吠崎	下總ノ極東ナル山ノ南東端	下總	一	白	回轉三十	...	秒十九	湮百六十八呎
白神岬	松前郡炭燒澤村南端	渡島	一	紅白	回轉四十	...	秒十七	湮百二十呎
福山	福山港辨天島	同	一	白	不動	...	九	湮八十呎
鷗島	江刺港	同	一	白	不動	...	九	湮百四呎
稻穂岬	奥尻島北端稻穂岬	後志	一	白	回轉十五	...	秒十八	湮百五十呎

○東洋燈臺表



○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達ノ期間	高潮上燈火之高
辨慶岬	壽都港ノ西角	後志	白	不動	九	八十一呎
小樽燈	防波堤捨石極端即チボシ泊ヨリ距離六鏈	同	紅	...	...	...
神威崎	後志國北西端	同	白	回轉四十秒	十八	二百四十呎
日和山	高島郡極東端	同	白	不動	十五	百六十二呎半
石狩	石狩川口西岸	石狩	白	不動	九	四十八呎
增毛	增毛港	天鹽	白	不動	九	百三十四呎半
鴛泊	利尻島鴛泊灣ノ北西端(ベジノ鼻)	同	白	回轉十五秒	十四	二百三十八呎
北洲北岸及東岸						
宗谷岬	宗谷郡極北端	北見	白	回轉三十秒	十七	百三十二呎
稚内野寒岬	岬上	同	白	連閃十五秒	十八	百三十八呎

北洲南岸

辨天鳥燈	根室港	根室	紅不動	六	七十五呎
納沙布岬	根室極東端	同	白弧ヲ交	十	七十四呎
北洲南岸					
花咲港	根室南東端	同	白不動	六	八十七呎
落石崎	根室南東端	同	白回轉三十秒	十八	百六十八呎
厚岸	大黒島	釧路	白不動	十	三百六十呎
釧路崎	釧路崎	同	白回轉十五秒	十四	百四十五呎
襟裳崎	日高國南端	日高	白回轉三十秒	二十一	二百三十呎
幌泉	幌泉	同	紅不動	九	七十二呎
浦川	浦川	同	白不動	九	百二十八呎
室蘭	室蘭港口大黒島	膽振	白不動	九	百三十四呎

○東洋燈臺表

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ光ノ期間	晴天光達ノ距離	高潮上燈ノ高さ
惠山岬	龜田郡ノ東端	渡島	一	白	回轉	十五秒	十七哩	百四十四呎
汐首岬	龜田郡汐首岬	同	一	白	不動	...	十七哩	百五十呎
葛登支岬	函館港口ノ西側	同	一	白	明暗	二十秒	十七哩	百三十七呎
函館燈船	函館港辨天埼洲ノ北端	同	一	紅	不動	...	十哩	三十六呎
北東諸島								
クラムイ岬	國後島ノ南西端ケ	千島	一	白	回轉	十五秒	十二哩	四十五呎
安波移矢岬	國後島北東端安波移矢岬	同	一	白	回轉	三十秒	二十一哩	二百十七呎
朝鮮								
新草梁燈	新草梁村ノ北西	朝鮮南岸	二	紅白	不動	...	紅六哩 白十二哩	紅三十呎 白百呎
草梁燈	稅關ノ屋上及同關ノ前面	同	二	紅綠	不動	...	...	紅十八呎 綠五呎

黑龍沿岸州及堪察加

ナジモフ角	東側	エキスベ	一	白紅	不動	...	九	六十二呎
レチノイ島	緩芬河口ノ島上	大帝	一	白	不動	...	十六哩	百二十呎
浦潮斯德	浦潮斯德港ノ東	同	二	東燈綠 西燈紅	不動	...	...	十七呎
ガルドビ	浦潮斯德港ノ東	同	二	高燈紅 低燈白	不動	...	十三哩	高六十四呎 低五十七呎
エゲルセ	浦潮斯德港口エゲルセリド岬上	同	一	紅綠	不動	...	...	二十三呎
リド岬	浦潮斯德港口エゲルセリド岬上	同	一	紅	不動	...	十二哩	...
ボルトボ	アドミラルチー埠頭チ距ル約五鏈	同	二	紅	不動	...	...	...
ラリオン	角ノ外端	同	一	白紅 弧ヲ交分	不動	...	二十哩	百九十六呎
ツフ角	角ノ外端	同	二	上燈白 下燈紅 導燈	不動	...	十哩	上三十九呎 下三十三呎
ボスバロ	角ノ外端	同	一	白	不動	...	二十七哩	四百六呎
ツフ角	高四百呎ノ峻壁上	同	一	白	不動	...	十九哩	百七十三呎
スクリプ	島	同	一	白	不動	...	...	...

○東洋燈臺表

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈敷	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達ノ期間	湮數	高潮上燈火之高
スクリプ	島ノ北西側	伯德	一	紅導	不動	...	十七湮	百三十呎
アスコル	南角	同	一	白	閃光	一分	三十二湮	五百九十呎
メンシコ	バルラコータ港口ノ北側	海峽	一	...	...	...	...	...
ツフ角	バルラコータ港口ノ南方	同	一	白	連閃	二十秒	二十二湮	二百五十呎
セーント	バルラコータ港口ノ南方	同	一	白	連閃	二十秒	二十二湮	二百五十呎
ニコラス	角	同	一	白	連閃	二十秒	二十二湮	二百五十呎
カストリ	角(一名コイン)	同	一	白	連閃	二十秒	二十二湮	二百五十呎
ス灣	灣ノ西岸クリコツフ角附近	同	二	白導	不動	...	前十四湮 後八湮	二百六十呎
角燈竿	黒龍江ノ南側	同	二	白	...	...	...	...
アア	岬上	薩哈	一	白	閃光	三十秒	二十七湮	二百四十呎
哥爾薩港	アニワ灣ノ北濱	同	一	白	不動	...	十八湮	二百七十呎
ノトロ岬	岬上	海峽	一	白	不動	...	十七湮	百三十五呎

支那

澳門	グイア砲臺	廣東	一	白	回轉	十秒	二十湮	三百三十呎
タツチホリ	グイア砲臺	廣東	一	白	回轉	十秒	二十湮	三百三十呎
北挂燈標	タツチ、ホリ島ニ近キ二岩上	同	二	紅	不動	...	二湮	十五呎
南挂燈標	タツチ、ホリ島ニ近キ二岩上	同	一	綠	不動	...	一湮	十呎
黄浦障物	黄浦島ノ上端黄浦水道	同	二	紅綠	不動	...	...	...
カンプリ	黄浦水道黄浦直路	同	四	紅綠	不動	...	一湮	...
大石障物	北側	同	二	紅	不動	...	一湮	二十四呎
ハイアイ	ブレニム航門ハイ、アイランドノ直下邊	同	二	紅綠	不動	...	...	...
プリツダ	ブレニム航門コリ	同	四	紅綠	不動	...	一湮	...
障物	...	同	...	...	...	...	...	...

○東洋燈臺表

○東洋燈臺表

燈臺通號	設置之地	地方	燈數	燈色	燈質	回轉又ハ晴天光達ノ期間	湮數	高潮上燈火之高
長洲	沙嘴ノ南東側	廣東	四	紅綠	不動	...	...	...
香港	北角ノ南西四百五十碼ノ處	香港	二	紅	不動	...	...	...
橫欄嶼	嶼ノ南頂	...	一	白	連閃	三十秒	二十二秒	二百二十
馬尼洲	南端	...	一	白	回轉	三十秒	十八秒	四百四十
蓮花峰角	角上	汕頭	一	白紅	明暗	十秒	十九秒	百五十二

○東洋燈臺表

企望岬	岬	上	同	一	紅白	不動	...	紅八湮百七十一
棒糖島	島頂東端	同	一	白	明暗	三十秒	八	二百四十
南澎島	高島南	同	一	紅	不動	...	八	五十五
東椀島	島頂	廈門	一	白	閃光	三十秒	二十二	二百二十
青嶼	島ノ北	同	一	白紅	不動	...	...	...
大擔島	島ノ中心近傍	同	一	白	明暗	二十秒	十	三百
北椀島	島頂	同	一	白紅	明暗	三十秒	十八	四百十七
鳥邱嶼	高見即北西島ノ頂	福州	一	白	回轉	分	二十四	二百八十
牛山島	島頂	同	一	白	明暗	十五秒	二十三	二百五十
東犬島	島ノ北東端	同	一	白	閃光	三十秒	二十三	二百五十